

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 白絹病 *Sclerotium rolfsii*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 (依頼事項) 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生(接種) 8月5日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:ナカテユタカ 播種:2024年6月7日 露地栽培 栽植距離:畝間150cm×株間30cm 2条播き 条間:50cm

土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:8月15日スミチオン乳剤

施肥(/10a):〈元肥〉堆肥1200kg、苦土石灰200kg、CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)8kg、アグリエイトプラス(8-8-8)13kg、

苦土入り燐酸加里化成高度40号(0-20-20)40kg、〈追肥〉ファイン千代田(15-15-10)20kg

その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 9.0 m²(1.5m×3.0m×2 畝) 40 株 3 連制

1-I	2-I	3-I	2-II	3-II	1-II	3-III	1-III	2-III

1:カナメフロアブル 2:アフェットフロアブル 3:無処理

I、II、IIIは連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年7月23日、30日、8月14日および31日の計4回

(作物のステージ) 初回散布時:開花期(株径40~50cm)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて210L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 処理前後に影響のある降雨はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	7/23	24	25	26	27	28	29	30	31	8/1	2	3	4	5	6	7	8
平均気温(℃)	30.0	30.2	28.2	28.2	29.0	30.2	30.1	30.6	29.9	29.8	30.2	30.3	30.6	30.4	29.9	29.9	30.1
降水量(mm)	0.0	0.0	15.5	5.0	9.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

月日	8/9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
平均気温(℃)	30.0	30.1	30.3	29.8	29.6	29.6	30.1	30.9	29.9	29.6	26.8	29.2	29.6	29.8	29.5	29.7	29.7
降水量(mm)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	65.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

月日	8/26	27	28	29	30	31	9/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	27.8	27.6	26.4	26.9	27.5	29.6	28.0	27.9	27.2	27.0	27.2	27.5	27.7	27.6	27.2
降水量(mm)	58.0	40.0	221.0	68.5	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.0

観測地点:日植防宮崎試験場内露地

太枠は散布日

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:9月9日(最終散布9日後)

薬害試験:7月30日、8月14日、31日、9月9日

(調査方法) 各区全株について発病の有無を調査し発病株率を算出した。発病株率の平均より無処理に対する防除価を求めた。

防除価 = (1-処理区平均発病株率÷無処理区平均発病株率)×100

薬害は葉を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

7月25日(初回散布2日後)、フスマバーミキュライト培地で培養した白絹病菌(菌株:MSR1701)を培地ごと細かくほぐし、約6g/m²の割合で畝面にばらまいた。さらに、細断した稲わらを約10g/m²の割合で畝面にばらまき、土壌と軽く混和し株元に土寄せした。

3. 試験成績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査株数	発病株数	発病株率 (%)	防除価	薬害
							7/30,8/14,31,9/9
169) カナメフロアブル インピルキサム 37.0% Lot.No. 4205N	4000倍 散布	I	40	0	0		—
		II	40	0	0		—
		III	40	0	0		—
		平均			0	100	
対) アフェットフロアブル ベンチオビラト 20.0%	2000倍 散布	I	40	8	20.0		—
		II	40	5	12.5		—
		III	40	3	7.5		—
		平均			13.3	67.2	
無処理		I	40	16	40.0		
		II	40	18	45.0		
		III	38 [※]	14	36.8		
		平均			40.6		

※生育不良による欠株が生じたため調査株数が減少した。

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発生条件から試験を開始した。初回散布 2 日後に接種を行ったところ、接種 11 日後の 8 月 5 日に初発を確認した。その後病勢進展は緩慢であったが、調査時には無処理区で中発生となった。対照薬剤のアフェットフロアブルは防除効果が認められた。なお、全ての区において枯死株は認められなかった。

169) カナメフロアブル 4000 倍 散布 AAA-

本剤の 4000 倍散布は、対照薬剤のアフェットフロアブル 2000 倍散布と比較し優る防除効果が認められ、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

対 象 病 害 虫 名・学 名 さび病 *Puccinia kuehnii*, *P.melanocephala*

試験場名 鹿児島県農業開発総合センター大島支場 担当者氏名 湯田達也・尾川宜広

1. 試験目的(依頼事項) 防除効果および薬害の検討
2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県奄美市名瀬浦上町 場内ほ場
- 対象病害虫発生状況 少発生

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:はるのおうぎ 植付:2024年3月16日 露地栽培 栽培距離:畝間120cm, 株間15cm 1芽苗

施肥(10aあたり):きび一発くん(18-8-10)100kg 土性:重埴土 試験期間中の防除薬剤:なし

区制・面積・試験区の構成 1区 2.16 m²(1.2×1.8m) 12株 3連制

										1-I	2-I
	1-II						2-II				
		2-III				1-III					

1:イオウフロアブル 2:無処理

I, II, IIIは連制を示す

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年4月16日, 22日, 30日, 5月7日の計4回。

(作物のステージ) 生育期

(処理方法) 所定濃度に希釈した供試薬剤を, 肩掛け式電動噴霧器(GT-5HS)で10a当たり150L相当量を散布した。

(処理前後の降雨の影響) 4月22日の散布10時間後に11.0mmの降雨があったが, 薬液は乾いていたため影響はないと考えられる。

試験期間中の気象条件

月日	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30
平均気温(℃)	22.3	22.9	21.8	20.3	22.3	26.6	23.7	23.6	22.9	21.1	23.3	23.8	24.9	26.2	24.2
降水量(mm)	0.0	0.0	47.0	0.0	0.0	0.0	11.0	4.5	8.5	0.0	3.5	3.0	9.0	29.0	0.0

月日	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	5/6	5/7	5/8	5/9	5/10	5/11	5/12	5/13	5/14
平均気温(℃)	25.0	22.0	22.6	23.6	23.4	24.1	23.5	21.6	20.4	21.2	22.5	24.8	22.7	22.7
降水量(mm)	1.0	1.0	0.5	16.5	4.0	23.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	26.0	29.0	1.5

観測地点:鹿児島県奄美市名瀬のアメダスデータ 太枠は処理日を示す

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2024年4月30日, 5月7日, 14日

薬害試験:2024年4月22日, 30日, 5月7日, 14日

(調査方法) 各区9~10茎の半展開葉以上の全葉について下記の発病指数別に調査し, 発病葉率と発病度を算出した。防除価は, 発病度の平均値から求めた。

発病程度別調査基準(指数)

0:病斑面積率0%, 0.1:病斑面積率5%以下, 1:病斑面積率5~25%,

3:病斑面積率25~50%, 5:病斑面積率50%以上

発病度 = Σ(程度別発病葉数 × 指数) × 100 / (調査葉数 × 5)

薬害は, 茎葉を対象に肉眼で観察し, 薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

ー:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他

3. 試験成績

薬効試験

供試薬剤	希釈 倍数	連制	調査 茎数	4月30日			5月7日			5月14日									
				調査 葉数	発病 葉数	発病率 (%)	調査 葉数	発病 葉数	発病率 (%)	調査 葉数	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病 度	防除 価	
											0	0.1	1	3	5				
270) イオウフロアブル 硫黄 52.0% Lot. A2L05	500倍	I	10	26	0	0.0	32	3	9.4	37	35	2	0	0	0	5.4	0.1		
		II	9	35	1	2.9	44	5	11.4	51	46	5	0	0	0	9.8	0.2		
		III	10	46	4	8.7	59	8	13.6	66	59	7	0	0	0	10.6	0.2		
		平均				3.9			11.4							8.6	0.2	66.2	
無処理		I	10	35	0	0.0	40	4	10.0	44	29	15	0	0	0	34.1	0.7		
		II	10	43	2	4.7	55	4	7.3	69	56	13	0	0	0	18.8	0.4		
		III	10	45	2	4.4	55	7	12.7	64	49	15	0	0	0	23.4	0.5		
		平均				3.0			10.0							25.5	0.5		

薬害試験

供試薬剤	希釈 倍数	連制	調査日			
			4/22	4/30	5/7	5/14
270) イオウフロアブル	500倍	I	—	—	—	—
		II	—	—	—	—
		III	—	—	—	—

4. 考察

初発は4月30日に認め、5月14日(最終散布7日後)における無処理区の発病葉率は25.5%、発病度は0.5と少発生条件の試験となった。判定は、5月14日における発病度から算出した防除価を用いた。

270)イオウフロアブル 500倍 散布 —BB—

本剤の500倍散布は、無処理と比較して防除効果が認められた。実用性はあると考えられる。
薬害は認められなかった。

対 象 病 害 虫 名・学 名 さび病 *Puccinia kuehnii*, *P.melanocephala*

試験場名 鹿児島県農業開発総合センター熊毛支場 担当者氏名 上門 隆洋

1. 試 験 目 的 防除効果および薬害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 鹿児島県西之表市西之表 場内ほ場

対 象 病 害 虫 発 生 状 況 少発生(接種)

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:はるのおうぎ 株出栽培(露地) 株出し管理月日:2024年2月26日 追肥・培土月日:5月2日

植栽距離:畝幅140cm 株間30cm

施肥:基肥:N:P₂O₅:K₂O=0.90:1.50:0.75 kg/a BB200(N:P:K=12:20:10%)を使用

追肥:N:P₂O₅:K₂O=0.90:0.00:0.90 kg/a NK55(N:P:K=15:0:15%)を使用

土性:淡色黒ボク土

試験期間中の薬剤散布:5月2日にメイチュウ類を対象にプレパソン粒剤を6kg/10a 施用

区制・面積・試験区の構成 1区20.16㎡(1.2m×4畦×4.2m) 56株 3反復

1-I	2-I	1-II	2-II	1-III	2-III
-----	-----	------	------	-------	-------

1:イオウフロアブル 2:無処理

I, II, IIIは連制(反復)を示す

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024年4月16日, 22日, 30日, 5月7日, 14日の計5回。

(作物のステージ) 生育期

(処理方法) 所定濃度に希釈した薬液を, 背負い式動力噴霧機で10a当たり1000~2000相当量を散布した。

(処理前後の降雨影響) 4月22日の散布6時間後に5.5mmの降雨があったが, 薬液は乾いていたため影響はないと考えられる。

試験期間中の気象条件

月日	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30
気温	21.1	20.8	19.4	19.3	19.7	22.9	19.4	21.4	20.6	18.6	18.4	20.6	22.5	23.8	21.2
降水量(mm)	0.0	0.5	21.5	0.0	4.5	72.5	5.5	17.5	5.0	0.0	6.0	8.0	0.0	7.5	0.0

月日	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	5/6	5/7	5/8	5/9	5/10	5/11	5/12	5/13	5/14	5/15	5/16	5/17	5/18	5/19	5/20	5/21	5/22
気温	19.2	19.7	20.5	22.0	22.6	22.1	20.4	19.9	18.6	19.1	21.2	23.2	21.2	21.6	22.0	19.6	20.0	21.5	20.7	21.0	22.8	21.0
降水量(mm)	35.5	0.0	6.0	8.5	0.0	70.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	30.5	17.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	23.0

観測地点:鹿児島県種子島(西之表市)のアメダスデータ 太枠は処理日を示す

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2024年4月16日, 23日, 30日, 5月8日, 15日, 5月22日

薬害試験:2024年4月17日, 23日, 30日, 5月8日, 15日

(調査方法) 各区10茎の半展開葉以上の全葉について下記の発病程度別基準により調査し, 発病葉率と発病度を算出した。防除価は, 発病度の平均値から求めた。

発病程度別調査基準(指数)

0:病斑面積率0%, 0.1:病斑面積率5%以下, 1:病斑面積率5~25%,

3:病斑面積率25~50%, 5:病斑面積率50%以上

発病度 = Σ (程度別発病葉数 × 指数) × 100 / (調査葉数 × 5)

防除価: (無処理区発病度 - 処理区発病度) / 無処理区発病度 × 100

薬害は, 茎葉を対象に調査時に肉眼により薬害症状の有無を以下の内容で観察した。

ー:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他

発病を促すため, 4月17日に現地夏植えほ場から採取した発病株を各区に2株ずつ植付けた。

対 象 病 害 虫 名 さび病・学 名 *P.kuehnii*, *P.melanocephala*

試験場名 鹿児島県農業開発総合センター熊毛支場

3. 試験成績

薬効試験

供試薬剤	希釈 倍数	連制 (反復)	調査 茎数	4/16		4/23		4/30		5/8		5/15		5/22										防除値
				調査 葉数	発病 葉率	調査 葉数	発病 葉率	調査 葉数	発病 葉率	調査 葉数	発病 葉率	調査 葉数	発病 葉率	調査 葉数	発病程度別葉数					発病 葉率	発病度			
															0	0.1	1	3	5					
270) イオウフロアブル 硫黄52.0% Lot.A2L05	500倍	I	10	41	0.0	52	0.0	64	0.0	74	10.7	86	10.9	81	33	45	3	0	0	59.2	1.9			
		II	10	41	0.0	45	0.0	61	4.2	72	11.3	83	20.6	74	27	44	3	0	0	63.4	2.0			
		III	10	44	0.0	46	0.0	62	1.4	78	12.8	73	19.7	77	24	50	3	0	0	69.2	2.1			
		平均			0.0	0.0		1.9		11.6		17.1								63.9	2.0 ± 0.1	65.5		
無処理	—	I	10	48	0.0	43	0.0	63	12.9	74	27.3	79	39.4	72	22	37	11	2	0	66.6	5.8			
		II	10	41	0.0	45	0.0	60	12.1	70	17.2	80	34.6	77	20	47	7	3	0	74.1	5.4			
		III	10	42	0.0	44	0.0	62	15.8	68	22.0	79	30.5	81	13	56	8	4	0	83.5	6.3			
		平均			0.0	0.0		13.6		22.2		34.9								74.7	5.8 ± 0.3	—		

1)発病度: Σ (程度別発病葉数×指数) × 100 / (調査葉数×5), 平均値±標準誤差
2)防除値: (無処理区発病度－処理区発病度) / 無処理区発病度 × 100

薬害試験

供試薬剤	希釈 倍数	連制	調査日				
			4/17	4/23	4/30	5/8	5/15
270) イオウフロアブル 硫黄52.0% Lot.A2L05	500倍	I	—	—	—	—	—
		II	—	—	—	—	—
		III	—	—	—	—	—

4. 考 察

薬剤散布を開始した4月 16 日の調査では発病を認めず、翌日 17 日に発病株を植付けて 13 日後の4月 30 日に試験区と無処理区の両区で初めて発病を確認した。最終調査5月 22 日の無処理区での発病葉率は 74.7%, 発病度は 5.8 と少発生条件下での試験となった。判定は、同日の発病度で算出した防除値を用いた。

270) イオウフロアブル 500 倍散布 -BB-

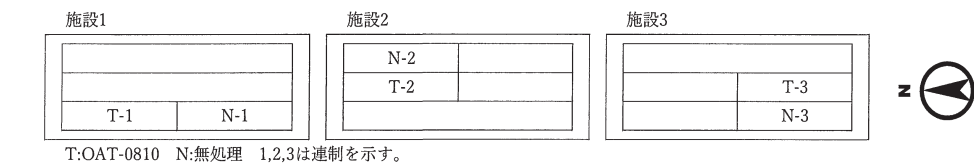
本剤の 500 倍散布は、無処理区と比較して除効果が認められた。実用性はあると考えられる。
薬害は認められなかった。

担当者氏名 柿元一樹・濱島朗子

1. 試 験 目 的 防除効果及び被害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市上福元町社内圃場
- 対 象 病 害 虫 発 生 状 況 甚発生 初発:2024 年 9 月 16 日(定植 28 日後)
- 耕種概要

品種:PC 筑陽 播種日:2024 年 7 月 16 日 鉢上げ日:2024 年 8 月 4 日 定植:8 月 19 日 栽植距離:畝間 160cm
株間 40cm 1 条植え 主枝 4 本仕立て 施設栽培 土性:中粒質普通低地水田土 試験期間中の防除薬剤:なし
施肥:慣行 育苗:50 穴セルトレイ, 3 号ポット(直径 9cm) 培土:タキイ種まき培土およびタキイ育苗培土

区制・面積・試験区の構成 1 区 6.4 m² (1.6m×4m) 10 株/区 3 連制



処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 8 月 16 日(定植 3 日前), 8 月 19 日(定植後)
(処理時の作物のステージ) 生育初期(第一花開花期;草丈約 35cm, 葉数約 8 枚)
(処理方法)

時期	処理方法
定植 3 日前	1,000 倍に希釈した薬液(50mL/ポット)を計量カップにより灌注した。
定植後	1,000 倍に希釈した薬液(200mL/株)をなすの定植後にビーカーを用いて株元灌注した。

(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	8/16	8/17	8/18	8/19	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26	8/27	8/28	8/29	8/30	8/31	9/1	9/2	9/3	9/4	9/5	9/6	9/7	9/8
平均気温(℃)	31.0	32.6	32.5	27.5	32.0	32.8	33.1	31.6	32.3	32.7	31.9	30.2	26.8	26.6	26.6	28.0	28.2	28.0	29.7	29.7	29.1	30.8	30.8	31.3
月日	9/9	9/10	9/11	9/12	9/13	9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	9/19	9/20	9/21	9/22	9/23	9/24	9/25	9/26	9/27	9/28	9/29	9/30	10/1	
平均気温(℃)	29.4	28.0	30.6	30.9	29.7	29.4	30.5	31.4	30.6	31.2	30.9	30.8	28.7	27.2	23.9	27.1	27.1	28.3	28.5	27.9	28.4	28.1	27.8	
観測地点:試験施設内													太枠内は処理日を示す											

調査月日・方法

(調査月日) 2024 年 8 月 26 日(処理開始 10 日後;定植 7 日後), 9 月 2 日(処理開始 17 日後;定植 14 日後), 9 月 9 日(処理開始 24 日後;定植 21 日後), 9 月 16 日(処理開始 31 日後;定植 28 日後), 9 月 24 日(処理開始 39 日後;定植 36 日後), 10 月 1 日(処理開始 46 日後;定植 43 日後)

(調査方法) 各区の全株を目視により観察し, 下記の程度別に株数を計数した。

発病程度指数

「0」:発病なし,「1」:茎頂部がしおれる,「2」:葉がしおれる,「3」:株全体が青枯症状,「4」:枯死

発病度の算出は下記に従った。

発病度=(1×「1」の株数+2×「2」の株数+3×「3」の株数+4×「4」の株数)/(4×調査株数)×100

薬害評価にあたっては, 薬効調査時に株全体の薬害症状を以下の基準により肉眼で観察した。

ー:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

本病の初発は定植から 28 日後の 9 月 16 日であった。以後被害は急速に進展し, 最終調査時には甚発生であった。

対象病害虫名 青枯病 *Ralstonia solanacearum*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

3. 試 験 成 績

なすの青枯病発生程度と推移

供試薬剤	処理濃度 処理量 処理方法	連制	調査項目、調査日、処理後経過日数 1)											
			8月26日、9月2日、9月9日						9月16日					
			定植7日、14日、21日後						処理開始31日後；定植28日後					
			調査 発病程度別株数 2)						調査 発病程度別株数 2)					
			調査 株数	発病度				発病 株数	発病株率 (%)	調査 株数	発病度			
				0	1	2	3				0	1	2	3
141) OAT-0810 新規化合物A 7.1% 新規化合物B 8.0% 新規化合物C 12.0% 新規化合物D 7.2% Lot. 1LA02	下記脚注参照 3)	1	10	10	0	0	0	0	0	10	8	0	0	2
		2	10	10	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0
		3	10	10	0	0	0	0	0	10	9	1	0	0
		計/平均	30	30	0	0	0	0	0	30	27	1	0	2
		防除価												59.2
無処理	—	1	10	10	0	0	0	0	0	10	5	2	2	1
		2	10	10	0	0	0	0	0	10	9	0	0	1
		3	10	10	0	0	0	0	0	10	7	1	2	0
		計/平均	30	30	0	0	0	0	0	30	21	3	4	2
		防除価												

供試薬剤	処理濃度 処理量 処理方法	連制	調査項目，調査日，処理後経過日数 1)															葉害 8/26,9/2 9/9,9/16 9/24,10/1			
			9月24日							10月1日											
			処理後経過日数																		
			処理開始39日後；定植36日後							処理開始46日後；定植43日後											
			調査 株数	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病株率 (%)	調査 株数	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病株率 (%)					
			0	1	2	3	4	発病度	0	1	2	3	4	発病度	株数	(%)					
141) OAT-0810	下記脚注参照	1	10	4	4	0	0	2	30.0	6	60.0	10	0	1	5	1	3	65.0	10	100	—
新規化合物A 7.1% 新規化合物B 8.0%	3)	2	10	10	0	0	0	0	0	0	0.0	10	9	1	0	0	0	2.5	1	10.0	—
新規化合物C 12.0% 新規化合物D 7.2%		3	10	5	1	2	1	1	30.0	5	50.0	10	4	0	0	1	5	57.5	6	60.0	—
Lot.		計/平均	30	19	5	2	1	3	20.0	11	36.7	30	13	2	5	2	8	41.7	17	56.7	
1LA02		防除価							47.8									43.2			
無処理	—	1	10	4	0	2	3	1	42.5	6	60.0	10	0	0	2	2	6	85.0	10	100	
		2	10	8	1	1	0	0	7.5	2	20.0	10	3	1	1	2	3	52.5	7	70.0	
		3	10	3	0	0	2	5	65.0	7	70.0	10	1	0	1	1	7	82.5	9	90.0	
		計/平均	30	15	1	3	5	6	38.3	15	50.0	30	4	1	4	5	16	73.3	26	86.7	
		防除価																			

1) 薬剤処理日：8月16日、8月19日（定植後）

2) 発病程度 「0」：発病なし 「1」：茎頂のしおれ 「2」：葉のしおれ、「3」：株全体の青枯症状、「4」：枯死

3) 1,000倍希釈液 定植3日前 50mL/株；ポット灌注（3号ポット）＋定植後200mL/株；株元灌注

4. 考 察

なすの青枯病に対する OAT-0810 の効果は、最終調査時(10 月 1 日)における被害度から算出した防除価に基づき難防除病害であることを考慮して判定した。

141) OAT-0810 1,000 倍希釈液 定植 3 日前 50mL/株;ポット灌注＋定植後 200mL/株;株元灌注 -BB-

本剤;1,000 倍希釈液の定植 3 日前 50mL/株;ポット灌注および定植後 200mL/株;株元灌注の効果は、無処理区と比較して効果はある。実用性はあると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 一般社団法人日本植物防疫協会宮崎試験場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 12月21日初発を確認。

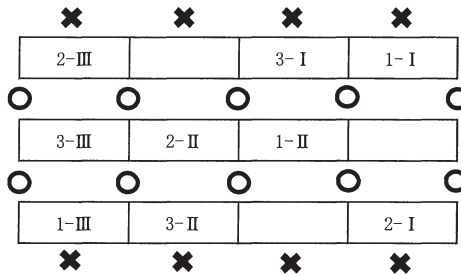
耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:PC 筑陽 播種:2023年8月9日 定植:10月6日 施設栽培 土性:壤土 栽植距離:畝間160cm 株間40cm 1条植え
主枝3本仕立て 施肥(10a当たり):堆肥3000kg 苦土石灰160kg くみあい有機入りペレット888(8-8-8)125kg CDU複合燐
加安特S222(12-12-12)83kg

試験期間中の防除薬剤:12月13日モレスタン水和剤、アグリメック、ウララDF、12月18日トランスフォームフロアブル、チェス顆
粒水和剤、12月27日グレーシア乳剤、モレスタン水和剤、2024年1月4日ファインセーブフロアブル

その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区7.0㎡(1.6m×4.4m) 11株 3連制



1:CAF-2001SC

2:ゲッター水和剤

3:無処理

I、II、IIIは連制を示す。

空欄は他剤処理区を示す。

○は12/8～23に設置した感染源を示す。

×は12/30～1/10に追加で設置した感染源を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2023年12月7日、14日、21日、30日および2024年1月11日の計5回。

(作物のステージ) 初回処理時:収穫期、草丈100～110cm 最終処理時:収穫期、草丈120～140cm

(処理方法) 背負式バッテリー噴霧機(MSB1510Li 丸山製作所)を使用して、260L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	12/7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
平均気温(℃)	20.4	19.1	17.0	20.3	17.7	20.9	19.0	19.7	22.0	17.7	17.3	16.8	11.3	16.1	16.9
月日	12/22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1/1	2	3	4	5
平均気温(℃)	17.5	17.7	16.0	17.7	18.0	18.1	17.3	19.0	16.9	18.5	18.8	19.4	14.8	17.7	17.6
月日	1/6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
平均気温(℃)	17.3	16.5	16.5	15.1	14.0	17.4	18.1	17.9	18.7	18.3	17.5	18.6	16.4		

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:12月15日(2回目処理翌日)、19日、23日、26日、30日、

2024年1月3日、7日、11日、15日および18日(最終処理7日後)

薬害試験:12月14日(初回処理7日後)、21日、30日、2024年1月11日および18日

(調査方法) 各試験区全株の果実について、発病果および収穫に達した果実を数え(調査果は除去)、最終調査時には幼果を含む全着生果について発病の有無を調査し、発病果率を算出した。発病果率の平均値より無処理に対する防除価を求めた。

防除価 = (1-処理区平均発病果率÷無処理区平均発病果率)×100

薬害は、茎葉および花・果実を対象に、肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

－：薬害を認めない ＋：軽微な薬害症状を認める ＋＋：中程度の薬害症状を認める

＋＋＋：重度の薬害症状を認める

汚れは、茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し、汚れの有無を以下の内容で評価した。

(－)：汚れを認めない (±)：軽微な汚れを認める (+)：実用上問題となる程度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

感染源を圃場内に均等に接するように、12月8日(初回処理翌日)に6個設置し、12月19日、23日に各日2個感染源を追加した(「区制・面積・試験区の構成」参照)。さらに、12月30日、1月10日にそれぞれ4個感染源を追加した(「区制・面積・試験区の構成」参照)。感染源は、土壌を充填した素焼き鉢に菌核を浅く埋没させ子嚢盤を形成させたものを使用した。菌核の作製には、場内保存株(MSS0204)を使用した。

3. 試 験 成 績

薬効調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査果数	調査日毎の発病果数											発病果数 合計	発病果率 (%)	防除価
				12/15	12/19	12/23	12/26	12/30	1/3	1/7	1/11	1/15	1/18				
7) CAF-2001SC 新規化合物 75g/L Lot.No. ENBK-176488-070	1000倍 散布	I	206	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	4	1.9		
		II	178	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.6		
		III	195	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	4	2.1		
		平均	193.0												1.5	76.6	
対) ゲッター水和剤 ジエトフェンカルブ12.5% チオファネートメチル 52.5%	1500倍 散布	I	180	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.6		
		II	186	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	1.1		
		III	188	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.5		
		平均	184.7												0.7	89.1	
無処理		I	235	0	0	0	2	0	0	0	3	7	6	18	7.7		
		II	195	0	0	0	0	1	1	0	4	3	4	13	6.7		
		III	193	0	0	0	2	0	1	0	1	3	2	9	4.7		
		平均	207.7												6.4		

薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	薬害調査結果※		汚れ調査結果※	
			茎葉	花・果実	茎葉	果実
7) CAF-2001SC	1000倍 散布	I	－	－	(－)	(－)
		II	－	－	(－)	(－)
		III	－	－	(－)	(－)
対) ゲッター水和剤	1500倍 散布	I	－	－	(－)	(±)
		II	－	－	(－)	(±)
		III	－	－	(－)	(±)
無処理		I				
		II				
		III				

※薬害・汚れ調査日：12月14日,21日,30日,1月11日,18日

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

初回処理翌日に感染源を設置したが発病が認められず、12月19日に感染源を追加し発病を促したところ、12月21日に緩衝株にて初発を認めた。しかし、病勢が緩慢だったため、12月23日、30日、1月10日にさらに追加接種を行った。結果、1月18日の最終調査時には無処理区の発病程度は少発生となった。

以上のような条件において、対照薬剤のゲッター水和剤は高い防除効果を示した。また、果実において灰色斑点状の汚れが認められた。汚れの程度は軽微であり、容易に拭き取ることができた。

7) CAF-2001SC 1000倍散布 CBB-

本剤の1000倍散布は、対照薬剤のゲッター水和剤1500倍散布と比較して防除効果がやや劣り、無処理区と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

本剤散布による薬害、汚れは認められなかった。

対象病害虫名・学名 黒枯病 *Corynespora cassiicola*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生 5月2日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:PC 筑陽 播種:2023年12月27日 定植:2024年3月14日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間40cm

1条植え 主枝3本仕立て 土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:5月7日モスピラン顆粒水溶剤・グレース乳剤、

5月15日トランスフォームフロアブル・ディアナ SC、5月23日アグリメック 施肥、その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.5 m² (1.6m×2.8m) 7株(21主枝) 3連制

3-I	2-I	1-II			
1-I		3-II		2-III	
		2-II	3-III		1-III

1:オーソサイド水和剤80
2:ダコニール1000(対照)
3:無処理

I、II、III:連制
空欄:他剤散布区

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年4月25日、5月2日、10日および17日の計4回
(作物のステージ) 初回散布時:収穫期(草丈120cm)、最終散布時:収穫期(草丈150~160cm)
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて220~300L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	4/25	26	27	28	29	30	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	24.2	21.1	21.6	25.3	23.4	27.4	22.6	23.2	24.6	23.2	23.7	22.7	23.6	22.4	23.5

月日	5/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
平均気温(℃)	23.7	24.9	22.8	22.6	24.6	24.7	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8	22.4	26.3	27.7

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:5月25日(最終散布8日後)
薬害試験:5月2日、10日、17日、25日
(調査方法) 各区全株の主枝について、70~120 cm付近の任意の5葉(計105葉)を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める
2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める
発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
- :薬害を認めない + :軽微な薬害症状を認める ++ :中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価	薬害
				0	1	2	3	4				5/2,10,17,25
31) オースサイド水和剤80 キャプタン 80.0%	800倍 散布	I	105	94	10	1	0	0	10.5	2.9		—
		II	105	100	5	0	0	0	4.8	1.2		—
		III	105	93	11	1	0	0	11.4	3.1		—
		平均							8.9	2.4	90.1	
対)ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	105	101	4	0	0	0	3.8	1.0		—
		II	105	102	3	0	0	0	2.9	0.7		—
		III	105	99	6	0	0	0	5.7	1.4		—
		平均							4.1	1.0	95.9	
無処理		I	105	26	54	25	0	0	75.2	24.8		
		II	105	20	63	19	3	0	81.0	26.2		
		III	105	29	60	16	0	0	72.4	21.9		
		平均							76.2	24.3		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始した。初発を2回目散布時に下位葉で確認し、その後は上位葉へと徐々に進展した。調査時には無処理区において中発生となった。対照薬剤のダコニール 1000 は高い防除効果が認められた。

31) オースサイド水和剤 80 800 倍散布 BAA -

本剤の 800 倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 すすかび病 *Mycovellosiella natrassii*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生(接種) 5月17日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:PC 筑陽 播種:2023年12月27日 定植:2024年3月14日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間40cm

1条植え 主枝3本仕立て 土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:5月7日モスピラン顆粒水溶剤・グレース乳剤、
5月15日トランスフォームフロアブル・ディアナSC、5月23日アグリメック 施肥、その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.5㎡(1.6m×2.8m) 7株(21主枝) 3連制

1-I	4-I	3-I	2-II			
	2-I	1-II	4-II		3-III	
			3-II	4-III	1-III	2-III

1:AKD-5195 SC
2:オーソサイド水和剤80
3:ダコニール1000(対照)
4:無処理

I、II、III:連制
空欄:他剤散布区
◆:4/26に設置した伝染源

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年4月25日、5月2日、10日および17日の計4回
(作物のステージ) 初回散布時:収穫期(草丈120cm)、最終散布時:収穫期(草丈150~160cm)
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて220~300L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	4/25	26	27	28	29	30	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	24.2	21.1	21.6	25.3	23.4	27.4	22.6	23.2	24.6	23.2	23.7	22.7	23.6	22.4	23.5

月日	5/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
平均気温(℃)	23.7	24.9	22.8	22.6	24.6	24.7	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8	22.4	26.3	27.7

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、被害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:5月25日(最終散布8日後)
薬害試験:5月2日、10日、17日、25日
(調査方法) 各区全株の主枝について、50~100cm付近の任意の5葉(計105葉)を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除値を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める
2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める
発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
防除値 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
- :薬害を認めない + :軽微な薬害症状を認める ++ :中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

4月26日(初回散布翌日)、事前に作製したなす罹病苗を区境に設けた緩衝株の株元に設置した(試験区配置図参照)。感染源の作製には場内で自然発生したなす罹病葉を用いた。試験期間中は苗が乾かないよう適宜灌水した。

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害 5/2,10,17,25
				0	1	2	3	4				
1) AKD-5195SC アミピリフェン 30%(w/w) Lot.No. BC-2	2000倍 散布	I	105	43	53	8	1	0	59.0	17.1		—
		II	105	35	52	18	0	0	66.7	21.0		—
		III	105	52	47	5	1	0	50.5	14.3		—
		平均							58.7	17.5	62.0	
31) オーンサイド水和剤80 キャプタン 80.0% Lot.No. 4J089F	800倍 散布	I	105	81	19	5	0	0	22.9	6.9		—
		II	105	96	9	0	0	0	8.6	2.1		—
		III	105	83	21	1	0	0	21.0	5.5		—
		平均							17.5	4.8	89.6	
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	105	105	0	0	0	0	0	0		—
		II	105	104	1	0	0	0	1.0	0.2		—
		III	105	104	1	0	0	0	1.0	0.2		—
		平均							0.7	0.1	99.8	
無処理		I	105	16	28	40	17	4	84.8	41.7		
		II	105	1	26	49	23	6	99.0	51.7		
		III	105	8	22	59	16	0	92.4	44.8		
		平均							92.1	46.1		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始した。4月26日(初回散布翌日)に感染源を設置し、接種21日後の5月17日に初発を確認した。調査時には無処理区において多発生となった。対照薬剤のダコニール1000は高い防除効果が認められた。

1) AKD-5195SC 2000倍散布 DCC -

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のダコニール1000 1000倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められるもののその程度はやや低かった。防除効果はやや低い実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

31) オーンサイド水和剤80 800倍散布 CAA -

本剤の800倍散布は、対照薬剤のダコニール1000 1000倍散布と比較し防除効果はやや劣り、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名 うどんこ病 未同定

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

担当者氏名 濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町

対象病害虫発生状況 少発生(自然発生, 初発 11 月 17 日)

耕種概要

品種:購入苗のため不明 定植日:2023 年 9 月 20 日

栽植距離:畝間 160cm 株間 40cm 1 条植え 施設栽培 土性:砂壤土

試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 5.76 m² (1.6m×3.6m) 9 株/区 3 連制

		3-I
		2-I
		1-I

入口



1:KIF-28FL
2:モレスタン水和剤
3:無処理
I, II, IIIは連制を示す

		3-II
	1-II	2-II

入口

		1-III
	2-III	3-III

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2023 年 11 月 23 日, 30 日, 12 月 9 日 3 回

(処理時の作物のステージ) 収穫期

(処理方法) 背負い式電動噴霧器(HG-KBS12L)を用いて, 200L/10a の割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響なし

試験期間中の気象条件

月日	11/23	11/24	11/25	11/26	11/27	11/28	11/29	11/30	12/1	12/2	12/3	12/4	12/5
平均気温(℃)	22.6	20.9	17.7	18.3	23.4	20.6	20.0	18.5	18.3	20.8	20.7	21.3	20.4
月日	12/6	12/7	12/8	12/9	12/10	12/11	12/12	12/13	12/14	12/15	12/16	12/17	12/18
平均気温(℃)	21.5	20.7	22.6	20.5	22.4	19.4	20.2	22.3	21.4	20.6	19.1	18.7	18.9
観測地点:試験施設内	太枠内は散布日を示す												

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2023 年 12 月 18 日(3 回目散布 9 日後)

薬害試験:2023 年 11 月 30 日, 12 月 9 日, 18 日

(調査方法) 各区両端を除く全株の第 1 着果より上位 14~15 葉ずつ合計 100 葉の発病を以下の基準に従って調査し、発病率と発病度を算出し、発病度から防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:病斑面積が葉面積の 5~25%未満を占める

3:病斑面積が葉面積の 25~50%未満を占める 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める

発病度 = Σ (指数 × 程度別発病葉数) × 100 / (調査葉数 × 4) 防除価 = 100 - 処理区の発病度 / 無処理区の発病度 × 100

薬害評価にあたっては、薬効調査時に茎葉と果実の薬害症状を以下の基準により調査した。

- :薬害を認めない。+ :軽微な薬害症状を認める。++ :中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

対象病害虫名 うどんこ病 未同定

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

3. 試験成績

薬効・薬害試験

供試薬剤	処理方法※	連制	調査 葉数	12/18(3回目散布9日後)							薬害	
				指数別発病葉数					発病 葉率	発病 度	防除 価	11/30, 12/9,18
				0	1	2	3	4				
27)KIF-28FL 硫黄12.5%,塩基性塩化銅30.5%	1000倍 散布	I	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		II	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		III	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		平均							0	0	100	
Lot.23-026F 対)モレスタン水和剤 キノキサリン系25.0%	3000倍 散布	I	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		II	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		III	100	100	0	0	0	0	0	0		-
		平均							0	0	100	
無処理	—	I	100	77	23	0	0	0	23.0	5.8		
		II	100	79	21	0	0	0	21.0	5.3		
		III	100	40	59	1	0	0	60.0	15.3		
		平均							34.7	8.8		

※散布日:11/23, 30, 12/9

4. 考察

11 月 17 日に自然発生で初発が確認され、罹病葉を除去し、11 月 23 日に試験を開始した結果、3 回目散布 9 日後の調査では、無処理区では発病葉率 34.7%、発病度 8.8 と少発生となり、対照薬剤のモレスタン水和剤では防除価が 100 と高い効果が認められていたため、本試験による効果の判定は可能と判断した。効果の判定は、3 回目散布 9 日後の 12 月 18 日の発病度から算出した防除価で評価した。

27)KIF-28FL 1000 倍 BAA-

本剤の 1000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較して同等の効果が認められ、無処理区と比較して効果は高いと考えられる。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 ・ 未同定

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 5月17日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:PC 筑陽 播種:2023年12月27日 定植:2024年3月14日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間40cm

1条植え 主枝3本仕立て 土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:5月7日モスピラン顆粒水溶剤・グレーシア乳剤、

5月15日トランスフォームフロアブル・ディアナ SC、5月23日アグリメック 施肥、その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.5 m²(1.6m×2.8m) 7株(21主枝) 3連制

	3-I	2-I				1-III
●	●	●	●	●	●	●
			3-II	1-II	2-III	
●	●	●	●	●	●	●
1-I			2-II	3-III		

1:ピタイチ
2:ダコニール1000(対照)
3:無処理

I、II、III:連制
空欄:他剤散布区
●:5/2に設置した伝染源

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年4月25日、5月2日、10日および17日の計4回

(作物のステージ) 初回散布時:収穫期(草丈120cm)、最終散布時:収穫期(草丈150~160cm)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて220~300L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	4/25	26	27	28	29	30	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	24.2	21.1	21.6	25.3	23.4	27.4	22.6	23.2	24.6	23.2	23.7	22.7	23.6	22.4	23.5

月日	5/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
平均気温(℃)	23.7	24.9	22.8	22.6	24.6	24.7	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8	22.4	26.3	27.7

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:5月25日(最終散布8日後)

薬害試験:5月2日、10日、17日、25日

(調査方法) 各区全株の主枝について、70~120 cm付近の任意の7葉(計147葉)を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める
2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める
発病度 = Σ(発病指数別葉数×発病指数)÷(調査葉数×4)×100
防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

一:薬害を認めない 十:軽微な薬害症状を認める 十十:中程度の薬害症状を認める
十十十:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

5月2日(2回目散布の薬液が乾いた後)、事前に作製したなす罹病苗を網袋に入れ区境16箇所の高さ120 cm付近に吊した(試験区配置図参照)。感染源の作製には場内で自然発生したなす罹病葉を用いた。試験期間中は苗が乾かないよう適宜灌水した。

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害
				0	1	2	3	4				5/2,10,17,25
274) ピタイチ グリセリン酸脂肪酸 エステル 50.0% Lot.No. 4104N	500倍 散布	I	147	145	2	0	0	0	1.4	0.3		—
		II	147	143	4	0	0	0	2.7	0.7		—
		III	147	146	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		平均							1.6	0.4	95.3	
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	147	146	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		II	147	146	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		III	147	147	0	0	0	0	0	0		—
		平均							0.5	0.1	98.8	
無処理		I	147	113	29	5	0	0	23.1	6.6		
		II	147	98	35	14	0	0	33.3	10.7		
		III	147	105	36	6	0	0	28.6	8.2		
		平均							28.3	8.5		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始した。5月2日(2回目散布後)に感染源を設置し、接種15日後の5月17日に初発を確認した。調査時には無処理区において少発生となった。対照薬剤のダコニール1000は高い防除効果が認められた。

防除効果の判定は少発生を考慮した。

274) ピタイチ 500倍散布 BAB -

本剤の500倍散布は、対照薬剤のダコニール1000 1000倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 苗立枯病 *Rhizoctonia solani*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生(接種) 初発:10月2日

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:桃太郎 播種:2024年9月25日 72穴セルトレイ(30cm×60cm)育苗 培土:ポット床土2号(菱東肥料株式会社)

土性:不明 培土量:約3.2L/トレイ 施設栽培(育苗ベンチ上で管理) 出芽始め:9月29日 出芽揃い:10月2日

試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:なし その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 0.18 m²(30cm×60cm) 72穴セルトレイ1枚 3連制 ※無処理・無接種のみ1連制

	1-Ⅲ	2-Ⅲ	3-Ⅲ	4-Ⅲ	1:SB-390WG×2000
					2:SB-390WG×4000
5-I	3-II	1-II	4-II	2-II	3:ダコニール1000(対照)
					4:無処理・接種
	2-I	4-I	1-I	3-I	5:無処理・無接種
					I、II、Ⅲは連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年9月25日(播種当日)

(作物のステージ) 播種覆土直後

(処理方法) 所定濃度に調整した薬液を、ジョウロ(トンボじょうろ、容量:4L、ノズル:農薬散布用ハスの実、新輝合成株式会社)を用いてSB-390WG区は0.5L/セルトレイ、ダコニール1000区は3L/m²の割合で灌注した。

無処理区には同散布機具を用いて0.5L/セルトレイの割合で水道水を灌注した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	9/25	26	27	28	29	30
平均気温(℃)	27.0	26.7	28.0	27.2	26.5	26.4

月日	10/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平均気温(℃)	27.8	25.5	24.6	22.7	24.4	26.1	25.8	25.0	24.1	24.3	24.3	23.9	24.9	24.7	25.9

観測地点:日植防宮崎試験場内施設

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:9月30日、10月2日、5日、9日(播種14日後)

薬害試験:9月30日、10月2日、5日、9日(播種14日後)、15日(健全培土における出芽率)

(調査方法) 各区全株について出芽および発病の有無を調査し(発病株は調査日毎に除去)、健全株率を算出した。これを無処理無接種の出芽率で補正し、補正健全株率および補正発病株率を算出した。補正発病株率の平均より無処理に対する防除価を求めた。

$$\text{補正健全株率(\%)} = \text{処理区の健全株率} / \text{無処理・無接種の健全株率(平均)} \times 100$$

$$\text{補正発病株率(\%)} = 100 - \text{補正健全株率}$$

薬害は茎葉を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。また、健全培土における出芽率を、10月8日に播種・処理し10月15日に調査した(各区72穴セルトレイ1/2枚 30株1連制)。

一:薬害を認めない 十:軽微な薬害症状を認める 十十:中程度の薬害症状を認める

十十十:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

苗立枯病原菌(*Rhizoctonia solani*, AG4 IIIA 場内保存菌株)を土壌フスマ培地で培養後、手で細かくほぐしたものを、0.6%(v/v)で培土に混和し汚染土とした。汚染土の作製は播種当日に行った。

3. 試 験 成 績

薬効調査

供試薬剤	処理方法	連制	播種 粒数	出芽数	不出芽 数	出芽率 (%)	出芽後苗立枯数				合計	健全 株率 (%)	補正 健全株 率(%) ¹⁾	補正 発病株 率(%) ²⁾	防除価
							9/30	10/2	10/5	10/9					
							播種5日後	7日後	10日後	14日後					
154)SB-390WG 既知化合物 82.5%	2000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	72	65	7	90.3	0	0	1	1	2	87.5	88.7	11.3	
		II	72	61	11	84.7	0	0	0	0	0	84.7	85.9	14.1	
		III	72	64	8	88.9	0	0	0	1	1	87.5	88.7	11.3	
		平均				88.0						86.6	87.8	12.2	68.0
Lot.No. C-24063	4000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	72	64	8	88.9	0	0	0	1	1	87.5	88.7	11.3	
		II	72	56	16	77.8	0	0	2	0	2	75.0	76.1	23.9	
		III	72	60	12	83.3	0	0	1	1	2	80.6	81.7	18.3	
		平均				83.3						81.0	82.2	17.8	53.3
対)ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 3L/㎡ 播種時 土壌灌注	I	72	69	3	95.8	0	0	0	0	0	95.8	97.2	2.8	
		II	72	67	5	93.1	0	0	0	0	0	93.1	94.4	5.6	
		III	72	66	6	91.7	0	0	0	0	0	91.7	93.0	7.0	
		平均				93.5						93.5	94.9	5.1	86.6
無処理・接種		I	72	55	17	76.4	0	5	6	1	12	59.7	60.5	39.5	
		II	72	56	16	77.8	0	3	4	2	9	65.3	66.2	33.8	
		III	72	54	18	75.0	0	5	4	3	12	58.3	59.1	40.9	
		平均				76.4						61.1	61.9	38.1	
無処理・無接種		I	72	71	1	98.6	0	0	0	0	0	98.6			

¹⁾補正健全株率(%) = 処理区の健全株率/無処理・無接種の健全株率(平均)*100

²⁾補正発病株率(%) = 100-補正健全株率

薬害調査(茎葉)

供試薬剤		処理方法	連制	調査月日			
				9/30	10/2	10/5	10/9
154)SB-390WG	2000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	—	—	—	—	
		II	—	—	—	—	
		III	—	—	—	—	
	4000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	—	—	—	—	
		II	—	—	—	—	
		III	—	—	—	—	
対)ダコニール1000	1000倍 3L/㎡ 播種時 土壤灌注	I	—	—	—	—	
		II	—	—	—	—	
		III	—	—	—	—	
無処理・接種		I					
		II					
		III					
無処理・無接種			I				

薬害調査(出芽)

供試薬剤	処理方法	連制	播種 粒数	出芽数	出芽率 (%)
154) SB-390WG	2000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	30	28	93.3
		II	30	28	93.3
対) ダコニール1000	1000倍 3L/m ² 播種時 土壌灌注	I	30	28	93.3
		II	30	27	90.0

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

事前に作製した病原菌汚染土を培土として使用し試験を実施した。無処理・無接種区の出芽率が 98.6% のところ、無処理・接種区では 76.4%とやや低く、出芽前の立ち枯れが起きているものと考えられた。出芽後の初発を播種 7 日後の 10 月 2 日に認めた。その後は継続して発病が認められ、最終調査時には無処理区において中発生程度の発病となった。

このような条件下で対照薬剤のダコニール 1000 は防除効果が認められた。

154) SB-390WG 2000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注 CCC -, 4000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注 DCC -

本剤の 2000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注処理は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍 3L/m² 播種時灌注処理と比較し防除効果はやや劣り、無処理に比較し防除効果が認められたもののその程度はやや低かった。防除効果はやや低い実用性はあると思われる。

本剤の 4000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注処理は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍 3L/m² 播種時灌注処理と比較し防除効果は劣り、無処理に比較し防除効果が認められたもののその程度はやや低かった。防除効果はやや低い実用性はあると思われる。

薬害は両処理とも認められなかった。

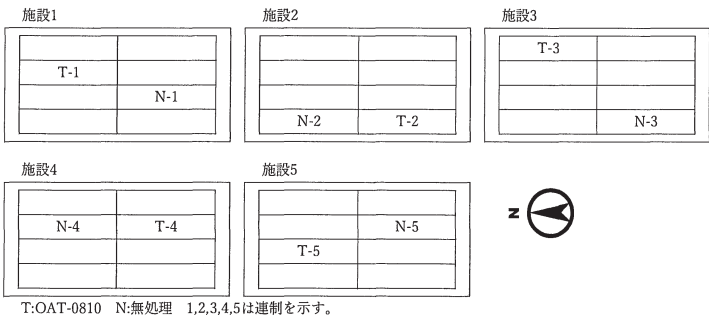
対象病害虫名 青枯病 *Ralstonia solanacearum*
試験場名 株式会社Field Styled Lab.

担当者氏名 柿元一樹・濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び薬害の検討
2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市上福元町社内圃場
対象病害虫発生状況 甚発生 初発:2024 年 9 月 16 日(定植 28 日後)
耕種概要

品種:ホーム桃太郎 播種日:2024 年 7 月 29 日 鉢上げ日:2024 年 8 月 14 日 定植:8 月 19 日 栽植距離:畝間 160cm
株間 40cm 1 条植え 主枝 1 本仕立て 施設栽培 土性:中粒質普通低地水田土 試験期間中の防除薬剤:なし
施肥:慣行 育苗:50 穴セルトレイ, 3 号ポット(直径 9cm) 培土:タキイ種まき培土およびタキイ育苗培土

区制・面積・試験区の構成 1 区 6.4 m² (1.6m×4m) 10 株/区 5 連制



処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

- (処理年月日) 2024 年 8 月 19 日(定植後)
(処理時の作物のステージ) 生育初期(草丈約 20cm, 葉数約 6 枚)
(処理方法) 試験薬剤の処理にあたっては, 1,000 倍の希釈液をトマトの定植後にビーカーを用いて株元灌注した。
(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	8/19	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26	8/27	8/28	8/29	8/30	8/31	9/1	9/2	9/3	9/4	9/5	9/6	9/7	9/8	9/9
平均気温(℃)	27.5	32.0	32.8	33.1	31.6	32.3	32.7	31.9	30.2	26.8	26.6	26.6	28.0	28.2	28.0	29.7	29.7	29.1	30.8	30.8	31.3	29.4
月日	9/10	9/11	9/12	9/13	9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	9/19	9/20	9/21	9/22	9/23	9/24	9/25	9/26	9/27	9/28	9/29	9/30	10/1
平均気温(℃)	28.0	30.6	30.9	29.7	29.4	30.5	31.4	30.6	31.2	30.9	30.8	28.7	27.2	23.9	27.1	27.1	28.3	28.5	27.9	28.4	28.1	27.8
観測地点:試験施設内	太枠内は処理日を示す																					

調査月日・方法

- (調査月日) 2024 年 8 月 26 日(処理 7 日後), 9 月 2 日(処理 14 日後), 9 月 9 日(処理 21 日後), 9 月 16 日(処理 28 日後), 9 月 24 日(処理 36 日後), 10 月 1 日(処理 43 日後)
(調査方法) 各区の全株を目視により観察し, 下記の程度別に株数を計数した。

発病程度指数

「0」:発病なし, 「1」:茎頂部がしおれる, 「2」:葉がしおれる, 「3」:株全体が青枯症状, 「4」:枯死

発病度の算出は下記に従った。

発病度 = (1×「1」の株数 + 2×「2」の株数 + 3×「3」の株数 + 4×「4」の株数) / (4×調査株数) × 100

薬害評価にあたっては, 薬効調査時に株全体の薬害症状を以下の基準により肉眼で観察した。

－:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

本病の初発は定植から 28 日後の 9 月 16 日であった。以後被害は急速に進展し, 最終調査時には甚発生であった。

対象病害虫名 青枯病 *Ralstonia solanacearum*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

3. 試 験 成 績

トマトの青枯病発生程度と推移

		調査項目, 調査日, 処理後経過日数 1)																		
供試薬剤	処理濃度 処理量 処理方法	連制	8月26日, 9月2日, 9月9日								9月16日									
			処理後経過日数																	
			定植7日, 14日, 21日後								処理開始31日後; 定植28日後									
			調査	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病 株率 (%)	調査	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病 株率 (%)				
			株数	0	1	2	3			4	株数	0	1	2			3	4	株数	0
141) OAT-0810	1,000倍	1	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0
新規化合物A 7.1% 新規化合物B 8.0%	200mL/株	2	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	8	2	0	0	0	5.0	2	20.0
新規化合物C 12.0% 新規化合物D 7.2%	定植後	3	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	8	1	1	0	0	7.5	2	20.0
Lot.	株元灌注	4	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0
ILA02		5	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0
計/平均			50	50	0	0	0	0	0	0	0	50	46	3	1	0	0	2.5	4	8.0
防除価			72.2																	
無処理	—	1	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0
		2	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	5	1	2	2	0	27.5	5	50.0
		3	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	5	4	1	0	0	15.0	5	50.0
		4	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	9	1	0	0	0	2.5	1	10.0
		5	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0
計/平均			50	50	0	0	0	0	0	0	0	50	39	6	3	2	0	9.0	11	22.0
防除価																				

		調査項目, 調査日, 処理後経過日数 1)																葉害			
供試薬剤	処理濃度 処理量 処理方法	連制	9月24日								10月1日								8/26,9/2 9/9,9/16 9/24,10/1		
			処理後経過日数																		
			処理開始39日後; 定植36日後								処理開始46日後; 定植43日後										
			調査	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病 株率 (%)	調査	発病程度別株数 2)				発病 株数	発病 株率 (%)					
			株数	0	1	2	3			4	株数	0	1	2			3	4	株数	0	1
141) OAT-0810	1,000倍	1	10	9	1	0	0	0	2.5	1	10.0	10	7	0	1	1	1	22.5	3	30.0	—
新規化合物A 7.1% 新規化合物B 8.0%	200mL/株	2	10	2	2	3	3	0	42.5	8	80.0	10	0	0	1	2	7	90.0	10	100	—
新規化合物C 12.0% 新規化合物D 7.2%	定植後	3	10	7	2	1	0	0	10.0	3	30.0	10	5	0	1	4	0	35.0	5	50.0	—
Lot.	株元灌注	4	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	7	0	1	2	0	20.0	3	30.0	—
ILA02		5	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	9	0	0	1	0	7.5	1	10.0	—
計/平均			50	38	5	4	3	0	11.0	12	24.0	50	28	0	4	10	8	35.0	22	44.0	
防除価			62.1								43.1										
無処理	—	1	10	3	1	2	4	0	42.5	7	70.0	10	3	0	0	2	5	65.0	7	70.0	
		2	10	0	2	3	2	3	65.0	10	100.0	10	0	0	0	1	9	97.5	10	100	
		3	10	7	0	3	0	0	15.0	3	30.0	10	0	0	0	0	10	100.0	10	100	
		4	10	6	1	1	2	0	22.5	4	40.0	10	4	1	1	2	2	42.5	6	60.0	
		5	10	10	0	0	0	0	0	0	0	10	9	1	0	0	0	2.5	1	10.0	
計/平均			50	26	4	9	8	3	29.0	24	48.0	50	16	2	1	5	26	61.5	34	68.0	
防除価																					

1) 薬剤処理日: 8月19日 (定植後)

2) 発病程度 「0」: 発病なし 「1」: 茎頂のしおれ 「2」: 葉のしおれ, 「3」: 株全体の青枯症状, 「4」: 枯死

4. 考 察

トマトの青枯病に対する OAT-0810 の効果は, 最終調査時(10 月 1 日)における被害度から算出した防除価に基づき難防除病害であることを考慮して判定した。

141) OAT-0810 1,000 倍希釈液 定植後 200mL/株;株元灌注 -BB-

本剤;1,000 倍希釈液の定植後 200mL/株;株元灌注の効果は, 無処理区と比較して効果はある。実用性はあると考えられる。なお, 葉害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 疫病 *Phytophthora infestans*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生 6月3日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:桃太郎ピース 播種:2024年4月12日 定植:5月14日 露地栽培 栽植距離:畝間150cm×株間35cm
2条植え 土性:壤土 施肥(/10a):堆肥1200kg、苦土石灰50kg、CDU複合燐加安特S222(12-12-12)29kg、アグリエイトプラス(8-8-8)44kg 試験期間中の防除薬剤:なし その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 5.3 m²(1.5m×3.5m) 20株 3連制

1-I	3-I		2-II	4-II			
	2-I			1-II		4-III	3-III
	4-I	3-II				1-III	2-III

1:GotaBlanca×500
2:GotaBlanca×1000
3:コサイド3000(対照)
4:無処理
I、II、IIIは連制を示す
空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年6月4日および11日の計2回
(作物のステージ) 初回散布時:第1果房開花期(草丈60cm)
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて200L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 散布前後に影響のある降雨はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	6/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
平均気温(℃)	21.9	21.6	21.3	21.1	21.4	20.2	21.1	21.8	21.6	22.6	23.2	22.4	24.4
降水量(mm)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.5	29.5	35.5	0.0	0.0	1.0	0.0
月日	6/14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
平均気温(℃)	24.5	23.7	26.4	21.8	23.1	24.7	20.6	24.5	25.8	28.7	26.0	25.7	23.9
降水量(mm)	0.0	5.0	0.0	71.0	33.5	0.0	133.5	19.5	61.0	1.0	89.5	8.0	4.0

観測地点:日植防宮崎試験場内露地 太枠は散布日

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、被害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:6月4日(事前調査)、18日(最終散布7日後)、26日(最終散布15日後)

薬害試験:6月11日、18日、26日

(調査方法) 事前調査:各区全株について、発病の有無を調査し、発病株率を算出した。

薬効調査:各区全株について、下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病株率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:茎葉に全く発病を認めない 1:茎葉の10%未満に病斑が観察される
2:茎葉の10~50%未満に病斑が観察される 3:茎葉の50~70%未満に病斑が観察される
4:茎葉の70%以上に病斑が観察される

発病度 = { Σ(発病指数別株数×発病指数)×100 } ÷ (調査株数×4)

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉、花および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める
+++:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

6月4日(初回散布前)に圃場内の株から罹病葉を全て除去した。

対象病害虫名・学名 疫病 *Phytophthora infestans*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会宮崎試験場

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	6/4(事前調査)			6/18(最終散布7日後)								
			調査株数	発病株数	発病株率(%)	調査株数	発病指数別株数					発病株率(%)	発病度	防除価
							0	1	2	3	4			
124) GotaBlanca 銀 0.05%	500倍 散布	I	20	1	5.0	20	16	4	0	0	0	20.0	5.0	
		II	20	1	5.0	20	0	7	13	0	0	100	41.3	
		III	20	1	5.0	20	2	18	0	0	0	90.0	22.5	
		平均			5.0							70.0	22.9	38.9
Lot.No. 2826717923	1000倍 散布	I	20	2	10.0	20	0	13	7	0	0	100	33.8	
		II	20	3	15.0	20	6	13	1	0	0	70.0	18.8	
		III	20	2	10.0	20	0	18	2	0	0	100	27.5	
		平均			11.7							90.0	26.7	28.8
対) コサイド3000 水酸化第二銅 46.1% (銅として30.0%)	1000倍 散布	I	20	1	5.0	20	20	0	0	0	0	0	0	
		II	20	1	5.0	20	20	0	0	0	0	0	0	
		III	20	1	5.0	20	20	0	0	0	0	0	0	
		平均			5.0							0	0	100
無処理		I	20	2	10.0	20	0	2	13	5	0	100	53.8	
		II	20	4	20.0	20	2	10	8	0	0	90.0	32.5	
		III	20	1	5.0	20	1	17	2	0	0	95.0	26.3	
		平均			11.7							95.0	37.5	

供試薬剤	処理方法	連制	調査株数	6/26(最終散布15日後)					薬害			
				発病指数別株数					発病株率(%)	発病度	防除価	6/11,18,26
				0	1	2	3	4				
124) GotaBlanca	500倍 散布	I	20	0	4	12	4	0	100	50.0		—
		II	20	0	0	16	4	0	100	55.0		—
		III	20	0	0	17	3	0	100	53.8		—
		平均							100	52.9	17.1	
	1000倍 散布	I	20	0	0	0	16	4	100	80.0		—
		II	20	0	1	15	4	0	100	53.8		—
		III	20	0	0	18	2	0	100	52.5		—
		平均							100	62.1	2.7	
対) コサイド3000	1000倍 散布	I	20	0	2	18	0	0	100	47.5		—
		II	20	5	11	4	0	0	75.0	23.8		—
		III	20	7	13	0	0	0	65.0	16.3		—
		平均							80.0	29.2	54.2	
無処理		I	20	0	0	0	16	4	100	80.0		
		II	20	0	0	15	5	0	100	56.3		
		III	20	0	1	14	5	0	100	55.0		
		平均							100	63.8		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

6月3日に圃場の一部で初発を確認したため、罹病葉を除去して試験を開始した。初回散布前の各区の発病株率は各区平均で5~10%程度であり、小葉1~2枚に発病が認められる程度の極少発生であった。その後、病勢は速やかに進展し、6月18日の調査時には無処理区で中発生となった。6月26日にはさらに進展し多発生となった。

対照薬剤のコサイド3000は最終散布7日後の6月18日において高い防除効果が認められた。同15日後の6月26日においてもやや低いながらも防除効果が認められた。

防除効果の判定は6月18日の結果をもとに行った。

124) GotaBlanca 500倍 散布 DDDー、1000倍 散布 DDDー

本剤の500倍散布および1000倍散布は、対照薬剤のコサイド3000 1000倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が低かった。実用性はないと思われる。薬害は両濃度ともに認められなかった。

対象病害虫名・学名 葉かび病 *Fulvia fulva*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生(接種) 4月5日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:千果(台木:がんばんの根) 播種:2023年10月26日(台木:10月25日) 定植:12月7日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm
株間50cm 2条植 土性:壤土 施肥(/10a):作付け前のEC値が十分な値を示したことから元肥を施さなかった。 つる下ろし:
2024年2月28日 試験期間中の防除薬剤:なし その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.8 m²(1.6m×3.0m) 12株 3連制

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年3月4日、11日、18日、27日および4月5日の計5回

(作物のステージ) 初回散布時:収穫期、地上高120~130cm(つる下ろし後)

最終散布時:収穫期、地上高170~180cm

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を用いて250~310L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	3/4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平均気温(℃)	22.5	17.1	16.6	21.8	21.3	21.9	21.1	21.2	21.5	22.5	22.1	23.6	24.3	18.2	22.0
月日	3/19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
平均気温(℃)	14.5	20.7	22.0	22.1	19.2	20.2	20.1	26.1	23.2	17.3	25.5	24.7	24.0		
月日	4/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平均気温(℃)	26.9	23.0	23.2	22.8	18.7	18.3	20.8	20.2	24.7	23.6	19.5	22.8	23.0	25.3	21.1

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:4月15日(最終処理10日後)

薬害試験:3月11日(初回処理7日後)、18日、27日、4月5日および15日

(調査方法) 各区全株を対象に、上位12複葉を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める
2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める
発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

—:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3月5日(初回処理翌日)に、トマト罹病苗を緩衝区に吊り下げて接種を行った。罹病苗は日本植物防疫協会茨城研究所分譲菌株を用いて作製した。

4月2日(4回目処理6日後)に同菌株の分生子懸濁液(1.03×10^4 個/mL)を93.5L/10a、散布機を用いて全面噴霧した。

3. 試験成績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数※1	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価	薬害※2
				0	1	2	3	4				
1) AKD-5195SC アミノピリフェン30%(w/w) Lot.No. BC-1	2000倍 散布	I	144	143	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		II	144	142	2	0	0	0	1.4	0.3		—
		III	144	140	4	0	0	0	2.8	0.7		—
		平均	144.0						1.6	0.4	98.8	
58) SB-390WG 既知化合物82.5% Lot.No. M-22500	2000倍 散布	I	144	143	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		II	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		III	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		平均	144.0						0.2	0.1	99.7	
165) ベジターボDF ポリオキシシンD亜鉛10.0% (ポリオキシシンDとして 89,000PsDu/g) Lot.No. 220210T	2000倍 散布	I	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		II	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		III	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		平均	144.0						0	0	100	
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	144	143	1	0	0	0	0.7	0.2		—
		II	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		III	144	144	0	0	0	0	0	0		—
		平均	144.0						0.2	0.1	99.7	
無処理		I	144	43	63	33	5	0	70.1	25.0		
		II	132	39	53	34	6	0	70.5	26.3		
		III	144	14	45	44	24	17	90.3	47.4		
		平均	140.0						77.0	32.9		

※1:生育不良により一部試験区の調査葉数が減少した

※2:薬害調査日 3月11日、18日、27日、4月5日および15日

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始し、初回処理翌日に緩衝区にトマト罹病苗をつり下げて接種を行った。発病が認められなかったため、4月2日に全面噴霧接種を行ったが、4月5日(罹病苗つり下げ31日後、全面噴霧接種3日後)に初発を認めた。その後発病が進展し、調査時には無処理区の発病程度は多発生となった。

以上のような条件において、対照薬剤のダコニール 1000 は高い防除効果が認められた。

1) AKD-5195SC 2000 倍散布 BAA -

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。本剤散布による薬害は認められなかった。

58) SB-390WG 2000 倍散布 BAA -

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。本剤散布による薬害は認められなかった。

165) ベジターボ DF 2000 倍散布 BAA -

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。本剤散布による薬害は認められなかった。

担当者氏名 濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び被害の検討
2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町
- 対象病害虫発生状況 少発生(自然発生, 初発 3 月 25 日)
- 耕種概要

品種:ホーム桃太郎 播種日:2023 年 11 月 21 日 定植日:12 月 28 日
栽植距離:畝間 160cm 株間 40cm 2 条植え 施設栽培 土性:砂壤土
試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 3.84 m² (1.6m×2.4m) 12 株/区 3 連制

3-Ⅲ	1-Ⅲ	2-Ⅲ	1-Ⅱ	3-Ⅰ	2-Ⅰ
		3-Ⅱ	2-Ⅱ		1-Ⅰ



1:オーソサイド水和剤80, 2:ダコニール1000, 3:無処理
Ⅰ, Ⅱ, Ⅲは連制を示す

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 4 月 1 日, 8 日, 15 日, 22 日 4 回
(処理時の作物のステージ) 収穫期
(処理方法) 背負い式電動噴霧器(HG-KBS12L)を用いて, 200L/10a の割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響なし

試験期間中の気象条件

月日	4/1	4/2	4/3	4/4	4/5	4/6	4/7	4/8	4/9	4/10	4/11	4/12	4/13	4/14	4/15
平均気温(℃)	19.9	17.2	20.3	19.1	19.6	18.3	20.2	19.7	20.1	21.1	19.0	19.1	20.8	21.0	18.6
月日	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	
平均気温(℃)	22.4	22.3	21.0	22.2	19.4	21.2	19.8	20.7	19.6	18.8	17.1	20.8	22.8	22.1	

観測地点:試験施設内 太枠は散布日を示す

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2024 年 4 月 15 日, 22 日 29 日
薬害試験:2024 年 4 月 8 日, 15 日, 22 日, 29 日
(調査方法) 各区両端を除く全株の第 3 果房より上位 10 複葉ずつ合計 100 葉前後の発病を以下の基準に従って調査し, 発病葉率と発病度を算出し, 発病度から防除価を求めた。
発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:病斑面積が葉面積の 5~25%未満を占める
3:病斑面積が葉面積の 25~50%未満を占める 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める
発病度=(「1」の葉数×1+「2」の葉数×2+「3」の葉数×3+「4」の葉数×4)/(調査葉数×4)×100
防除価=100-処理区の発病度/無処理区の発病度×100
薬害評価にあたっては, 薬効調査時に茎葉と果実の薬害症状を以下の基準により調査した。
-:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。
+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

対象病害虫名 すすかび病 *Pseudocercospora fuligena*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

3. 試 験 成 績

薬効・薬害試験

供試薬剤	処理方法※	連制	調査 葉数	4/15(2回目散布7日後)						4/22(3回目散布7日後)						4/29(4回目散布7日後)						薬害 4/8,15, 22,29				
				指数別発病葉数					発病 率	発病 度	指数別発病葉数					発病 率	発病 度	指数別発病葉数					発病 率	発病 度	防除 価	
				0	1	2	3	4			0	1	2	3	4			0	1	2	3					4
31)オーソサイド水和剤80 キャブタン80.0%	800倍 散布	I	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5	96	4	0	0	0	4.0	1.0	95	5	0	0	0	5.0	1.3		—
		II	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	97	3	0	0	0	3.0	0.8	96	4	0	0	0	4.0	1.0		—
		III	100	97	3	0	0	0	3.0	0.8	95	5	0	0	0	5.0	1.3	93	7	0	0	0	7.0	1.8		—
		平均							2.0	0.5						4.0	1.0						5.3	1.3	75.4	
Lot.4J089F 対)ダコニール1000 TPN40.0%	1000倍 散布	I	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5	94	6	0	0	0	6.0	1.5	94	6	0	0	0	6.0	1.5		—
		II	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	97	3	0	0	0	3.0	0.8	97	3	0	0	0	3.0	0.8		—
		III	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5	92	7	0	0	0	7.0	1.8	92	8	0	0	0	8.0	2.0		—
		平均							1.7	0.4						5.3	1.3						5.7	1.4	73.8	
無処理	—	I	100	93	7	0	0	0	7.0	1.8	80	20	0	0	0	20.0	5.0	77	23	0	0	0	23.0	5.8		
		II	100	94	6	0	0	0	6.0	1.5	89	11	0	0	0	11.0	2.8	75	23	2	0	0	25.0	6.8		
		III	100	87	13	0	0	0	13.0	3.3	85	15	0	0	0	15.0	3.8	83	17	0	0	0	17.0	4.3		
		平均							8.7	2.2						15.3	3.8						21.7	5.6		

※散布日:2024年4月1日,8日,15日,22日

※散布日:2024年4月1日,8日,15日,22日

4. 考 察

3月25日に自然発生で初発を認め、試験開始直前に罹病葉をすべて除去して試験を開始した。4回目散布7日後の調査では、無処理区では発病葉率21.7%、発病度5.6と少発生条件となり、対照区では防除価73.8と高い効果が認められていたため、本試験による効果の判定は可能と判断した。効果の判定は、4回目散布7日後の4月29日の発病度から算出した防除価で評価した。

31)オーソサイド水和剤80 800倍 BBB-

本剤の800倍散布は、対照薬剤のダコニール1000 1000倍散布と比較して同等の効果が認められ、無処理区と比較して効果はある。実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

1. 試 験 目 的 防除効果及び葉害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 熊本県合志市栄3801 熊本県農業研究センター生産環境研究所

対 象 病 害 虫 発 生 状 況 多発生

耕種概要

品種:桃太郎ホープ 播種:2023 年7月 31 日 鉢上げ:8月 10 日 定植:9月 14 日

耕種概要:畝幅 100cm(畝間 75cm)、株間 50cm、1条植え、吊り下ろし誘引、白黒マルチ被覆 土性:壤土

施肥:県施肥基準に準じた。

試験期間中の防除薬剤:無し

区制・面積・試験区の構成 1 区 8.75 m² (1.75m×5m) 8株 3 連制

試験区の構成

入 口	2-I	3-I		1-I
	1-II		3-II	2-II
	3-III	2-III	1-III	
1:ZMF-2101乳剤 2:ダコニール1000 3:無処理 I、II、IIIは連制を示す				

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年4月5日、4月 12 日、4月 19 日の計3回

(作物のステージ) 処理開始時:14 段目開花

(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍率に調製し、薬液がしたり落ちる程度の十分量(250〜300L/10a 相当)を背負式動力機を用いて散布した。薬剤に展着剤は加用しなかった。

(処理前後の降雨影響) 施設内での試験のため、降雨の影響は無かった。

試験期間中の気象条件

月日	4/5	4/6	4/7	4/8	4/9	4/10	4/11	4/12	4/13	4/14	4/15	4/16
平均気温(℃)	19.1	16.9	20.0	19.8	18.1	19.5	18.0	22.1	21.9	22.4	18.1	23.0

月日	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26
平均気温(℃)	22.3	21.6	21.3	18.2	19.9	19.4	20.9	20.2	22.0	19.0

観測地点:試験施設内に設置した観測機器

調査月日・方法

(調査月日)2024 年4月 26 日(最終散布7日後)

(調査方法) 各区8株について、最上位葉より下位 12複葉の発病程度を下記の調査基準で調査し、発病葉率及び発病度を算出した。葉害および汚れは、各散布時と最終散布7日後調査時に茎葉および果実を肉眼で観察し、下記の調査基準によって評価した。

発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$

防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

発病指数0:病斑を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満 2:病斑面積が葉面積の5〜25%未満

3:病斑面積が葉面積の25〜50%未満 4:病斑面積が葉面積の50%以上

葉害=−:葉害を認めない +:軽微な葉害症状を認める ++:中程度の葉害症状を認める +++:重度の葉害症状を認める

汚れ=−:汚れを認めない ±:汚れが認められるが実用上問題がない +:実用上問題となる汚れが認められる

その他

各区で欠株が発生し、本試験では調査株数を8株として試験を実施した。また、夕方に通路散水を行い、夜間はハウスを閉め込んで発病を促した。

3. 試 験 成 績

供試薬剤	希釈倍率	連制	調査 葉数	4月26日(最終散布7日後)							葉害 (汚れ)	
				発病指数別葉数					発病 葉率(%)	発病度		防除価
				0	1	2	3	4				
25) ZMF-2101乳剤 (トリホリン 18.0%)	1000倍	I	96	96	0	0	0	0	0.0	0.0	— (—)	
		II	96	95	1	0	0	0	1.0	0.3	— (—)	
		III	96	95	1	0	0	0	1.0	0.3	— (—)	
		平均							0.7	0.2	99.4	
対) ダコニール1000 (TPN 40.0%)	1000倍	I	96	92	4	0	0	0	4.2	1.0		
		II	96	79	17	0	0	0	17.7	4.4		
		III	96	86	10	0	0	0	10.4	2.6		
		平均							10.8	2.7	92.2	
Lot.1ACB0M 無処理		I	96	13	37	25	20	1	86.5	39.3		
		II	96	16	29	35	16	0	83.3	38.3		
		III	96	27	38	28	3	0	71.9	26.8		
		平均							80.6	34.8		

4. 考 察

4月2日には場の一部で初発が認められたため、最上位葉より8複葉を残し除去した。また、潜在感染の可能性があったため4月5日に再度既発葉を除去し、同日より散布を開始した。病勢の進展は速やかで、最終調査時には無処理区で発病葉率80.6%、発病度34.8の多発生条件での試験となった。効果の判定は4月26日(最終散布7日後)における発病葉率、発病度および防除価を基に行った。

25) ZMF-2101 乳剤 1000 倍 BAA-(—)

本剤 1000 倍散布は、対照のダコニール 1000 1000 倍散布と同等の効果であり、無処理と比較して防除効果が高く認められたことから、実用性はあると考えられる。調査期間を通じて葉害および汚れは認められなかった。

担当者氏名 下見悠輔 玉野井昭 石本侑梨

1. 試 験 目 的 防除効果及び葉害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 大分県豊後大野市三重町赤嶺 大分県農林水産研究指導センター農業研究部
- 対 象 病 害 虫 発 生 状 況 多発生（試験開始時に初発確認、自然発生）

耕種概要

品種：麗月 定植日：2024 年 4 月 22 日 栽植距離：畝幅 1.0m×株間 0.7m 1 条植え 土性：黒ボク
栽培条件：主枝 2 本仕立て 試験期間中の防除薬剤：なし 施肥その他一般管理は慣行に準じた。
区制・面積・試験区の構成 1 区 4.9 m² (1.0m×4.9 m) 8 株 3 連制

試験区の構成

a-Ⅰ		c-Ⅱ		b-Ⅲ
b-Ⅰ		a-Ⅱ		c-Ⅲ
c-Ⅰ		b-Ⅱ		a-Ⅲ

a:ピタイチ、b:対照剤(ダコニール1000)、c:無処理
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは連制を示す。

処理年月日, 量, 方法, 処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 6 月 25 日、7 月 2 日、7 月 9 日
(処理時の作物のステージ) 収穫期
(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍数に調製し、約 200 L/10 a の割合で背負式バッテリー噴霧機を用いて散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため、降雨による影響なし。

試験期間中の気象条件

月日	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5
平均気温(℃)	23.9	21.8	21.8	23.3	25.2	26.1	25.4	27.5	28.6	28.4	29.4

月日	7/6	7/7	7/8	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16
平均気温(℃)	30.3	29.6	30.3	29.8	28.5	25.8	24.8	24.2	23.8	23.8	25.0

観測地点：試験施設内（太枠内は散布日）

調査月日・方法

(調査月日) 薬効：7 月 16 日（最終散布 7 日後）
薬害：7 月 2 日（1 回目散布 7 日後）、7 月 9 日（2 回目散布 7 日後）、7 月 16 日（最終散布 7 日後）
(調査方法) 薬効：各区 8 株について、初回散布時の未発病葉位（地上高 1m 以上）の 15 複葉の発病程度を下記調査基準で調査し、発病株率、発病葉率、発病度を算出した。
発病指数 0：病斑を認めない、1：病斑面積が葉面積の 5% 未満、2：病斑面積が葉面積の 5～25% 未満、
3：病斑面積が葉面積の 25～50% 未満、4：病斑面積が葉面積の 50% 以上
発病度＝{Σ（程度別発病指数×葉数）／（4×調査葉数）}×100
薬害：調査時に茎葉と果実を対象に、肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の指標で評価した。
－：薬害を認めない ±：薬害が認められたが実用上は問題ない ＋：薬害症状を認める
防除価：平均発病度から算出した

(2024) 年 度 委 託	作物名 (トマト)
対象病害虫名・学名 うどんこ病 <i>Oidium</i> 属菌	試験場名 大分県農林水産研究指導センター

3. 試 験 成 績

供試薬剤	希釈倍率 (倍)	連制	調査 葉数	7月16日 (最終散布7日後)							薬害		
				程度別発病葉数					発病率 (%)	発病率 (%)	発病度	防除価	7/2
				0	1	2	3	4					7/9
													7/16
274) ピタイチ	500	I	120	96	24			87.5	20.0	5.0	—		
		II	120	71	49			100	40.8	10.2	—		
グ リセリンエン酸脂肪酸エステル 50%		III	120	85	35			100	29.2	7.3	—		
Lot.4104N		平均値					95.8	30.0	7.5	73.7			
対) ダコニール1000	1,000	I	120	118	2			25.0	1.7	0.4	—		
		II	120	115	5			25.0	4.2	1.0	—		
TPN 40.0%		III	120	115	5			50.0	4.2	1.0	—		
		平均値						3.4	0.8	97.2			
無処理区		I	120	15	62	43		100	87.5	30.8			
		II	120	16	64	40		100	86.7	30.0			
		III	120	14	93	13		100	88.3	24.8			
		平均値					100	87.5	28.5				

4. 考 察

実用性の判定は防除価から判断した。

初発生は 6 月 25 日で同日から散布を開始した。無処理区では発病葉率 87.5%、発病度 28.5 と多発生条件下での試験となり、対照薬剤の防除価は 97.2 と効果が認められたことから、判定は可能と判断した。

274) ピタイチ 500 倍散布 C, B, B, -

本剤の 500 倍散布は、対照のダコニール 1000 の 1,000 倍散布と比較して効果がやや劣り、無処理区と比較して効果は認められたことから、実用性はあると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 うどんこ病 学名不明

試験場名 沖縄県農業研究センター

担当者氏名 安次富厚

1. 試 験 目 的 防除効果および薬害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 沖縄県糸満市真壁 820 沖縄県農業研究センター内

対 象 病 害 虫 発 生 状 況 少発生

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:桃太郎ピース(自根) 定植:2024 年 6 月 5 日 施設栽培(ビニールハウス)

栽植距離:畝間 90cm 株間 35cm 施肥(10a 当たり):窒素 31kg リン 20kg 加里 26kg 県栽培要領に準じた。

土性:軽塩土(ジャーガル) 試験期間中の防除薬剤:6 月 5 日の定植直後にスタークル粒剤を処理した。

区制・面積・試験区の構成 1 区 3.15 m²(0.9m×3.5m 10 株) 3 連制

1-III		3-III		2-III
3-II		2-II		1-II
2-I		1-I		3-I



1:無処理 2:ムシラップ 500 倍 3:ピタイチ 500 倍

I、II、IIIは連制を示す。

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日)2024 年 6 月 21 日、6 月 28 日および 7 月 5 日の計 3 回。

(作物のステージ)処理開始時は草丈 100cm

(処理方法)背負い式バッテリー噴霧器を使用して、10a 当たり 180～200L の割合で散布を行った。

(処理前後の降雨影響)施設のため、降雨の影響はなし。

試験期間中の気象条件

月 日	6/5	6/6	6/7	6/8	6/9	6/10	6/11	6/12	6/13	6/14	6/15	6/16	6/17	6/18	6/19
平均気温(°C)	22.5	21.0	22.4	24.3	24.6	23.6	24.0	25.2	25.2	24.4	25.7	26.2	26.1	24.3	26.0
降雨量(mm)	0.0	2.0	2.5	1.0	3.5	12.5	197.5	115.5	39.0	146.5	11.0	0.0	0.5	54.5	0.0

月 日	6/20	6/21	6/22	6/23	6/24	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5
平均気温(°C)	26.7	27.0	27.1	27.3	27.2	27.5	27.7	27.4	27.6	27.7	27.9	28.0	28.4	28.5	28.2	28.5
降雨量(mm)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

観測地点:沖縄県南城市玉城糸数のアメダスデータ

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日)薬効試験:7 月 12 日(最終散布 7 日後)の合計 3 回。

薬害試験:6 月 28 日(2 回目散布前)、7 月 5 日(3 回目散布前)、7 月 12 日(最終散布 7 日後)

(調査方法)薬効は、1 区あたり 10 株の小葉 10 枚、計 100 葉について、下記の発病指数に基づいて調査を行い、発病率及び発病度を算出した。防除価は、発病度の平均値より求めた。

調査に用いた発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める。 2:病斑面積が葉面積の 5～25%未満を占める。 3:病斑面積が葉面積の 25～50%未満を占める。 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める。

発病度 = {Σ(発病指数別複葉数×発病指数)×100}÷(総調査葉数×4)

薬害は、茎葉を対象に、散布時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で観察した。

一:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。+++ :重度の薬害症状を認める。

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 うどんこ病 学名不明

試験場名 沖縄県農業研究センター

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

なし。

3. 試 験 成 績

薬効試験

供試薬剤	希釈 倍率	連制	調査 小葉数	程度別発病小葉数					発病小葉 率(%)	発病度	防除価
				0	1	2	3	4			
274)ピタイチ グリセリンクエン酸脂肪酸エステル 50% Lot.No. 27.104104N	500倍	I	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	89.5
		II	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5	
		III	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		平均	100						0.7	0.2	
対)ムシラップ ソルビタン脂肪酸エステル 70% Lot.No. 28.1023J301E	500倍	I	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	100.0
		II	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		III	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		平均	100						0.0	0.0	
無処理	—	I	100	95	4	1	0	0	5.0	1.5	—
		II	100	93	6	1	0	0	7.0	2.0	
		III	100	93	5	2	0	0	7.0	2.3	
		平均	100						6.3	1.9	

防除価は発病度の平均値から算出した。

薬害試験

供試薬剤	処理方法	連制	調査月日		
			6/28	7/5	7/12
274)ピタイチ	500 倍	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—
対)ムシラップ	500 倍	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—
無処理	—	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験では6月20日に下位葉で初発が確認され、当日から散布を開始した。最終調査時の無処理の発病葉率は6.3%、発病度は1.9と少発生であった。その条件下で対照のムシラップは高い防除効果を示した。効果の判定は少発生を考慮して行った。

274)ピタイチ 500 倍散布 CBB—

本剤の500倍散布は、対照のムシラップ500倍散布と比較してほぼ同等の効果を示し、無処理と比較して効果はある。実用性はあると思われる。薬害および汚れは認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Pseudoidium neolycopersici*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 試験開始時、既発

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:千果 播種:2023 年 10 月 26 日 定植:12 月 7 日 施設栽培 栽植距離:畝間 160cm×株間 50cm
2 条植 条間:40cm 土性:壤土 施肥(/10a):元肥 くみあい有機入りペレット 888(8-8-8)50kg、CDU 複合磷加安特 S222 (12-12-12)75kg、追肥 ファイン千代田(15-15-10)20kg 試験期間中の防除薬剤:なし 葉かき・つる下ろし:2024 年 3 月 29 日
その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.0 m²(1.6m×2.5m) 10 株 3 連制

	2-I		1-II		3-III
3-I			2-II		1-III
	1-I		3-II	2-III	

1:ピタイチ
2:カリグリーン
3:無処理
I、II、IIIは連制を示す
空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024 年 4 月 10 日および 17 日の計 2 回
(作物のステージ) 初回散布時:草高 110cm(つる下ろし後)、14 葉展開
最終散布時:草高 130~140cm、16 葉展開
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(丸山製作所、MSB1500Li)を用いて 250L/10a の割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	4/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平均気温(℃)	23.6	19.5	22.8	23.0	25.3	21.1	23.5	25.0	24.0	23.3	20.6	23.3	23.6	23.1	25.3

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:4 月 24 日(最終散布 7 日後)
薬害試験:4 月 17 日、24 日(最終散布 7 日後)
(調査方法) 各区全株の完全展開した上位 11 複葉(初回散布時の既発葉位を 2~3 葉含む)を対象に、下記の基準に従って発病指数別に調査した。なお、分生子および菌糸が消失している病斑は無発病として計数した。調査結果から発病葉率および発病度を算出し、発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める
2:同 5~25%未満を占める 3:同 25~50%未満を占める 4:同 50%以上を占める
発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
- :薬害を認めない + :軽微な薬害症状を認める ++ :中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)
事前に場内で採取した罹病複葉(計 6 コンテナ分)を、4 月 1 日に通路に均等にばらまいた。

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害 4/17,24
				0	1	2	3	4				
274) ピタイチ グリセリンケン酸脂肪酸 エステル 50.0% Lot.No. 4104N	500倍 散布	I	110	97	11	2	0	0	11.8	3.4		—
		II	110	103	6	1	0	0	6.4	1.8		—
		III	110	100	10	0	0	0	9.1	2.3		—
		平均							9.1	2.5	76.0	
対) カリグリーン 炭酸水素カリウム 80.0%	800倍 散布	I	110	110	0	0	0	0	0	0		—
		II	110	108	2	0	0	0	1.8	0.5		—
		III	110	108	2	0	0	0	1.8	0.5		—
		平均							1.2	0.3	97.1	
無処理		I	110	82	21	7	0	0	25.5	8.0		
		II	110	73	29	8	0	0	33.6	10.2		
		III	110	66	31	13	0	0	40.0	13.0		
		平均							33.0	10.4		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

試験開始前につる下ろしおよび罹病葉を配置する接種を行い、8～9 葉目に初期病斑がみられる状況から試験を開始した。その後の病勢進展は緩慢であり、調査時の無処理区の発病は少発生にとどまった。なお、薬剤散布区では既発葉位での治療的な効果がみられたことから、既発葉位を含む調査をおこなった。

対照薬剤のカリグリーンは高い防除効果が認められた。

274) ピタイチ 500 倍散布 DBB -

本剤の 500 倍散布は、対照薬剤のカリグリーン 800 倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Pseudoidium neolycopersici*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生 試験開始時、既発

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:千果 播種:2023 年 10 月 26 日 定植:12 月 7 日 施設栽培 栽植距離:畝間 160cm×株間 50cm

2 条植 条間:40cm 土性:壤土 施肥(/10a):くみあい有機入りペレット 888(8-8-8)50kg、CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)75kg 試験期間中の防除薬剤:なし 葉かき・つる下ろし:2024 年 2 月 27 日～28 日 その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.8 m²(1.6m×3.0m) 12 株 3 連制

	1-I		3-II	2-III	
--	-----	--	------	-------	--

1:AKD-5195SC

2:カリグリーン

3:無処理

	2-I		1-II		3-III
--	-----	--	------	--	-------

I、II、IIIは連制を示す

空欄は他剤散布区を示す

3-I			2-II		1-III
-----	--	--	------	--	-------

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024 年 2 月 29 日、3 月 7 日、14 日および 22 日の計 4 回

(作物のステージ) 初回散布時:草高 140～150cm(つる下ろし後)、13～15 葉展開

最終散布時:草高 170～180cm、19～20 葉展開

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(丸山製作所、MSB1500Li)を用いて 250～280L/10a の割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	2/29	3/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
平均気温(℃)	15.6	21.4	20.6	20.7	22.5	17.1	16.6	21.8	21.3	21.9	21.1	21.2	21.5	22.5	22.1

月日	3/15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
平均気温(℃)	23.6	24.3	18.2	22.0	14.5	20.7	22.0	22.1	19.2	20.2	20.1	26.1	23.2	17.3	25.5

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:3 月 29 日(最終散布 7 日後)

薬害試験:3 月 7 日、14 日、22 日、3 月 29 日(最終散布 7 日後)

(調査方法) 各区全株の完全展開した上位 10 複葉を対象に、下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める

2:同 5～25%未満を占める 3:同 25～50%未満を占める 4:同 50%以上を占める

発病度 = Σ (発病指数別葉数×発病指数)÷(調査葉数×4)×100

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

試験開始前から病斑が散見されたため、発病葉を含む下～中位葉を除去しつる下ろしを行った。

3. 試験成績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害 3/7,14,22,29
				0	1	2	3	4				
1) AKD-5195SC 新規化合物 30.0%(w/w) Lot.No. BC-1	2000倍 散布	I	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		II	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		III	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		平均							0	0	100	
対) カリグリーン 炭酸水素ナトリウム 80.0%	800倍 散布	I	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		II	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		III	120	119	1	0	0	0	0.8	0.2		—
		平均							0.3	0.1	99.6	
無処理		I	120	16	56	39	9	0	86.7	33.5		
		II	120	41	44	32	3	0	65.8	24.4		
		III	120	76	35	9	0	0	36.7	11.0		
		平均							63.1	23.0		

4. 考察 (判定した時期、判定記号を記載)

試験開始前に葉かきおよびつる下ろしを行い、6~7 葉目に初期病斑がみられる状況から試験を開始した。その後は徐々に上位葉へと進展がみられ、調査時には無処理区では中発生となった。

対照薬剤のカリグリーンは高い防除効果が認められた。

1) AKD-5195SC 2000 倍散布 BAA -

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のカリグリーン 800 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Pseudoidium neolycopersici*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 中発生 試験開始時、既発

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:千果 播種:2023 年 10 月 26 日 定植:12 月 7 日 施設栽培 栽植距離:畝間 160cm×株間 50cm
2 条植 条間:40cm 土性:壤土 施肥(/10a):くみあい有機入りペレット 888(8-8-8)50kg、CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)75kg 試験期間中の防除薬剤:なし 葉かき・つる下ろし:2024 年 2 月 27 日～28 日 その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.8 m²(1.6m×3.0m) 12 株 3 連制

		1-Ⅱ	3-Ⅱ	2-Ⅲ	
1-Ⅰ	2-Ⅰ				3-Ⅲ
3-Ⅰ			2-Ⅱ	1-Ⅲ	

1:SB-390WG
2:カリグリーン
3:無処理

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは連制を示す
空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024 年 2 月 29 日、3 月 7 日、14 日および 22 日の計 4 回
(作物のステージ) 初回散布時:草高 140～150cm(つる下ろし後)、13～15 葉展開
最終散布時:草高 170～180cm、19～20 葉展開
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(丸山製作所、MSB1500Li)を用いて 250～280L/10a の割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	2/29	3/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
平均気温(℃)	15.6	21.4	20.6	20.7	22.5	17.1	16.6	21.8	21.3	21.9	21.1	21.2	21.5	22.5	22.1
月日	3/15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
平均気温(℃)	23.6	24.3	18.2	22.0	14.5	20.7	22.0	22.1	19.2	20.2	20.1	26.1	23.2	17.3	25.5

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:3 月 29 日(最終散布 7 日後)
薬害試験:3 月 7 日、14 日、22 日、3 月 29 日(最終散布 7 日後)
(調査方法) 各区全株の完全展開した上位 10 複葉を対象に、下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める
2:同 5～25%未満を占める 3:同 25～50%未満を占める 4:同 50%以上を占める
発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
- :薬害を認めない + :軽微な薬害症状を認める ++ :中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

試験開始前から病斑が散見されたため、発病葉を含む下～中位葉を除去しつる下ろしを行った。

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害 3/7,14,22,29
				0	1	2	3	4				
50) SB-390WG 既知化合物 82.5% Lot.No. M-22500	2000倍 散布	I	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		II	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		III	120	118	2	0	0	0	1.7	0.4		—
		平均							0.6	0.1	99.6	
対) カリグリーン 炭酸水素ナトリウム 80.0%	800倍 散布	I	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		II	120	120	0	0	0	0	0	0		—
		III	120	119	1	0	0	0	0.8	0.2		—
		平均							0.3	0.1	99.6	
無処理		I	120	16	56	39	9	0	86.7	33.5		
		II	120	41	44	32	3	0	65.8	24.4		
		III	120	76	35	9	0	0	36.7	11.0		
		平均							63.1	23.0		

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

試験開始前に葉かきおよびつる下ろしを行い、6～7 葉目に初期病斑がみられる状況から試験を開始した。その後は徐々に上位葉へと進展がみられ、調査時には無処理区では中発生となった。

対照薬剤のカリグリーンは高い防除効果が認められた。

50) SB-390WG 2000 倍散布 BAA -

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のカリグリーン 800 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

担当者氏名 石本侑梨 玉野井昭

1. 試験目的 防除効果及び葉害の検討
2. 試験方法 試験地場所 大分県豊後大野市三重町赤嶺 大分県農林水産研究指導センター農業研究部
- 対象病害虫発生状況 中発生→甚発生 試験開始時、下位葉に発病確認

耕種概要

品種：さらら 定植日：2024 年 5 月 10 日 露地栽培 栽植距離：畝幅 1.0m×株間 0.5m 1 条植え 土性：黒ボク
栽培条件：主枝 4 本仕立て 試験期間中の防除薬剤：なし 施肥その他一般管理は慣行に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 10.0 m² (1.0 m×10.0 m) 16 株 3 連制

試験区の構成

a-Ⅲ		
c-Ⅲ		b-Ⅲ
b-Ⅱ		a-Ⅱ
a-Ⅰ		c-Ⅱ
c-Ⅰ		b-Ⅰ

a:スターナ水和剤 b:対照剤（カスミンボルドー） c:無処理
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは連制を示す

処理年月日, 量, 方法, 処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 7 月 10 日、7 月 17 日、7 月 24 日
(処理時の作物のステージ) 生育期～収穫期
(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍数に調製し、100 L/10 a の割合で背負式バッテリー噴霧機を用いて散布した。
(処理前後の降雨影響) 7 月 11 日 (初回散布翌日) に降雨が認められた。
散布後 12 時間以上経過していたため影響はないと思われる。

試験期間中の気象条件

月日	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21
平均気温(℃)	28.5	25.8	24.8	24.2	23.8	23.8	25.0	27.9	27.7	29.9	30.6	30.3
降水量(mm)	0	41.0	19.5	15.0	39.0	19.0	0	0	0	0	0	0

月日	7/22	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2
平均気温(℃)	29.9	28.5	28.4	29.3	29.1	29.7	29.3	30.1	30.9	30.2	29.8	30.3
降水量(mm)	0	8.0	0	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0

観測地点: 大分県メッシュ農業気象 三重地点

調査月日・方法

(調査月日) 薬効: 8月2日(最終散布9日後)

薬害: 8月2日(最終散布9日後)

(調査方法) 薬効: 各区 15~16 株について初回散布時の未発病葉にあたる中~上位葉の任意 10 葉 (1 試験区当たり 150~160 葉) の発病葉数を調査し、発病株率及び発病葉率を求めるとともに、葉の発病指数を次の調査基準に従って調査し、発病度の平均値から防除価を算出した。

(指 数) 0: いずれの葉にも病斑を認めない。

1: 葉の病斑は軽微である (5%以下の病斑率)。

2: 葉の病斑が多く認められる (5%以上の病斑率)。

3: 病斑が非常に多く、黄化も認められる。

(発病度) = { Σ (程度別発病葉数 × 指数) / (調査葉数 × 3) } × 100

薬害: 調査時に肉眼で観察し、薬害症状の有無を以下の指数で評価した。

- : 薬害を認めない ± 薬害が認められたが実用上は問題ない + 薬害症状を認める

その他

3. 試 験 成 績

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	調査 葉数	8月2日 (最終散布9日後)								
				程度別発病葉数				発病株率 (%)	発病葉率 (%)	発病度	防除価 8/2	薬害 8/2
				0	1	2	3					
180) スターナ水和剤 オキシリニック酸:20.0% Lot. BAO16F	2,000	I	160	142	14	2	2	43.8	11.3	5.0	—	
		II	150	137	9	3	1	46.7	8.7	4.0	—	
		III	160	100	39	11	10	87.5	37.5	19.0	—	
		平均値						59.3	19.1	9.3	73.5	
対) カスミンボルドー カスガマイシン:5.7% 塩基性塩化銅:75.6%	1,000	I	160	121	36	3	0	81.3	24.4	8.8	—	
		II	160	122	30	3	5	68.8	23.8	10.6	—	
		III	160	105	42	9	4	87.5	34.4	15.0	—	
		平均値						79.2	27.5	11.5	67.2	
無処理区		I	160	61	71	23	5	100	61.9	27.5		
		II	160	45	66	37	12	100	71.9	36.7		
		III	160	31	79	32	18	100	80.6	41.0		
		平均値						100	71.5	35.1		

4. 考 察

7月9日に一部の株で下位葉からの発病を認め、既発条件下で試験を開始した。7月11~15日の激しい降雨の影響により病気が助長され圃場全体に広がり甚発生の条件下となった。このような条件下であったが、対照薬剤の防除価は 67.2 と効果が認められたことから判定は可能と判断した。

180) スターナ水和剤 2,000 倍散布 BBB-

本処理は、対照区と比較して防除効果は同程度、無処理区と比較して、防除効果が認められた。実用性はあると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

担当者氏名 石本侑梨 玉野井昭

1. 試 験 目 的 防除効果及び被害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 大分県豊後大野市三重町赤嶺 大分県農林水産研究指導センター農業研究部

対 象 病 害 虫 発 生 状 況 中発生 (接種) 試験開始時、腐敗果実を確認

品種 : さらら 定植日 : 2024 年 5 月 10 日 露地栽培 栽植距離 : 畝幅 1.0m×株間 0.5m 1 条植え 土性 : 黒ボク

栽培条件 : 主枝 4 本仕立て 試験期間中の防除薬剤 : なし 施肥その他一般管理は慣行に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 10.0 m² (1.0 m×10.0 m) 16 株 3 連制

試験区の構成

a-Ⅲ		
		b-Ⅲ
		a-Ⅱ
c-Ⅲ		
		b-Ⅱ
		c-Ⅱ
		b-Ⅰ
a-Ⅰ		c-Ⅰ

a:オーソサイド水和剤 80 b:対照剤 (スターナ水和剤) C:無処理

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは連制を示す

処理年月日, 量, 方法, 処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 8 月 21 日

(処理時の作物のステージ) 生育期～収穫期

(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍数に調製し、100 L/10 a の割合で背負式バッテリー噴霧機を用いて散布した。

(処理前後の降雨影響) 降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26
平均気温(℃)	29.0	29.5	31.9	29.2	26.7	27.8
降水量(mm)	0	0	0	0	17.5	10.5

観測地点:大分県メッシュ農業気象 三重地点

調査月日・方法

(調査月日) 薬効 : 8 月 29 日 (散布 8 日後)

薬害 : 8 月 26 日 (散布 5 日後)

(調査方法)

8 月 26 日 (散布後 5 日後) に、各処理区から 100 果採取し、1 果ごとに密閉したビニールに入れ、25℃の条件下、3 日間保温後、8 月 29 日に腐敗果実数を調査し、腐敗果率を算出した。

また薬害は調査時に肉眼で観察し、薬害症状の有無を以下の指数で評価した。

－ : 薬害を認めない ± 薬害が認められたが実用上は問題ない + 薬害症状を認める

その他

ピーマン軟腐病菌（大分県農林水産研究指導センター保存菌）を PS 液体培地で培養し、滅菌蒸留水で 10^7 cfu/ml の濃度に調整した。これを、薬剤処理 1 日後（8 月 22 日）に背負い式動力噴霧機を用いて 100 L / 10 a の割合で噴霧接種した。

3. 試 験 成 績

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	調査 果数	腐敗 果実数	腐敗 果実率 (%)	防除価	薬害
						8/29	8/26
31) オーソサイド水和剤80 キャプタン:80% Lot. 5J092F	800	I	100	11	11		—
		II	100	10	10		—
		III	100	5	5		—
		平均			8.7	76.9	
対) スターナ水和剤 オキシリニック酸:20.0%	2,000	I	100	6	6		—
		II	100	11	11		—
		III	100	5	5		—
		平均			7.3	80.6	
無処理区		I	100	43	43		
		II	100	41	41		
		III	100	29	29		
		平均			37.7		

4. 考察

7 月 9 日に一部の株で腐敗果を認め、既発条件下で試験を開始した。8 月 29 日に保温後の果実で本病による腐敗果を確認した。無処理区の平均腐敗果実率は 37.7% と中発生条件下での調査となった。

31) オーソサイド水和剤 80 800 倍散布 BBB-

本処理は、対照区と比較して防除効果は同程度、無処理区と比較して、防除効果が認められた。実用性はあると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

担当者氏名 濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び被害の検討
2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町
- 対象病害虫発生状況 中発生(5月下旬初発確認, 自然発生)

耕種概要

品種:ニューエース 播種日:2024年3月25日 定植日:5月1日 栽植距離:畝間200cm 株間45cm 1条植え
施設栽培(無加温) 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた

区制・面積・試験区の構成 1区7.2㎡(2.0m×3.6m) 8株/区 3連制

1-I		3-I	4-I		2-I	
3-II	4-II	1-II	2-II	1-III		3-III
4-III	2-III					



1:オーソサイド水和剤80, 2:NNF-2220フロアブル, 3:ダコニール1000,
4:無処理

I, II, IIIは連制を示す。

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024年6月10日, 18日, 25日 合計3回
(処理時の作物のステージ) 収穫期
(処理方法) 所定濃度に希釈した薬液を背負い式電動噴霧器(HG-KBS12L)により200L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	6/10	6/11	6/12	6/13	6/14	6/15	6/16	6/17	6/18	6/19	6/20	6/21	6/22	6/23	6/24	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2
平均気温(℃)	22.8	23.7	24.0	25.4	25.5	24.3	25.9	22.3	24.4	24.8	20.0	26.1	26.9	26.8	25.4	24.5	23.9	23.1	24.0	24.3	28.3	28.2	30.8
観測地点:試験施設内	太枠内は散布日を示す																						

調査月日・方法

(調査月日) 2024年7月2日(3回目散布7日後)
(調査方法) 各区各株の中～上位の任意の13～16葉合計100～120葉程度について, 下記の基準に従って調査し, 発病葉率, 発病度を算出し, 発病度から防除価を求めた。
「0」:発病を認めない 「1」:病斑面積が葉面積の5%未満を占める 「2」:病斑面積が葉面積の5～25%未満を占める
「3」:病斑面積が葉面積の25～50%未満を占める 「4」:病斑面積が葉面積の50%以上を占める
発病度=(「1」の葉数×1+「2」の葉数×2+「3」の葉数×3+「4」の葉数×4)/(調査葉数×4)×100
防除価=100-処理区の発病度/無処理区の発病度×100
薬害・汚れ評価にあたっては, 薬効調査時に茎葉と果実の薬害症状を以下の基準により調査した。
-(-):薬害(汚れ)を認めない。+(+):軽微な薬害症状(汚れ)を認める。++(++):中程度の薬害症状(汚れ)を認める。+++ (+++):重度の薬害症状(汚れ)を認める。

その他

試験開始時にはすでに発病葉が認められていたため, 試験開始直前に発病葉を可能な範囲で除去し, それより上位葉を調査した。

3. 試験成績

供試薬剤	処理方法 ※	連制	調査 葉数	7/2(3回目散布7日後)					発病 葉率	発病 度	防除 価	薬害
				指数別発病葉数								6/18,25,
				0	1	2	3	4				7/2
31)オーソサイド水和剤 80 キャプタン80.0% Lot.4J089F	800倍散 布	I	111	84	27	0	0	0	24.3	6.1		-
		II	113	78	35	0	0	0	31.0	7.7		-
		III	112	87	25	0	0	0	22.3	5.6		-
		平均							25.9	6.5	74.1	
139)NNF-2220フロアブル 既知化合物A 40.0% 既知化合物B 5.0% Lot.113-420016	1000倍 散布	I	112	102	10	0	0	0	8.9	2.2		-
		II	120	110	10	0	0	0	8.3	2.1		-
		III	118	102	16	0	0	0	13.6	3.4		-
		平均							10.3	2.6	89.6	
対)ダコニール1000 TPN40.0% Lot.1BBA0M	1000倍 散布	I	112	91	21	0	0	0	18.8	4.7		-
		II	122	109	13	0	0	0	10.7	2.7		-
		III	116	102	14	0	0	0	12.1	3.0		-
		平均							13.8	3.5	86.1	
無処理	—	I	100	9	83	8	0	0	91.0	24.8		
		II	106	16	83	7	0	0	84.9	22.9		
		III	108	4	88	16	0	0	96.3	27.8		
		平均							90.7	25.1		

※散布日:2024年6月10日, 18日, 25日

4. 考察

3 回目散布 7 日後の 7 月 2 日には, 無処理区では発病葉率 90.7%, 発病度 25.1 と中発生条件下での試験となり, 対照薬剤の防除価が 86.1 と高い効果が認められていたため, 本試験による効果の判定は可能であると判断した。なお, 3 回目散布 7 日後の発病度から算出した防除価に基づき評価した。

31) オーソサイド水和剤 80 800 倍散布 CBB-

本剤 800 倍 3 回散布の効果は, 対照薬剤であるダコニール 1000 の 1000 倍 3 回散布の効果にやや劣り, 無処理区と比較して効果はある。実用性はあると考えられる。なお, 薬害は認められなかった。

139) NNF-2220 フロアブル 1000 倍散布 BAA-

本剤 1000 倍 3 回散布の効果は, 対照薬剤であるダコニール 1000 の 1000 倍 3 回散布の効果とほぼ同等で, 無処理区と比較して効果は高かった。実用性は高いと考えられる。なお, 薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 斑点病 *Cercospora capsici*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 4月15日に初発を認めた。

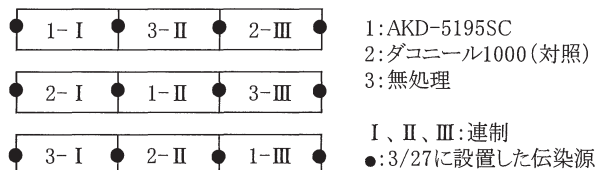
耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:京鈴 播種:2023年10月23日 定植:12月21日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間50cm 1条植

主枝4本仕立 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:4月8日グレースィア乳剤・プロパティフロアブル、4月23日アグリメック・

プロパティフロアブル 施肥(10a当たり):くみあい有機入りペレット888(8-8-8)125kg、CDU複合燐加安特S222(12-12-12)

83kg、くみあい硫カル80kg、いきいき有機特号(6-6-6)33kg(追肥) その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.8 m²(1.6m×3.0m) 6株 3連制

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年3月26日、4月2日、12日、22日および5月2日の計5回

(作物のステージ) 初回散布時:収穫期(草丈100cm)、最終散布時:収穫期(草丈140cm)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて250L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	3/26	27	28	29	30	31	4/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	26.1	23.2	17.3	25.5	24.7	24.0	26.9	23.0	23.2	22.8	18.7	18.3	20.8	20.2	24.7

月日	4/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平均気温(℃)	23.6	19.5	22.8	23.0	25.3	21.1	23.5	25.0	24.0	23.3	20.6	23.3	23.6	23.1	25.3

月日	4/25	26	27	28	29	30	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均気温(℃)	24.2	21.1	21.6	25.3	23.4	27.4	22.6	23.2	24.6	23.2	23.7	22.7	23.6	22.4	23.5

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、被害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:5月9日(最終散布7日後)

薬害試験:4月2日、12日、22日、5月2日、9日

(調査方法) 各区全株の全主枝について、任意の中位葉8枚(計192枚)を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。また、調査した発病葉の病斑数を計測し、1葉当たり病斑数を算出した。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める

2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める

発病度 = Σ (発病指数別葉数×発病指数)÷(調査葉数×4)×100

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない ++:軽微な薬害症状を認める +++:中程度の薬害症状を認める

++++:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3月27日(初回散布翌日)に、事前に作製したピーマン罹病苗を各区境の株元に1株ずつ設置した。伝染源の作製には県内農家圃場より採取した罹病葉を用いた。試験期間中は罹病苗が乾かないよう適宜灌水した。

4月20日(3回目散布8日後)には、試験圃場に設置した罹病苗より分生子懸濁液(1.7×10^3 個/ml)を作製し、150ml/株の割合で圃場全面に噴霧接種した。

3. 試験成績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査 葉数	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価 ¹⁾	病斑数	1葉当たり 病斑数	薬害 ²⁾
				0	1	2	3	4						
1) AKD-5195SC アミ/ピリフェン 30%(w/w) Lot.No. BC-2	2000倍 散布	I	192	188	4	0	0	0	2.1	0.5		4	0.02	—
		II	192	187	5	0	0	0	2.6	0.7		7	0.04	—
		III	192	187	5	0	0	0	2.6	0.7		5	0.03	—
		平均							2.4	0.6	93.8	5.3	0.03	
対)ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	192	191	1	0	0	0	0.5	0.1		1	0.01	—
		II	192	190	2	0	0	0	1.0	0.3		2	0.01	—
		III	192	190	2	0	0	0	1.0	0.3		2	0.01	—
		平均							0.8	0.2	97.9	1.7	0.01	
無処理		I	192	153	31	8	0	0	20.3	6.1		90	0.47	
		II	192	135	43	14	0	0	29.7	9.2		128	0.67	
		III	192	107	67	17	1	0	44.3	13.5		179	0.93	
		平均							31.4	9.6		132.3	0.69	

¹⁾ 発病度の平均値より算出した。

²⁾ 薬害調査日:4/2,12,22,5/2,9

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始した。3月27日(初回散布翌日)に感染源を設置し、4月15日(接種19日後)に緩衝株および無処理Ⅲ区で初発を確認した。その後、無処理区での発病がごく僅かであったため追加で噴霧接種を行い、調査時には少発生となった。対照薬剤のダコニール 1000 は高い防除効果が認められた。

防除効果の判定は発病度の結果をもとにおこなった。

1) AKD-5195SC 2000 倍散布 BAA—

本剤散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

担当者氏名 柿元一樹・濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び被害の検討
2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町社内圃場
- 対象病害虫発生状況 少発生(接種) 2024 年 5 月 8 日に初発を認めた。

耕種概要

品種:ニューエース 播種日:2024 年 3 月 25 日 定植日:2024 年 5 月 1 日 栽植距離:畝間 200cm 株間 45cm
1 条植え 主枝 4 本仕立て 施設栽培(加温無し) 土性:普通アロフェン黒ボク土 試験期間中の防除薬剤:なし
施肥:慣行

区制・面積・試験区の構成 1 区 7.2 m² (2m×3.6m) 8 株/区 3 連制

		C-3		N-3		T-3	
		N-2		T-2		C-2	
		T-1		C-1		N-1	



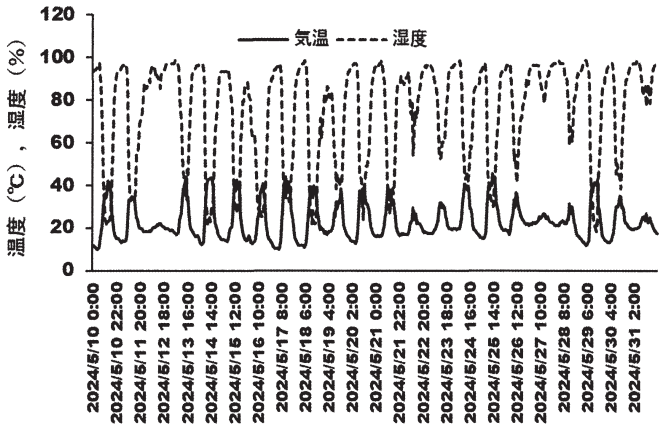
T:オーソサイド水和剤80 C:トップジンM水和剤 N:無処理
1,2,3は連制を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

- (処理年月日) 2024 年 5 月 10 日, 5 月 17 日, 5 月 23 日 (3 回)
- (処理時の作物のステージ) 生育初期(第一果着果期;草丈約 40cm, 葉数約 60 枚)
- (処理方法) 試験薬剤および対照薬剤の処理にあたっては, 所定濃度に希釈した薬液を背負い式動力噴霧器により約 80L/10a 相当散布した。
- (処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

データロガー計測値



観測地点:試験施設内

調査月日・方法

- (調査月日) 2024 年 5 月 17 日(処理開始 7 日後;2 回目処理前), 5 月 23 日(処理開始 13 日後;最終処理前), 5 月 31 日(処理開始 21 日後;最終処理 8 日後)
- (調査方法) 上位葉を中心に各区から任意の 100 葉を目視により観察し, 下記の程度別に株数を計数した。また, 最終調査時には果実についても調査を実施した。

発病指数

「0」:被害なし,「1」:病斑面積が調査部位面積の 5%未満,「2」:病斑面積が調査部位面積の 5~25%未満,
「3」:病斑面積が調査部位面積の 25~50%未満,「4」:病斑面積が調査部位面積の 50%以上
発病度の算出は下記に従った。

対象病害虫名 黒枯病 *Corynespora cassicola*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

$$\text{発病度} = \frac{\Sigma (1 \times \text{「1」の葉・果実数} + 2 \times \text{「2」の葉・果実数} + 3 \times \text{「3」の葉・果実数} + 4 \times \text{「4」の葉・果実数})}{(4 \times \text{調査葉・果実数}) \times 100}$$

薬害評価にあたっては、薬効調査時に茎葉および果実の薬害症状を以下の基準により肉眼で観察した。

－:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。

+++ : 重度の薬害症状を認める。

その他

PSA 培地で培養した本病菌 (9 cm シャーレ 4 枚分) を培地ごとミキサーで攪拌し、蒸留水で 7.5L にメスアップして接種源とし、5 月 13 日に 1 株当たり 50ml を株全体に噴霧接種した。

3. 試 験 成 績

後述

4. 考 察

5 月 8 日に果実に初発を認めたため、5 月 10 日から試験を開始した。その後の病勢進展は緩やかであったが、最終調査時には発病率および発病果率ともに 7% を超える水準であったため、薬効評価は可能であったと考える。

なお、薬効の判定は葉および果実の防除価を鑑みて評価した。

31) オートサイド水和剤 80 800 倍希釈液 6-7 日間隔 3 回散布 CCC-

本剤;800 倍希釈液の 6-7 日間隔 3 回散布の効果は、対照薬剤であるトップジン M 水和剤;4,000 倍希釈液の 6-7 日間隔 3 回散布の効果よりやや劣り、無処理区と比較して効果は認められたがその程度はやや低かった。効果はやや低い実用性はあると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

対象病害虫名 黒枯病 *Corynespora cassiicola*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

ピーマンの黒枯病発病程度；最終調査は葉および果実について実施

		調査項目、処理月日、処理後経過日数※																
供試薬剤	処理濃度 処理方法	連制	5月17日								5月23日							
			初回処理7日後；2回目処理前								初回処理13日後；最終処理前							
			調査	発病指数別葉数†				発病	発病度	調査	発病指数別葉数†				発病	発病度		
			葉数	0	1	2	3	4		葉率(%)	葉数	0	1	2	3		4	葉率(%)
31) オーンサイド水和剤80 キャプタン80.0% Lot. 4J089F	800倍 散布	1	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3
		2	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	100	96	4	0	0	0	4.0	1.0
		3	100	100	0	0	0	0	0	0	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3
		平均	100	99	1	0	0	0	0.7	0.2	100	98	2.0	0	0	0	2.0	0.5
		防除価																
対) トップジンM水和剤 チオファネートメチル70.0% Lot. TBG-704	4,000倍 散布	1	100	100	0	0	0	0	0	0	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3
		2	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	100	100	0	0	0	0	0	0
		3	100	100	0	0	0	0	0	0	100	100	0	0	0	0	0	0
		平均	100	100	0.3	0	0	0	0.3	0.1	100	100	0.3	0	0	0	0.3	0.1
		防除価																
無処理	—	1	100	100	0	0	0	0	0	0	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5
		2	100	100	0	0	0	0	0	0	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5
		3	100	100	0	0	0	0	0	0	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3
		平均	100	100	0	0	0	0	0	0	100	98	1.7	0	0	0	1.7	0.4
		防除価																

供試薬剤	処理濃度 処理方法	連制	調査項目、処理月日、処理後経過日数※																薬害			
			葉								果実（がく部）								5月17日			
			5月31日								5月31日								5月23日			
			初回処理21日後；最終処理8日後								初回処理21日後；最終処理8日後								5月31日			
			調査	発病指数別葉数†				発病	発病度	調査	発病指数別果実数†				発病	発病度						
			葉数	0	1	2	3	4	葉率(%)	果数	0	1	2	3	4	果率(%)						
31) オートサイド水和剤80 キャプタン80.0% Lot. 4J089F	800倍	1	100	97	1	2	0	0	3.0	1.3	100	94	4	2	0	0	6.0	2.0	－			
	散布	2	100	97	2	1	0	0	3.0	1.0	100	99	0	1	0	0	1.0	0.5	－			
		3	100	97	1	2	0	0	3.0	1.3	100	98	1	1	0	0	2.0	0.8	－			
		平均	100	97.0	1.3	1.7	0	0	3.0	1.2	100	97	1.7	1.3	0	0	3.0	1.1				
		防除価															47.8					66.7
対) トップジンM水和剤 チオファネートメチル70.0% Lot. TBG-704	4,000倍	1	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	－			
	散布	2	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	100	97	2	1	0	0	3.0	1.0	－			
		3	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	－			
		平均	100	98.7	1.3	0	0	0	1.3	0.4	100	98	1.3	0.3	0	0	1.7	0.5				
		防除価															82.6					84.6
無処理	－	1	100	94	3	3	0	0	6.0	2.3	100	92	5	2	0	1	8.0	3.3				
		2	100	91	7	2	0	0	9.0	2.8	100	92	4	3	1	0	8.0	3.3				
		3	100	93	7	0	0	0	7.0	1.8	100	94	3	0	2	1	6.0	3.3				
		平均	100	92.7	5.7	1.7	0	0	7.3	2.3	100	93	4.0	1.7	1.0	0.7	7.3	3.3				
		防除価																				

※薬剤処理日：5月10日，5月17日，5月23日

†発病程度指数 「0」：被害なし，「1」：病斑面積が調査部位面積の5%未満，「2」：病斑面積が調査部位面積の5～25%未満，
「3」：病斑面積が調査部位面積の25～50%未満，「4」：病斑面積が調査部位面積の50%以上

担当者氏名 石本侑梨 玉野井昭

1. 試 験 目 的 防除効果及び葉害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 大分県豊後大野市三重町赤嶺 大分県農林水産研究指導センター農業研究部

対象病害虫発生状況 中発生 (接種) 試験開始日の 9 月 4 日に果実における初発を確認

耕種概要

品種 : さらら 定植日 : 2024 年 5 月 10 日 露地栽培 栽植距離 : 畝幅 1.0m×株間 0.5m 1 条植え 土性 : 黒ボク

栽培条件 : 主枝 4 本仕立て ネット誘引 試験期間中の防除薬剤 : なし 施肥その他一般管理は慣行に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 10.0 m² (1.0 m×10.0 m) 16 株 3 連制

試験区の構成

c-1		b-1
a-1		c-2
		b-2
		a-2
c-3		
b-3		a-3

a : ミギワ 10 フロアブル、b : ダコニール 1000、c : 無処理

1、2、3 は連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 9 月 4 日、9 月 13 日

(処理時の作物のステージ) 収穫期

(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍数に調製し、100 L/10 a の割合で背負式バッテリー噴霧機を用いて散布した。

(処理前後の降雨影響) 降雨による影響なし。

試験期間中の気象条件

月日	9/4	9/5	9/6	9/7	9/8	9/9	9/10	9/11	9/12
平均気温(℃)	26.3	26.4	27.1	27.0	26.9	26.9	26.6	28.1	27.4
降水量(mm)	0	0	0	0	0	0	5.0	0.5	0

月日	9/13	9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	9/19	9/20
平均気温(℃)	27.0	25.9	27.6	28.2	27.5	27.3	28.0	28.0
降水量(mm)	0	7.5	5.0	1.5	0	0	0	1.5

太枠内が散布日

観測地点 : 大分県メッシュ農業気象 三重地点

調査月日・方法

(調査月日) 薬効 : 9 月 12 日 (1 回目散布 8 日後)、9 月 20 日 (2 回目散布 7 日後)

薬害 : 9 月 12 日 (1 回目散布 8 日後)、9 月 20 日 (2 回目散布 7 日後)

(調査方法) 調査時に収穫適期に達した 100 果について発病果数を調査した。薬害は調査時に肉眼で確認した。

(指 数) ー : 薬害を認めない ± : 薬害が認められたが実用上は問題ない + : 薬害症状を認める

その他

試験開始時に果実でピーマン炭疽病の初発を確認したが、試験区内における均一な発病を促すため、PDA 培地上で培養したピーマン炭疽病菌株 (*Colletotrichum scovillei*, MAFF242692 株) 1.0×10^4 個/ ml の孢子懸濁液を調製し、肩掛け噴霧器にて試験区全体に 20L 噴霧接種した。

3. 試 験 成 績

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	総調査 果数	調査時毎の発病果数		累積発病果数	累積発病果率 (%)	防除価	葉害	
				9/12	9/20				9/12	9/20
177) ミギワ10フロアブル イブフルフェノキン 10.0% Lot.T22-009	1,000	I	200	14	19	33	16.5		—	—
		II	200	27	11	38	19.0		—	—
		III	200	7	14	21	10.5		—	—
		平均				30.7	15.3	57.1		
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1,000	I	200	8	11	19	9.5		—	—
		II	200	8	16	24	12.0		—	—
		III	200	16	14	30	15.0		—	—
		平均				24.3	12.2	65.8		
無処理区		I	200	25	35	60	30.0			
		II	200	37	47	84	42.0			
		III	200	39	31	70	35.0			
		平均				71.3	35.7			

4. 考察

各試験区の平均累積発病果率から防除価を算出し、効果を判定した。

177) ミギワ 10 フロアブル 1,000 倍散布 B C C -

本剤の 1,000 倍散布は、対照のダコニール 1000 の 1,000 倍散布と同等の効果が認められたが、無処理区と比較して効果は認められるがその程度はやや低かったことから、効果はやや低い実用性はあると考えられる。なお、葉害は認められなかった。

担当者氏名 津田裕樹 玉野井昭

1. 試 験 目 的 防除効果及び葉害の検討

2. 試 験 方 法 試験地場所 大分県豊後大野市三重町赤嶺 大分県農林水産研究指導センター農業研究部

対 象 病 害 虫 発 生 状 況 中発生 (試験開始時に初発確認、自然発生)

耕種概要

品種:さらら 定植日:2023年5月16日 栽植距離:畝幅 1.0m×株間 0.5m 1条植え 土性:黒ボク

栽培条件:主枝4本仕立て 試験期間中の防除薬剤:9/8 ウララ DF 施肥その他一般管理は慣行に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1区 2.0 m² (1.0 m×2.0 m) 5株 3連制

試験区の構成

	c- I			b- I		a- I	
	b- II		c- II	a- II			
	a- III			c- III		b- III	

a: AKD-5195SC b: 対照剤(ダコニール1000) c: 無処理

I . II . III は連制を示す

処理年月日, 量, 方法, 処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2023年11月29日、12月6日、12月15日

(処理時の作物のステージ) 収穫期

(処理方法) 供試薬剤を所定の希釈倍数に調製し、280L/10aの割合で葉の表裏が十分濡れるように背負式バッテリー噴霧機を用いて散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため、降雨による影響なし。

試験期間中の気象条件

月日	11月29日	11月30日	12月1日	12月2日	12月3日	12月4日	12月5日	12月6日	12月7日	12月8日	12月9日	12月10日
平均気温(°C)	10.2	10.4	7.4	8.0	7.1	8.8	8.6	11.0	11.5	9.5	10.6	12.5

月日	12月11日	12月12日	12月13日	12月14日	12月15日	12月16日	12月17日	12月18日	12月19日	12月20日	12月21日
平均気温(°C)	13.3	14.9	13.2	12.1	16.1	13.0	5.2	6.1	5.8	6.9	4.3

観測地点: 試験施設内 (太枠内は散布日)

調査月日・方法

(調査月日) 葉効: 12月6日 (1回目散布7日後)、12月15日 (2回目散布9日後)、12月21日 (最終散布6日後)

葉害: 12月6日 (1回目散布7日後)、12月15日 (2回目散布9日後)、12月21日 (最終散布6日後)

(調査方法) 葉効: 試験開始時点で発病が無かった上位葉について、1株当たり25葉 (1試験区当たり125葉) の発病葉数を調査し、発病株率及び発病葉率を求めるとともに、葉の発病指数を次の調査基準に従って調査し、発病度の平均値から防除価を算出した。

〈指 数〉 0: 病斑を認めない

1: 病斑面積が葉面積の5%未満を占める

2: 病斑面積が葉面積の5~25%未満を占める

3: 病斑面積が葉面積の25~50%未満を占める

4: 病斑面積が葉面積の50%以上を占める

〈発病度〉 = { Σ (程度別発病葉数×指数) / (調査葉数×4) } × 100

(調査方法) 葉害: 調査時に茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し、葉害症状の有無を以下の指標で評価した。

〈指 数〉 - : 葉害を認めない ±: 葉害が認められたが実用上は問題ない + : 葉害症状を認める

3. 試 験 成 績

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	調査 葉数	12月6日 (1回目散布7日後)								薬害	
				程度別発病葉数					発病株率 (%)	発病葉率 (%)	発病度	防除価	12/6
				0	1	2	3	4					
1) AKD-5195SC	2,000	I	125	113	12				80.0	9.6	2.4	—	
		II	125	115	10				80.0	8.0	2.0	—	
新規化合物 30% (W/W)		III	125	113	12				100	9.6	2.4	—	
Lot.BC-2		平均値							86.7	9.1	2.3	84.9	
対) ダコニール1000	1,000	I	125	118	7				80.0	5.6	1.4	—	
		II	125	116	9				100	7.2	1.8	—	
TPN 40.0%		III	125	117	8				80.0	6.4	1.6	—	
		平均値							86.7	6.4	1.6	89.5	
無処理区		I	125	71	34	11	7	2	100	43.2	17.0		
		II	125	61	44	16	4		100	51.2	17.6		
		III	125	76	43	6			100	39.2	11.0		
		平均値							100	44.5	15.2		

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	調査 葉数	12月15日 (2回目散布9日後)								薬害	
				程度別発病葉数					発病株率 (%)	発病葉率 (%)	発病度	防除価	12/15
				0	1	2	3	4					
1) AKD-5195SC	2,000	I	125	116	9				100	7.2	1.8	—	
		II	125	122	3				40.0	2.4	0.6	—	
新規化合物 30% (W/W)		III	125	120	4	1			60.0	4.0	1.2	—	
Lot.BC-2		平均値							66.7	4.5	1.2	94.4	
対) ダコニール1000	1,000	I	125	119	6				60.0	4.8	1.2	—	
		II	125	122	3				60.0	2.4	0.6	—	
TPN 40.0%		III	125	122	3				40.0	2.4	0.6	—	
		平均値							53.3	3.2	0.8	96.3	
無処理区		I	125	40	62	13	10		100	68.0	23.6		
		II	125	48	52	11	14		100	61.6	23.2		
		III	125	55	58	7	5		100	56.0	17.4		
		平均値							100	61.9	21.4		

薬剤名	希釈倍率 (倍)	連制	調査 葉数	12月21日 (3回目散布6日後)								薬害	
				程度別発病葉数					発病株率 (%)	発病葉率 (%)	発病度	防除価	12/21
				0	1	2	3	4					
1) AKD-5195SC	2,000	I	125	125					0	0	0	—	
		II	125	125					0	0	0	—	
新規化合物 30% (W/W)		III	125	114	9	2			60.0	8.8	2.6	—	
Lot.BC-2		平均値							20.0	2.9	0.9	92.9	
対) ダコニール1000	1,000	I	125	114	10	1			80.0	8.8	2.4	—	
		II	125	123	1	1			40.0	1.6	0.6	—	
TPN 40.0%		III	125	125					0	0	0	—	
		平均値							40.0	3.5	1.0	92.1	
無処理区		I	125	65	46	8	5	1	100	48.0	16.2		
		II	125	70	45	7	3		100	44.0	13.6		
		III	125	91	28	5	1		100	27.2	8.2		
		平均値							100	39.7	12.7		

4. 考察

2 回目散布 9 日後の 12 月 15 日には、無処理区で発病葉率 61.9%、発病度 21.4 と中発生条件下での試験となり、対照薬剤の防除価は 96.3 と効果が認められたことから、効果の判定は可能と判断した。なお、最終散布 6 日後の 12 月 21 日には、気温の低下により落葉が進んだため、無処理区で発病葉率 39.7%、発病度 12.7 と前回調査時よりも発病程度が低下したことから、2 回目散布 9 日後の発病度から算出した防除価に基づき評価した。

1) AKD-5195SC 2,000 倍散布 BAA-

本剤の 2,000 倍散布は、対照のダコニール 1000 の 1,000 倍散布と同等の防除効果を示し、無処理区と比較して高い防除効果が認められたことから、実用性は高いと考えられる。なお、葉害は認められなかった。

対象病害虫名 うどんこ病 *Leveillula taurica*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

担当者氏名 濱島朗子

1. 試験目的 防除効果及び被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町

対象病害虫発生状況 中発生(自然発生, 初発 11 月 17 日)

耕種概要

品種:TM 鈴波 播種日:2023 年 8 月 16 日 定植日:9 月 20 日

栽植距離:畝間 160cm 株間 40cm 1条植え 施設栽培 土性:砂壤土

試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 5.76 m² (1.6m×3.6m) 9 株/区 3 連制

2-I	3-I	
1-I		

入口



	1-II	
3-II		
2-II		

入口

1:KIF-28FL
2:モレスタン水和剤
3:無処理

I, II, IIIは連制を示す

1-III	2-III	
3-III		

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2023 年 11 月 23 日, 30 日, 12 月 9 日 3 回

(処理時の作物のステージ) 収穫期

(処理方法) 背負式電動噴霧器(HG-KBS12L)を用いて, 200L/10a の割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響なし

試験期間中の気象条件

月日	11/23	11/24	11/25	11/26	11/27	11/28	11/29	11/30	12/1	12/2	12/3	12/4	12/5
平均気温(℃)	22.6	20.9	17.7	18.3	23.4	20.6	20.0	18.5	18.3	20.8	20.7	21.3	20.4

月日	12/6	12/7	12/8	12/9	12/10	12/11	12/12	12/13	12/14	12/15	12/16	12/17	12/18
平均気温(℃)	21.5	20.7	22.6	20.5	22.4	19.4	20.2	22.3	21.4	20.6	19.1	18.7	18.9

観測地点:試験施設内

太枠内は散布日を示す

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2023 年 12 月 18 日(3 回目散布 9 日後)

薬害試験:2023 年 11 月 30 日, 12 月 9 日, 18 日

(調査方法) 各区全株の第 1 着果より上位 10~11 葉ずつ合計 100 葉の発病を以下の基準に従って調査し, 発病葉率と発病度を算出し, 発病度から防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:病斑面積が葉面積の 5~25%未満を占める

3:病斑面積が葉面積の 25~50%未満を占める 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める

薬害評価にあたっては, 薬効調査時に茎葉と果実の薬害症状を以下の基準により調査した。

一:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

対象病害虫名 うどんこ病 *Leveillula taurica*

試験場名 株式会社Field Styled Lab.

3. 試験成績

薬効・薬害試験

供試薬剤	処理方法※	連制	調査 葉数	12/18(3回目散布9日後)								防除価	薬害 11/30, 12/9,18
				指数別発病葉数					発病 率率	発病 度			
				0	1	2	3	4					
27)KIF-28FL	1000倍 散布	I	100	97	3	0	0	0	3.0	0.8		-	
硫黄12.5%,塩基性塩化銅30.5%		II	100	88	12	0	0	0	12.0	3.0		-	
		III	100	91	9	0	0	0	9.0	2.3		-	
Lot.23-026F		平均							8.0	2.0	87.6		
対)モレスタン水和剤	3000倍 散布	I	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0		-	
キノキサリン系25.0%		II	100	97	3	0	0	0	3.0	0.8		-	
		III	100	95	5	0	0	0	5.0	1.3		-	
		平均							2.7	0.7	95.7		
無処理	—	I	100	88	12	0	0	0	12.0	3.0			
		II	100	9	74	12	4	1	91.0	28.5			
		III	100	34	65	1	0	0	66.0	16.8			
		平均							56.3	16.1			

※散布日:11/23, 30, 12/9

4. 考察

11 月 17 日に自然発生で初発が確認され、罹病葉を除去し、11 月 23 日に試験を開始した結果、3 回目散布 9 日後の調査では、無処理区では発病葉率 56.3%、発病度 16.1 と中発生となり、対照薬剤のモレスタン水和剤では防除価が 95.7 と一定の効果が認められていたため、本試験による効果の判定は可能と判断した。効果の判定は、3 回目散布 9 日後の 12 月 18 日の発病度から算出した防除価で評価した。

27)KIF-28FL 1000 倍 BBB-

本剤の 1000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較して同等の効果が認められ、無処理区と比較して効果はある。実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 苗立枯病 *Rhizoctonia solani*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生(接種) 初発:9月30日

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:夏秋美人 播種:2024年9月25日 72穴セルトレイ(30cm×60cm)育苗 培土:ポット床土2号(菱東肥料株式会社)

土性:不明 培土量:約3.2L/トレイ 施設栽培(育苗ベンチ上で管理) 出芽始め:9月28日 出芽揃い:10月2日

試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:なし その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 0.18 m²(30cm×60cm) 72穴セルトレイ1枚 3連制 ※無処理・無接種のみ1連制

	1-Ⅲ	2-Ⅲ	3-Ⅲ	1:SB-390WG 2:ダコニール1000(対照) 3:無処理・接種 4:無処理・無接種
4-I	3-II	1-II	2-II	
	2-I	3-I	1-I	I、II、Ⅲは連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年9月25日(播種当日)

(作物のステージ) 播種覆土直後

(処理方法) 所定濃度に調整した薬液を、ジョウロ(トンボじょうろ、容量:4L、ノズル:農薬散布用ハスの実、新輝合成株式会社)を用いてSB-390WG区は0.5L/セルトレイ、ダコニール1000区は3L/m²の割合で灌注した。

無処理区には同散布機具を用いて0.5L/セルトレイの割合で水道水を灌注した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	9/25	26	27	28	29	30
平均気温(℃)	27.0	26.7	28.0	27.2	26.5	26.4

月日	10/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平均気温(℃)	27.8	25.5	24.6	22.7	24.4	26.1	25.8	25.0	24.1	24.3	24.3	23.9	24.9	24.7	25.9

観測地点:日植防宮崎試験場内施設

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:9月30日、10月2日、5日、7日(播種12日後)

薬害試験:9月30日、10月2日、5日、7日(播種12日後)、15日(健全培土における出芽率)

(調査方法) 各区全株について出芽および発病の有無を調査し(発病株は調査日毎に除去)、健全株率および発病株率を算出した。発病株率の平均より無処理に対する防除価を求めた。

薬害は茎葉を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。また、健全培土における出芽率を、10月8日に播種・処理し10月15日に調査した(各区72穴セルトレイ1/2枚 30株1連制)。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

苗立枯病原菌(*Rhizoctonia solani*, AG4 ⅢA 場内保存菌株)を土壌フスマ培地で培養後、手で細かくほぐしたものを、0.1%(v/v)で培土に混和し汚染土とした。汚染土の作製は播種当日に行った。

3. 試 験 成 績

薬効調査

供試薬剤	処理方法	連制	播種 粒数	出芽数	不出芽 数	出芽率 (%)	出芽後苗立枯数					健全 株率 (%)	発病 株率 (%)	防除価
							9/30	10/2	10/5	10/7	合計			
							播種5日後	7日後	10日後	12日後				
154) SB-390WG 既知化合物 82.5% Lot.No. C-24063	4000倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注	I	72	67	5	93.1	0	2	8	6	16	70.8	29.2	
		II	72	63	9	87.5	0	0	6	4	10	73.6	26.4	
		III	72	65	7	90.3	0	0	7	4	11	75.0	25.0	
		平均				90.3						73.1	26.9	50.4
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 3L/㎡ 播種時 土壌灌注	I	72	72	0	100	0	0	3	4	7	90.3	9.7	
		II	72	70	2	97.2	0	0	1	2	3	93.1	6.9	
		III	72	72	0	100	0	0	4	2	6	91.7	8.3	
		平均				99.1						91.7	8.3	84.7
無処理・接種		I	72	61	11	84.7	3	4	11	8	26	48.6	51.4	
		II	72	60	12	83.3	2	1	13	12	28	44.4	55.6	
		III	72	57	15	79.2	3	3	12	7	25	44.4	55.6	
		平均				82.4						45.8	54.2	
無処理・無接種		I	72	72	0	100	0	0	0	0	0	100	0	

薬害調査(茎葉)

供試薬剤	処理方法	連制	調査月日			
			9/30	10/2	10/5	10/7
154) SB-390WG	4000倍	I	—	—	—	—
	0.5L/セルトレイ	II	—	—	—	—
	播種時灌注	III	—	—	—	—
対) ダコニール1000	1000倍	I	—	—	—	—
	3L/㎡	II	—	—	—	—
	播種時 土壌灌注	III	—	—	—	—
無処理・接種		I				
		II				
		III				
無処理・無接種		I				

薬害調査(出芽)

供試薬剤	処理方法	連制	播種粒数	出芽数	出芽率(%)
154) SB-390WG	4000倍	I	30	30	100
	0.5L/セルトレイ 播種時灌注				
対) ダコニール1000	1000倍	I	30	30	100
	3L/㎡ 播種時 土壌灌注				
無処理		I	30	30	100

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

事前に作製した病原菌汚染土を培土として使用し試験を実施した。無処理・無接種区の出芽率が 100%のところ、無処理・接種区では 82.4%とやや低く、出芽前の立ち枯れが起きているものと考えられた。出芽後の初発を播種 5 日後の 9 月 30 日に認めた。その後は 10 月 5 日の調査から発病株が急増し、最終調査時には無処理区において多発生程度の発病となった。

このような条件下で対照薬剤のダコニール 1000 は防除効果が認められた。

154) SB-390WG 4000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注 DCC -

本剤の 4000 倍 0.5L/セルトレイ 播種時灌注処理は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍 3L/㎡ 播種時灌注処理と比較し防除効果は劣り、無処理に比較し防除効果が認められたもののその程度はやや低かった。防除効果はやや低いが実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 斑点細菌病 *Pseudomonas syringae* pv. *lachrymans*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 6月19日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:夏ばやし 播種:2024年4月30日 定植:5月29日 露地栽培 栽植距離:畝間150cm×株間40cm 2条植え
条間:40cm 立体栽培(主枝1本仕立て) 土性:砂土 施肥(/10a):CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)100kg、アグリエイト
プラス(8-8-8)150kg 試験期間中の防除薬剤:6月21日ゾーベックエニベル顆粒水和剤・グレーシア乳剤、6月26日アミスター
オプティフロアブル・ジャストフィットフロアブル・モスピラン顆粒水溶剤・ディアナ SC その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 3.0 m²(1.5m×2.0m) 10株 3連制

1-I	2-I	3-I	4-I	2-II	1-II	4-II	3-II	4-III	2-III	1-III	3-III
-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------

1:GotaBlanca×500 2:GotaBlanca×1000 3:Zボルドー(対照) 4:無処理
I、II、IIIは連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年6月13日、19日および25日の計3回

(作物のステージ) 初回散布時:生育期(草丈50~60cm、9~10葉期)

最終散布時:収穫初期(草丈110~130cm、19~20葉期)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(丸山製作所、MSB1500Li)を用いて200~270L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 6月25日の降雨は午前7時までに記録された。散布時に作物は乾いており影響はないと思われる。

試験期間中の気象条件

月日	6/13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平均気温(℃)	24.4	24.5	23.7	26.4	21.8	23.1	24.7	20.6	24.5	25.8
降水量(mm)	0.0	0.0	5.0	0.0	71.0	33.5	0.0	133.5	19.5	61.0

月日	23	24	25	26	27	28	29	30	7/1	2
平均気温(℃)	28.7	26.0	25.7	23.9	23.4	24.2	25.5	28.3	28.3	30.0
降水量(mm)	1.0	89.5	8.0	4.0	61.0	19.5	4.5	0.0	8.0	0.0

観測地点:日植防宮崎試験場内露地

太枠は散布日

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効薬害試験:6月19日、25日、7月2日(最終散布7日後)

(調査方法) 各区全株について、6月19日は第1~5葉、6月25日と7月2日は第6~15葉を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める

2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める

発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$ 防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

6月15日(初回散布2日後)、YP培地で培養した本病原細菌を蒸留水に懸濁し菌液を作製した(4.5×10^6 cfu/ml)。これを全株
の下位3葉程度に20ml/株の割合で噴霧接種した。

3. 試 験 成 績

薬効調査(6月19日:第1～5葉、接種葉)、薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病率(%)	発病度	防除価	薬害
				0	1	2	3	4				6/19,25,7/2
124) GotaBlanca 銀 0.05%	500倍 散布	I	50	33	16	1	0	0	34.0	9.0		—
		II	50	37	10	3	0	0	26.0	8.0		—
		III	50	40	9	1	0	0	20.0	5.5		—
		平均	50.0						26.7	7.5	8.5	
Lot.No. 2826717923	1000倍 散布	I	50	34	13	3	0	0	32.0	9.5		—
		II	50	35	14	1	0	0	30.0	8.0		—
		III	50	38	9	3	0	0	24.0	7.5		—
		平均	50.0						28.7	8.3	0	
対) Zボルドー 塩基性硫酸銅 58.0% (銅として32.0%)	500倍 散布	I	50	47	3	0	0	0	6.0	1.5		—
		II	50	48	2	0	0	0	4.0	1.0		—
		III	50	49	1	0	0	0	2.0	0.5		—
		平均	50.0						4.0	1.0	87.8	
無処理		I	50	35	13	2	0	0	30.0	8.5		
		II	50	36	12	2	0	0	28.0	8.0		
		III	50	36	12	2	0	0	28.0	8.0		
		平均	50.0						28.7	8.2		

薬効調査(6月25日、7月2日:第6～15葉)

供試薬剤	処理方法	連制	6/25(最終散布直前)									7/2(最終散布7日後)								
			調査 葉数※	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価	調査 葉数※	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価
				0	1	2	3	4					0	1	2	3	4			
124) GotaBlanca	500倍 散布	I	100	95	5	0	0	0	5.0	1.3		100	85	14	1	0	0	15.0	4.0	
		II	100	86	11	3	0	0	14.0	4.3		100	83	12	5	0	0	17.0	5.5	
		III	100	96	4	0	0	0	4.0	1.0		100	92	7	1	0	0	8.0	2.3	
		平均	100.0						7.7	2.2	33.3	100.0						13.3	3.9	22.0
	1000倍 散布	I	100	93	7	0	0	0	7.0	1.8		90	72	14	4	0	0	20.0	6.1	
		II	100	94	6	0	0	0	6.0	1.5		80	73	7	0	0	0	8.8	2.2	
		III	100	94	6	0	0	0	6.0	1.5		100	91	8	1	0	0	9.0	2.5	
		平均	100.0						6.3	1.6	51.5	90.0						12.6	3.6	28.0
対)Zボルドー	500倍 散布	I	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3		90	86	4	0	0	0	4.4	1.1	
		II	90	87	3	0	0	0	3.3	0.8		80	76	4	0	0	0	5.0	1.3	
		III	100	100	0	0	0	0	0	0		100	96	4	0	0	0	4.0	1.0	
		平均	96.7						1.4	0.4	87.9	90.0						4.5	1.1	78.0
無処理		I	100	89	11	0	0	0	11.0	2.8		90	72	14	4	0	0	20.0	6.1	
		II	100	86	12	2	0	0	14.0	4.0		70	58	10	2	0	0	17.1	5.0	
		III	100	90	8	2	0	0	10.0	3.0		90	78	10	2	0	0	13.3	3.9	
		平均	100.0						11.7	3.3		83.3						16.8	5.0	

※生育不良株を調査対象から除外したため、一部の区で調査葉数が減少した。

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

初回散布 2 日後に下位葉に接種を行った。初発は接種 4 日後に第 3～4 葉で確認した。その後の病勢進展は緩慢であったが、7 月 2 日の調査時には無処理区において少発生となった。なお、試験期間中にマンゼブを含む農薬を試験園場全面に散布したため、発病が抑制された可能性がある。このような条件の中、対照薬剤の Z ボルドーは、6 月 19 日の接種葉位における調査で高い防除効果が認められ、7 月 2 日の調査においても防除効果が認められた。

防除効果の判定は 7 月 2 日の結果をもとに行った。

124) GotaBlanca 500 倍 散布 DDD－、1000 倍 散布 DDD－

本剤の 500 倍散布および 1000 倍散布は、対照薬剤の Z ボルドー 500 倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が低かった。実用性はないと思われる。薬害は両濃度ともに認められなかった。

担当者氏名 濱島 朗子

1. 試 験 目 的 防除効果及び薬害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町
- 対 象 病 害 虫 発 生 状 況 多発生(自然発生, 初発 5 月 21 日)

耕種概要

品種:北進 播種日:2024 年 4 月 25 日 定植日:5 月 10 日
栽植距離:畝間 160cm 株間 40cm 1 条植え 露地栽培 土性:砂壤土
試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 10.24 m² (1.6m×6.4m) 16 株/区 3 連制

1-Ⅲ		4-Ⅲ	5-Ⅲ
4-Ⅱ	5-Ⅱ	3-Ⅲ	2-Ⅲ
3-Ⅱ	2-Ⅱ		
1-Ⅱ		5-Ⅰ	4-Ⅰ
3-Ⅰ	2-Ⅰ	1-Ⅰ	



1:GotaBlanca1000倍, 2:GotaBlanca500倍, 3:ジー
ファイン水和剤, 4:ダコニール1000, 5:無処理
Ⅰ, Ⅱ, Ⅲは連制を示す。

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 5 月 29 日, 6 月 4 日 (2 回)
(処理時の作物のステージ) 収穫期
(処理方法) 背負い式電動噴霧器 (HG-KBS12L) を用いて, 200L/10a の割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 散布直後の降雨はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	5/29	5/30	5/31	6/1	6/2	6/3	6/4	6/5	6/6	6/7	6/8	6/9	6/10	6/11
平均気温 (°C)	22	22.8	21.3	21.8	22.4	22.8	22.3	23.2	21.8	23.4	22.7	23.5	23.4	24.3
降水量 (mm)	0	0.5	12	0	0	0	0	0	12.5	0	11.5	13.5	0	0

観測地点:アメダス鹿児島 太枠内は散布日を示す

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2024 年 6 月 11 日 (2 回目散布 7 日後)
薬害試験:2024 年 6 月 4 日, 11 日
(調査方法) 各区両端を除く全株の第 4 葉以上の本葉の発病を以下の基準に従って調査し, 発病葉率と発病度を算出し, 発病度から防除価を求めた。
発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:病斑面積が葉面積の 5~25%未満を占める
3:病斑面積が葉面積の 25~50%未満を占める 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める
発病度 = Σ (指数×程度別発病葉数) ×100/ (調査葉数×4) 防除価=100-処理区の発病度/無処理区の発病度×100
薬害評価にあたっては, 薬効調査時に茎葉と果実の薬害症状を以下の基準により調査した。
- :薬害を認めない。+ :軽微な薬害症状を認める。++ :中程度の薬害症状を認める。+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

5 月 21 日に自然発生で第 1, 2 葉の本葉に初発を確認し, 5 月 28 日に全株の発病葉を含む第 1, 2 葉の本葉を除去して試験を開始した。

3. 試 験 成 績

供試薬剤	処理方法 ※	連制	調査 葉数	6/11(2回目散布7日後)								薬害
				指数別発病葉数					発病 葉率	発病 度	防除 価	6/4,11
				0	1	2	3	4				
124) GotaBlanca 銀 0.05%	1000倍 散布	I	116	25	24	10	15	42	78.4	55.4		-
II		119	27	21	10	13	48	77.3	57.1		-	
III		107	29	20	12	14	32	72.9	50.0		-	
Lot.2826717923		平均							76.2	54.2	8.8	
124) GotaBlanca 銀 0.05%	500倍 散布	I	121	26	24	7	17	47	78.5	57.2		-
II		91	24	19	3	15	30	73.6	52.2		-	
III		89	25	17	8	17	22	71.9	48.3		-	
Lot.2826717923		平均							74.7	52.6	11.4	
248) ジーファイン水和剤	1000倍 散布	I	84	29	20	13	12	10	65.5	36.3		-
炭酸水素ナトリウム46%		II	102	33	21	25	14	9	67.6	36.5		-
無水硫酸銅30%(銅として12%)		III	81	26	23	19	4	9	67.9	33.6		-
Lot.BC363F		平均							67.0	35.5	40.2	
対)ダコニール1000	1000倍 散布	I	132	51	41	27	13	0	61.4	25.4		-
TPN40.0%		II	118	51	42	7	10	8	56.8	25.0		-
		III	75	43	19	8	4	1	42.7	17.0		-
Lot.1BBA0M		平均							53.6	22.5	62.1	
無処理	—	I	96	14	22	7	15	38	85.4	60.7		
		II	88	15	14	8	9	42	83.0	63.9		
		III	72	15	18	5	10	24	79.2	53.5		
		平均							82.5	59.4		

※散布日:2024年5月29日, 6月4日

4. 考 察

2 回目散布 7 日後の調査では、無処理区では発病葉率 82.5%、発病度 59.4 と多発生となり、対照薬剤では防除価が 62.1 と高い効果が認められていたため、本試験による効果の判定は可能と判断した。効果の判定は、2 回目散布 7 日後の 6 月 11 日の発病度から算出した防除価で評価した。

124) GotaBlanca 1000 倍散布 DDD-

本剤の 1000 倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 と比較して効果は劣り、無処理区と比較して効果は低い。実用性はないと考えられる。薬害は認められなかった。

124) GotaBlanca 500 倍散布 DDD-

本剤の 500 倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 と比較して効果は劣り、無処理区と比較して効果は低い。実用性はないと考えられる。薬害は認められなかった。

248) ジーファイン水和剤 1000 倍散布 CCC-

本剤の 1000 倍散布は、対照薬剤のダコニール 1000 と比較してやや劣る効果が認められ、無処理区と比較して効果は認められるがその程度はやや低い。効果はやや低い実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 べと病 *Pseudoperonospora cubensis*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

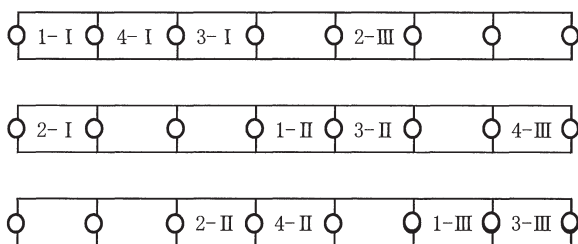
2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生(接種) 5月27日に初発を確認。

耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:エクセレント620(台木:ゆうゆう一輝) 播種:2024年4月16日(台木:4月16日) 定植:5月13日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間50cm 2条植え 条間:45cm 施肥(/10a):くみあい有機入りペレット888(8-8-8)88kg、CDU複合燐加安特S222(12-12-12)58kg 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:6月4日ディアナSC、ガッテン乳剤 その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区4.0㎡(1.6m×2.5m) 10株 3連制



1:GotaBlanca 500倍

2:GotaBlanca 1000倍

3:Zボルドー(クレフノン200倍加用)

4:無処理

I、II、IIIは連制を示す。

空欄は他剤散布区を示す。

○は5/27に設置した感染源を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日)2024年5月16日、24日、30日および6月5日の計4回。

(作物のステージ)初回処理時:生育期、草丈20~25cm、5葉期

最終処理時:収穫期、草丈180cm(摘芯)、20~21葉期

(処理方法)背負式バッテリー噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を使用して、10a当たり100~250Lの割合で散布を行った。対照薬剤Zボルドーの薬液にのみクレフノン(200倍)を加用した。

(処理前後の降雨影響)施設のため降雨の影響なし。

試験期間中の気象条件

月日	5/16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
平均気温(℃)	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8	22.4	26.3	27.7	26.9	27.6	25.3	29.4	22.7	23.2

月日	6/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温(℃)	25.1	24.7	24.1	23.3	24.0	22.1	24.1	23.9	24.0	25.1	25.5	24.3

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:6月5日、12日(最終処理7日後)

薬害試験:5月24日(初回処理8日後)、30日、6月5日および12日

(調査方法) 各試験区全株を対象に6月5日調査では第5~14葉、6月12日調査では第7~16葉の発病の有無を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。発病度の平均値より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める

2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める

発病度 = { Σ (発病指数別葉数×発病指数) × 100 } ÷ (総調査葉数×4)

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉および果実を対象に処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

－:薬害を認めない。 +:軽微な薬害症状を認める。 ++:中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

5月27日に場内で採取したきゅうり罹病葉を緩衝株の株元に1葉ずつ設置して接種を行った。

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査結果

6月5日(3回目処理6日後)調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価
				0	1	2	3	4			
124) GotaBlanca 銀0.05%	500倍 散布	I	100	45	49	6	0	0	55.0	15.3	
		II	100	28	52	20	0	0	72.0	23.0	
		III	100	34	62	4	0	0	66.0	17.5	
		平均							64.3	18.6	14.3
Lot.No. 2826717923	1000倍 散布	I	100	31	65	4	0	0	69.0	18.3	
		II	100	46	48	6	0	0	54.0	15.0	
		III	100	31	55	14	0	0	69.0	20.8	
		平均							64.0	18.0	17.1
対) Zボルドー(クレフノン200倍加用) 塩基性硫酸銅58.0% (銅として32.0%)	500倍 散布	I	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	
		II	100	94	6	0	0	0	6.0	1.5	
		III	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3	
		平均							2.7	0.7	96.8
無処理		I	100	30	52	18	0	0	70.0	22.0	
		II	100	42	53	5	0	0	58.0	15.8	
		III	100	27	42	26	5	0	73.0	27.3	
		平均							67.0	21.7	

6月12日(最終処理7日後)調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害※
				0	1	2	3	4				
124) GotaBlanca	500倍 散布	I	100	9	45	46	0	0	91.0	34.3		—
		II	100	0	1	83	16	0	100	53.8		—
		III	100	0	8	86	6	0	100	49.5		—
		平均							97.0	45.9	5.2	
124) GotaBlanca	1000倍 散布	I	100	0	14	84	2	0	100	47.0		—
		II	100	0	26	70	4	0	100	44.5		—
		III	100	0	5	89	6	0	100	50.3		—
		平均							100	47.3	2.3	
対) Zボルドー(クレフノン200倍加用)	500倍 散布	I	100	69	20	11	0	0	31.0	10.5		—
		II	100	49	44	7	0	0	51.0	14.5		—
		III	100	73	23	4	0	0	27.0	7.8		—
		平均							36.3	10.9	77.5	
無処理		I	100	6	34	55	5	0	94.0	39.8		
		II	100	3	7	77	13	0	97.0	50.0		
		III	100	0	0	79	21	0	100	55.3		
		平均							97.0	48.4		

※薬害調査日:5月24日、30日、6月5日、12日

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験は無発生条件から開始し、初発を5月27日(2回目処理3日後)に確認した。圃場全体で均一に発病させるため5月27日に接種を行った。その後発病が進展し、最終調査時の無処理区の平均発病葉率97.0%、発病度48.4と多発生条件の試験となった。防除効果の判定は6月12日時点の結果に基づき行った。

以上のような条件において、対照薬剤のZボルドーは防除効果が認められた。

124) GotaBlanca 500 倍、1000 倍散布 DDD-、DDD-

本剤の500倍散布は、対照薬剤のZボルドー 500倍散布と比較して防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められなかった。実用性はないと思われる。

本剤の1000倍散布は、対照薬剤のZボルドー 500倍散布と比較して防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められなかった。実用性はないと思われる。

本剤500倍、1000倍散布による薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および被害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生 3月18日に初発を確認。

耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:エクセレント620(台木:ゆうゆう一輝) 播種:2024年1月13日(台木:1月13日) 定植:2月20日 施設栽培 栽植
距離:畝間160cm×株間40cm 2条植え 条間:40cm 施肥(/10a):作付け前のEC値が十分な値を示したことから元肥を施
さなかった。土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:3月15日ガードホープ液剤 その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区4.5m²(1.6m×2.8m)14株3連制

2-III	4-II	1-II	3-I	
-------	------	------	-----	--

1:フセキワイドフロアブル

2:フセキエースフロアブル

3-III		2-II	4-I	1-I
-------	--	------	-----	-----

3:ゲッター水和剤

4:無処理

4-III	1-III	3-II		2-I
-------	-------	------	--	-----

I、II、IIIはそれぞれ連制を示す。

空欄は他剤散布区を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日)2024年3月13日、21日および29日の計3回。

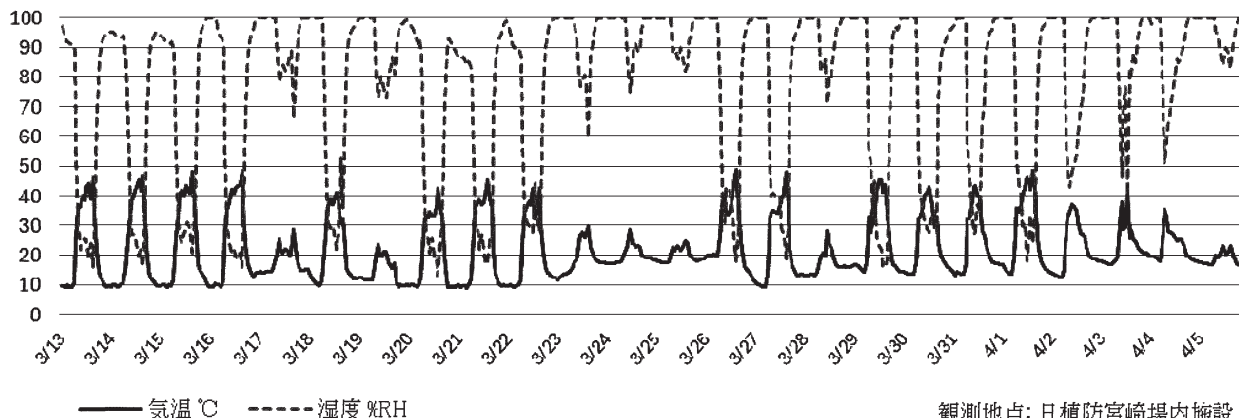
(作物のステージ)初回処理時:開花初期、草丈110~120cm、12~13節

最終処理時:収穫期、草丈180cm(摘心)、20~21節

(処理方法)背負式バッテリー噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を使用して、10a当たり180~310Lの割合で
散布を行った。

(処理前後の降雨影響)施設のため降雨の影響なし。

試験期間中の気象条件



調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、被害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:3月18日(初回処理5日後)、21日、25日、28日、4月1日および5日(最終処理7日後)

被害試験:3月21日(初回処理8日後)、29日(2回目処理8日後)および4月5日

(調査方法) 各区全株の着生果実について、発病果および収穫果数を調査した(調査果は試験区から除去)。最終調査時には
前述調査に加え、幼果を含む全着生果数を数え累積の発病果率を算出した。発病果率の平均より無処理に対する
防除価を求めた。

$$\text{防除価} = (1 - \text{処理区平均発病果率} \div \text{無処理区平均発病果率}) \times 100$$

薬害は茎葉および果実を対象に処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

- : 薬害を認めない。+ : 軽微な薬害症状を認める。++ : 中程度の薬害症状を認める。

+++ : 重度の薬害症状を認める。

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3. 試験成績

薬効薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査果数	調査日毎の発病果数						発病果数 合計	発病果率 (%)	防除価	薬害 ^{※1}
				3/18	3/21	3/25	3/28	4/1	4/5				
151) フセキワイドフロアブル ピリダクロメチル 11.7% イミダクタンアルヘンシル酸塩 10.0% Lot.No. BJ22-4F2301	1000倍 散布	I	174	0	0	0	0	0	0	0	0	92.6	—
		II	159	1	0	0	0	0	1	2	1.3		—
		III	195	0	1	0	0	1	0	2	1.0		—
		平均	176.0								0.8		
152) フセキエースフロアブル メハニピリム 18.0% ピリダクロメチル 23.3% Lot.No. BJ22-5F2301	2000倍 散布	I	172	0	0	0	0	0	1	1	0.6	96.3	—
		II	92 ^{※2}	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		III	172	0	0	0	0	0	1	1	0.6		—
		平均	145.3								0.4		
対) ゲッター水和剤 ジエトフェンカルブ 12.5% チオファネートメチル 52.5%	1500倍 散布	I	157	0	0	0	1	0	0	1	0.6	98.1	—
		II	188	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		III	170	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		平均	171.7								0.2		
無処理		I	92 ^{※2}	0	1	1	3	3	4	12	13.0		
		II	183	1	3	2	2	7	6	21	11.5		
		III	175	0	0	0	4	1	9	14	8.0		
		平均	150.0								10.8		

※1 薬害調査日: 3月21日、29日、4月5日

※2 ネコブセンチュウ被害により生育が抑制され、調査果数が減少した

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験は無発生条件下で開始し、初発を3月18日(初回処理5日後)に確認した。その後、継続して発病が認められ、最終調査時には無処理区の発病程度は少発生となった。なお、フセキエースフロアブル区連制IIおよび無処理区連制Iではネコブセンチュウ被害によって生育が抑制され調査果数が減少したものの、無処理区の発病果率は連制間で同程度であり、本試験への影響は小さいと思われる。

以上のような条件において、対照薬剤のゲッター水和剤は高い防除効果が認められた。

151) フセキワイドフロアブル 1000 倍 BAAー

本剤の1000倍散布は、対照薬剤のゲッター水和剤1500倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。

152) フセキエースフロアブル 2000 倍 BAAー

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のゲッター水和剤1500倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効及び薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 3月25日に初発を確認

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:エクセレント620(台木:ゆうゆう一輝) 播種:2024年1月13日(台木:1月13日) 定植:2月16日 施設栽培 栽植
距離:畝間160cm×株間40cm 2条植え 施肥(/10a):くみあい有機入りペレット888(8-8-8)100kg、CDU 複合燐加安特
S222(12-12-12)67kg 土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:なし その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 3.2 m²(1.6m×2.0m) 10株 3連制

3-III		1-II	2-I
×	×	×	
2-III	3-II		1-I
×	×	×	
	1-III	2-II	3-I

1: オーソサイド水和剤80

I、II、IIIは連制を示す。

2: ゲッター水和剤

空欄は他剤散布区を示す。

3: 無処理

× は3/14に設置した感染源を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年3月13日、21日および29日の計3回。

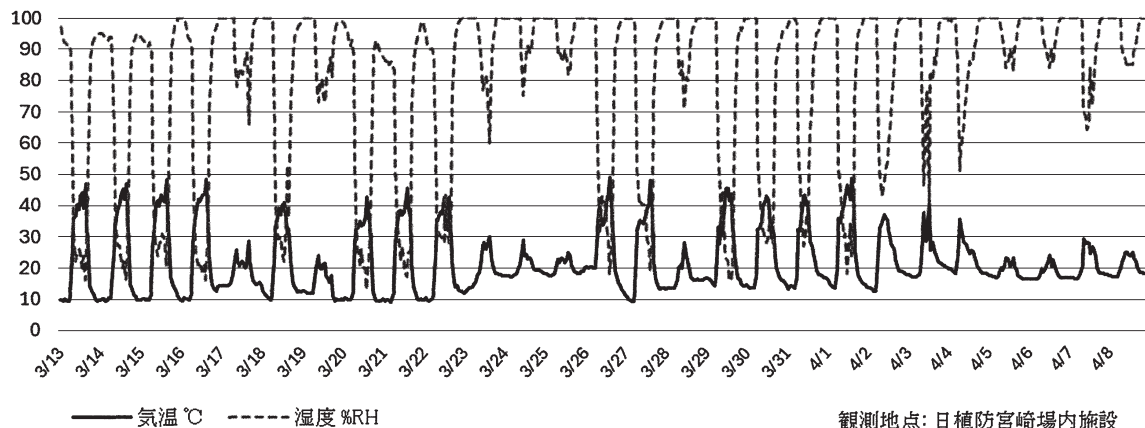
(作物のステージ) 初回散布時:開花初期、草丈110~120cm、12~13葉

最終散布時:収穫期、草丈170cm(摘芯)、20~21葉

(処理方法) 背負式バッテリー噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を用いて10a当たり160~310Lの割合で散布した。

(処理前後の降雨) 施設の為、降雨の影響なし。

試験期間中の気象条件



調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:3月18日(初回散布5日後)、21日、25日、28日、4月1日、4日および8日(最終散布10日後)

薬害試験:3月21日(初回散布8日後)、29日(2回目散布8日後)および4月8日

(調査方法) 各区全株の着生果実について、発病果および収穫果数を調査した(調査果は試験区から除去)。最終調査時には前述調査に加え、幼果を含む全着生果数を数え累積の発病果率を算出した。発病果率の平均より無処理に対する防除価を求めた。

$$\text{防除価} = (1 - \text{処理区平均発病果率} \div \text{無処理区平均発病果率}) \times 100$$

薬害は茎葉および果実を対象に処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

- : 薬害を認めない。 + : 軽微な薬害症状を認める。 ++ : 中程度の薬害症状を認める。

+++ : 重度の薬害症状を認める。

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3月14日(初回散布翌日)に感染源を圃場内の4箇所に均等に設置した。感染源は、土壌を充填した素焼き鉢に菌核を浅く埋没させ子嚢盤を形成させたものを使用した。菌核の作製には、場内保存菌株(MSS0204)を使用した。

3. 試験成績

薬効薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査果数	調査日毎の発病果数							発病果数 合計	発病果率 (%)	防除価	薬害※
				3/18	3/21	3/25	3/28	4/1	4/4	4/8				
78) オートサイド水和剤80 キャプタン 80.0% Lot.No. 4J089F	800倍 散布	I	97	0	0	0	0	1	0	0	1	1.0		—
		II	117	0	0	0	0	2	0	0	2	1.7		—
		III	130	0	0	0	1	0	1	0	2	1.5		—
		平均	114.7									1.4	82.3	
対) ゲッター水和剤 ジエトフェンカルブ 12.5% チオファネートメチル 52.5%	1500倍 散布	I	107	0	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		II	113	0	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		III	118	0	0	0	0	0	0	0	0	0		—
		平均	112.7									0	100	
無処理		I	124	0	0	0	4	4	2	0	10	8.1		
		II	126	0	0	1	2	5	2	2	12	9.5		
		III	99	0	0	0	1	1	2	2	6	6.1		
		平均	116.3									7.9		

※薬害調査日: 3月21日、29日、4月8日

4. 考察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験は無発生条件で開始し、初回散布翌日に感染源を設置し接種を行った。3月25日(接種11日後)に初発を認めた。その後は継続して発病が認められ、最終調査時の無処理区の平均発病果率は7.9%と少発生条件の試験となった。

以上のような条件において、対照薬剤のゲッター水和剤は高い防除効果が認められた。

78) オートサイド水和剤 80 800 倍散布 CBB-

本剤の800倍散布は、対照薬剤のゲッター水和剤1500倍散布と比較して防除効果がやや劣り、無処理区と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。

担当者氏名 菊原 賢次

1. 試験目的 罹病残渣に残存した病原菌に対する殺菌効果

2. 試験方法 試験地場所 福岡県筑紫野市吉木 (農林試病害虫部試験圃場)

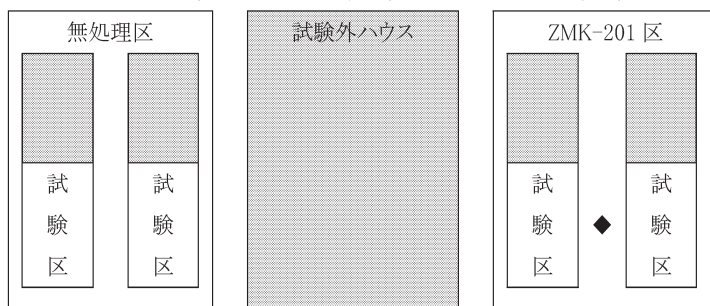
対象病害虫発生状況 中発生(接種) 10月10日に初発を確認

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別、土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種: ニーナZ 定植日: 10月2日 栽植距離: 畝幅 210cm×株間 50cm 2条植え 土性: 砂壤土

仕立て様式: 主枝1本整枝、つる下ろし栽培 無加温施設栽培 施肥その他一般管理は慣行に準じた。

試験期間中の防除薬剤: 10月25日モベントフロアブル、10月30日ベトファイター顆粒水和剤

区制・面積・試験区の構成 1区 1ハウス 144 m² (5m×12m×高さ3m) 約40株 1連制
ハウスの半分に試験株を定植し、残りは試験外のキュウリ(8月28日に定植)

◆: 供試薬剤混和培土の設置場所

処理年月日・量・方法・処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2023年11月15日

(処理時の作物のステージ) 収穫期

(処理量) 1.6L(約11mL/m³)

(処理方法) 黒土とバーミキュライトを1:4で混合した培土5L(薬量の約3倍)を70Lのビニル袋に入れ、供試薬剤1.6Lを混和した。畝間でビニル袋を切り開き、培土を広げ、培土表面から20cm上に携帯扇風機を1個設置した。ハウス出入口を閉め、隙間を目張りしてガスのハウス外への漏出を防いだ。処理開始から約48時間後(11月17日)にハウスを開放した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため、影響なし

試験期間中の気象条件

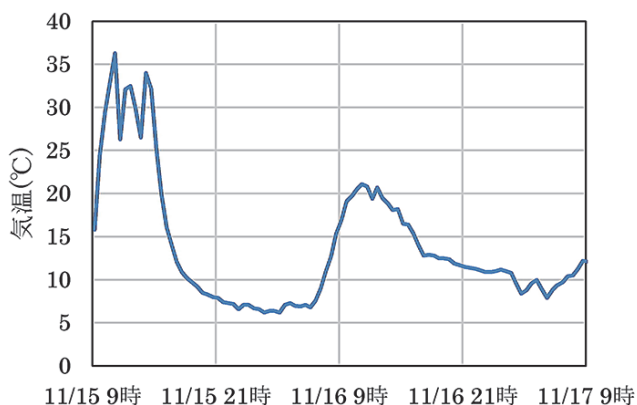


図1 試験期間中の気温の推移

観測地点: 試験実施ハウス内

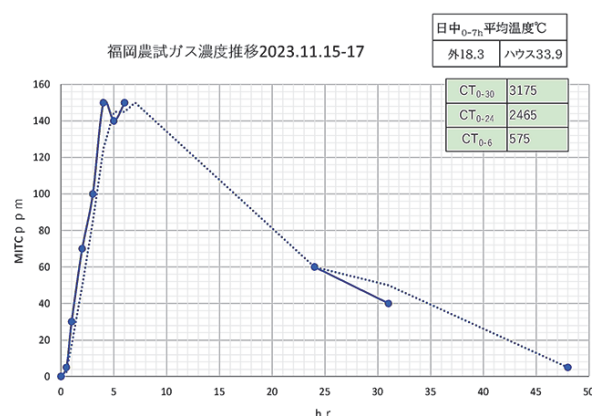


図2 処理ハウス内のMITC濃度の推移(11/15 10時開始)

●: 実測値

調査月日・方法(月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

【病斑上の分生孢子の発芽率】

(調査方法) 処理 2 日前(2023 年 11 月 13 日)、処理終了日(11 月 17 日)に罹病株の地際 6 株からセロハンテープでつる枯病菌の柄子殻を回収し、実体顕微鏡下で分生子塊を取り出し、素寒天培地に広げた。2 日間 25℃で発芽を促し、分生子 100 個の発芽の有無を光学顕微鏡で調査し、発芽率を算出した。

【処理中の MITC 濃度調査】

処理開始から 48 時間後までのハウス内の MITC 濃度推移を北川式ガス検知管(公明理化学工業株式会社)で測定した。
薬害については、残渣処理が目的のため、実施しなかった。

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期、詳細な方法を記載)

キュウリつる枯病菌株(日植防宮崎分譲菌株・福岡県分離菌株)を PDA 培地で約 2 週間培養した菌叢(9cm シャーレ 12 枚分)を培地ごと滅菌水(800ml)に加えてミキサーで破碎した。作製した菌糸懸濁液を 10 月 8 日にハndsプレーで噴霧し、サイドと入り口を閉め、一昼夜高湿度状態を保持した。

3. 試 験 成 績

供試薬剤	処理量 処理方法	調査 箇所	処理前(11/13)			処理後(11/17)		
			調査分生 子数(個)	発芽分生 子数(個)	発芽率 (%)	調査分生 子数(個)	発芽分生 子数(個)	発芽率 (%)
56)ZMK-201		I	100	100	100	100	0	0
カーバム ナトリウム塩42%	約11mL/m ³	II	100	100	100	100	0	0
		III	100	98	98	100	0	0
	培土に混和後 設置	IV	100	100	100	100	0	0
		V	100	100	100	100	0	0
		VI	100	100	100	100	0	0
Lot.No. 23-001F		平均	100	99.6	99.6	100	0	0
無処理		I	100	96	96	100	93	93
		II	100	100	100	100	100	100
		III	100	100	100	100	100	100
		IV	100	100	100	100	98	98
		V	100	100	100	100	95	95
		VI	100	100	100	100	100	100
		平均	100	99.2	99.2	100	97.7	97.7

4. 考察

供試薬剤を混和した培土をハウス内に置き、培土表面に送風する処理により、薬剤のガス化が促進され、ハウス内の MITC 濃度は処理開始 4 時間後に 150ppm に達した。その後、徐々に減少し、48 時間後には検出限界以下となった。キュウリ葉は萎れ、数日後に枯れ、古株枯死効果が認められた。分生子発芽率を無処理区と比較して、殺菌効果を判定した。

56) ZMK-201 11ml/m³ -AA

本剤混和培土設置による処理は、無処理区と比較して、罹病茎上の分生子の発芽率を顕著に低下させた。罹病残渣上の分生子に対する発芽阻止効果は高いことから、実用性は高いと考えられる。

対象病害虫名・学名 つる枯病 *Didymella bryoniae*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 5月28日に初発を確認。

耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:エクセレント620(台木:ゆうゆう一輝) 播種:2024年3月27日(台木:3月27日) 定植:4月25日 施設栽培

栽植距離:畝間160cm×株間40cm 2条植え 条間:50cm 土性:砂壤土

施肥(/10a):くみあい有機入りペレット888(8-8-8)88kg、CDU複合燐加安特S222(12-12-12)58kg

試験期間中の防除薬剤:5月20日モスピラン顆粒水溶剤・ジャストフィットフロアブル・プロパティフロアブル

6月3日アグリメック・コルト顆粒水和剤・ジャストフィットフロアブル・ガッテン乳剤

6月17日チェス顆粒水和剤・ベネビアOD・モレスタン水和剤・ジャストフィットフロアブル

その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区3.8㎡(1.6m×2.4m) 12株 3連制

※ 1-I	※ 4-I	※ 5-II	※ 3-II	※ 2-III	※ 6-III	※
						1:フセキワイドフロアブル
						2:フセキエースフロアブル
						3:SB-390WG
※ 2-I	※ 5-I	※ 1-II	※ 6-II	※ 3-III	※ 4-III	※
						4:アフエットフロアブル
						5:ロブラール水和剤
						6:無処理
※ 3-I	※ 6-I	※ 2-II	※ 4-II	※ 1-III	※ 5-III	※
						I、II、IIIは連制を示す。
						※は5/15に設置した感染源を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日)2024年5月14日、21日、30日および6月10日の計4回。

(作物のステージ)初回散布時:生育期、草丈170~175cm、18葉期 最終散布時:収穫期、草丈170~175cm、18葉期(摘芯)

(処理方法)背負式バッテリー噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を使用して、10a当たり260~300Lの割合で散布を行った。

(処理前後の降雨影響)施設のため降雨の影響なし。

試験期間中の気象条件

月日	5/14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
平均気温(℃)	24.6	24.7	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8	22.4	26.3	27.7	26.9	27.6	25.3	29.4	22.7	23.2

月日	6/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平均気温(℃)	25.1	24.7	24.1	23.3	24.0	22.1	24.1	23.9	24.0	25.1	25.5	24.3	27.4	30.5	26.9	31.3	24.9	26.9	29.5	23.0

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:6月20日(最終散布10日後)

薬害試験:5月21日(初回散布7日後)、30日、6月10日および20日

(調査方法) 各試験区全株を対象に、摘芯直下1葉を除いた上位9葉の発病の有無を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。発病度の平均値より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める

2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める

発病度 = { Σ(発病指数別葉数×発病指数)×100 }÷(総調査葉数×4)

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉および果実を対象に処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

ー:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。

+++ :重度の薬害症状を認める。

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

5月15日(初回散布翌日)に、つる枯病罹病茎(メロン茎に柄子殻を形成:前年の発生圃場から採取・保存)を、「区制・面積・試験区の構成」で示した試験区境に吊り下げることによって感染源とした。

6月7日(3回目散布8日後)に、つる枯病罹病茎(メロン茎に柄子殻を形成:前年の発生圃場から採取・保存)から作製した分生子懸濁液(4.0×10^4 個/mL)を170L/10aの割合で全面噴霧接種した。

3. 試験成績

薬効薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数 ^{a)}	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価	薬害 ^{b)}
				0	1	2	3	4				
151) フセキワイドフロアブル ピリダクロメチル 11.7% イミダクジンアルベシル酸塩 10.0% Lot.No. BJ22-4F2401	1000倍 散布	I	108	103	4	1	0	0	4.6	1.4		—
		II	108	106	2	0	0	0	1.9	0.5		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	108.0						2.2	0.6	93.5	
152) フセキエースフロアブル メパニピリム 18.0% ピリダクロメチル 23.3% Lot.No. BJ22-5F2401	2000倍 散布	I	108	102	5	1	0	0	5.6	1.6		—
		II	99	99	0	0	0	0	0	0		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	105.0						1.9	0.5	94.6	
154) SB-390WG 既知化合物82.5% Lot.No. C-24063	2000倍 散布	I	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		II	108	107	1	0	0	0	0.9	0.2		—
		III	108	106	2	0	0	0	1.9	0.5		—
		平均	108.0						0.9	0.2	97.8	
162) アフエットフロアブル ベンチオピラト ² 20.0% Lot.No. 26.10 2YY60003	2000倍 散布	I	108	100	6	2	0	0	7.4	2.3		—
		II	108	106	2	0	0	0	1.9	0.5		—
		III	108	107	1	0	0	0	0.9	0.2		—
		平均	108.0						3.4	1.0	89.1	
対) ロブラール水和剤 イプロジオン50% 無処理	1000倍 散布	I	108	105	3	0	0	0	2.8	0.7		—
		II	108	107	1	0	0	0	0.9	0.2		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	108.0						1.2	0.3	96.7	
無処理		I	108	75	22	11	0	0	30.6	10.2		
		II	99	70	18	9	2	0	29.3	10.6		
		III	108	90	10	5	3	0	16.7	6.7		
		平均	105.0						25.5	9.2		

^{a)} 菌核病による枯死で一部試験区の調査株数が減少した。

^{b)} 薬害調査日: 5月21日、30日、6月10日、20日

4. 考察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験は未発生条件から開始した。初回散布翌日に接種を行い、初発を5月28日(2回目散布7日後)に確認したが、病勢が非常に緩慢だったため、6月7日(3回目散布8日後)に再度接種を行った。その後発病が進展し、調査時には無処理区の発病程度は平均発病率25.5%、発病度9.2の少発生となった。以上のような条件において、対照薬剤のロブラール水和剤は高い防除効果が認められた。

151) フセキワイドフロアブル 1000倍 BAA-

本剤の1000倍散布は、対照薬剤のロブラール水和剤1000倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

152) フセキエースフロアブル 2000 倍 BAA-

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のロブラール水和剤 1000 倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

154) SB-390WG 2000 倍 BAA-

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のロブラール水和剤 1000 倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

162) アフェットフロアブル 2000 倍 BAA-

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のロブラール水和剤 1000 倍散布と比較して防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

薬害は認められなかった。

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 うどんこ病 *Podosphaera xanthii*

試験場名 沖縄県農業研究センター

担当者氏名 安次富厚

1. 試 験 目 的 防除効果および葉害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 沖縄県糸満市真壁 820 沖縄県農業研究センター内
- 対 象 病 害 虫 発 生 状 況 多発生

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:MT フェニックス(自根) 定植:2024 年 5 月 21 日 施設栽培(ファイロンハウス)

栽植距離:畝間 60cm 株間 35cm 施肥(10a 当たり):窒素 15kg リン 15kg 加里 16kg 県栽培要領に準じた。

土性:軽埴土〜シルト質埴土(島尻マージ) 試験期間中の防除薬剤:なし

区制・面積・試験区の構成 1 区 2.4 m² (0.6m×4.0m 10 株) 3 連制

3-II	2-II	1-II				
			2-III	1-III	3-III	
	1-I	2-I	3-I			

1:無処理 2:ムシラップ 500 倍 3:ピタイチ 500 倍

I、II、IIIは連制を示す。

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

- (処理年月日)2024 年 6 月 7 日、6 月 14 日および 6 月 21 日の計 3 回。
- (作物のステージ)処理開始時は草丈 100cm
- (処理方法)背負い式バッテリー噴霧器を使用して、10a 当たり 180〜200L の割合で散布を行った。
- (処理前後の降雨影響)施設のため、降雨の影響はなし。

試験期間中の気象条件

月 日	6/5	6/6	6/7	6/8	6/9	6/10	6/11	6/12	6/13	6/14	6/15	6/16	6/17	6/18	6/19
平均気温(℃)	22.5	21.0	22.4	24.3	24.6	23.6	24.0	25.2	25.2	24.4	25.7	26.2	26.1	24.3	26.0
降雨量(mm)	0.0	2.0	2.5	1.0	3.5	12.5	197.5	115.5	39.0	146.5	11.0	0.0	0.5	54.5	0.0

月 日	6/20	6/21	6/22	6/23	6/24	6/25	6/26	6/27	6/28
平均気温(℃)	26.7	27.0	27.1	27.3	27.2	27.5	27.7	27.4	27.6
降雨量(mm)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

観測地点:沖縄県南城市玉城糸数のアメダスデータ

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、葉害の判断方法・時期を記載)

- (調査月日)薬効試験:6 月 28 日(最終散布 7 日後)
- 葉害試験:6 月 14 日(2 回目散布前)、6 月 21 日(3 回目散布前)、6 月 28 日(最終散布 7 日後)
- (調査方法)薬効は、各区全株について、中位〜下位葉の範囲から任意に 10 葉選び、発病程度別に発病率率、発病度を調査した。防除価は発病度の平均値から求めた。
- 発病指数
- 指数 0: 発病なし。1: 発病面積が 5%未満を占める。2: 発病面積が 5%以上 25%未満占める。3: 発病面積が 25%以上 50%未満占める。4: 発病面積が 50%以上占める。
- 発病度 = Σ (程度別発病葉数 × 指数) × 100 ÷ (調査葉数 × 4)
- 葉害は、茎葉を対象に、散布時と調査時に肉眼により観察し、葉害症状の有無を以下の内容で観察した。
- －:葉害を認めない。+:軽微な葉害症状を認める。++:中程度の葉害症状を認める。+++ :重度の葉害症状を認める。

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 うどんこ病 *Podosphaera xanthii*

試験場名 沖縄県農業研究センター

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

なし。

3. 試験成績

薬効試験

供試薬剤	希釈 倍率	連制	調査 葉数	程度別発病葉数					発病葉 率 (%)	発病度	防除価
				0	1	2	3	4			
274)ピタイチ グリセリンクエン酸脂肪酸エステ ル 50% Lot.No. 27.104104N	500倍	I	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	100.0
		II	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		III	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		平均	100						0.0	0.0	
対)ムシラップ ソルビタン脂肪酸エステル 70% Lot.No. 28.1023J301E	500倍	I	100	96	2	2	0	0	4.0	1.5	98.9
		II	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		III	100	100	0	0	0	0	0.0	0.0	
		平均	100						1.3	0.5	
無処理	—	I	100	14	9	54	23	0	86.0	46.5	—
		II	100	0	2	94	4	0	100.0	50.5	
		III	100	7	17	68	8	0	93.0	44.3	
		平均	100						93.0	47.1	

防除価は発病度の平均値から算出した。

薬害試験

供試薬剤	処理方法	連制	調査月日		
			6/14	6/21	6/28
274)ピタイチ	500 倍	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—
対)ムシラップ	500 倍	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—
無処理	—	I	—	—	—
		II	—	—	—
		III	—	—	—

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

本試験では6月6日に下位葉で初発が確認され、当日から散布を開始した。発病は急速に進展した。最終調査時の無処理の発病葉率は93.0%、発病度は47.1と多発生であった。その条件下で対照のムシラップは高い防除効果を示した。

1)ピタイチ 500 倍 (BAA—)

本剤の500倍散布は、対照のムシラップ500倍散布と比較してほぼ同等の効果を示し、無処理と比較して効果は高い。実用性は高いと思われる。薬害および汚れは認められなかった。

担当者氏名 濱島朗子

1. 試 験 目 的 防除効果及び被害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町
- 対 象 病 害 虫 発 生 状 況 中発生(自然発生, 初発 6 月 28 日)

耕種概要

品種:北進 播種日:2024 年 5 月 31 日 定植日:6 月 18 日
栽植距離:畝間 130cm 株間 40cm 1 条植え 施設栽培 土性:砂壤土
試験期間中の防除薬剤:なし 施肥:鹿児島県栽培基準に準じた。

区制・面積・試験区の構成 1 区 6.76 m² (1.3m×5.2m) 13 株/区 3 連制

1-Ⅲ	2-Ⅲ	3-Ⅲ		2-Ⅱ	3-Ⅱ	1-Ⅱ		3-Ⅰ	1-Ⅰ	2-Ⅰ				

1:ハッピー乳剤, 2:モレスタン水和剤, 3:無処理
Ⅰ, Ⅱ, Ⅲは連制を示す



処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 6 月 28 日, 7 月 5 日, 12 日, 19 日(4 回)
(処理時の作物のステージ) 生育期～収穫開始直前
(処理方法) 背負い式電動噴霧器(HG-KBS12L)を用いて, 200L/10a の割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設栽培のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8	7/9	7/10	7/11	7/12
平均気温(℃)	23.8	24.0	28.9	28.2	30.2	30.0	29.2	28.9	29.6	29.8	29.8	28.7	28.8	27.2	26.2
月日	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22	7/23	7/24	7/25	7/26	
平均気温(℃)	24.7	26.6	23.9	28.0	29.3	29.2	29.0	30.1	29.5	29.1	29.3	29.4	28.4	28.0	
観測地点:	試験施設内 太枠内は散布日を示す														

調査月日・方法

(調査月日) 薬効試験:2024 年 7 月 12 日(2 回目散布 7 日後), 19 日(3 回目散布 7 日後), 26 日(4 回目散布 7 日後)
薬害試験:2024 年 7 月 5 日, 12 日, 19 日, 26 日
(調査方法) 各区両端を除く 11 株の第 2 葉以上の本葉の発病を以下の基準に従って調査し, 発病葉率と発病度を算出し, 発病度から防除価を求めた。
発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:病斑面積が葉面積の 5～25%未満を占める
3:病斑面積が葉面積の 25～50%未満を占める 4:病斑面積が葉面積の 50%以上を占める
発病度 = Σ (指数×程度別発病葉数) ×100/(調査葉数×4) 防除価=100－処理区の発病度/無処理区の発病度×100
薬害評価にあたっては, 薬効調査時に茎葉の薬害症状を以下の基準により調査した。
－:薬害を認めない。+:軽微な薬害症状を認める。++:中程度の薬害症状を認める。+++ :重度の薬害症状を認める。

その他

6 月 28 日に自然発生で第 1 葉の本葉に初発を確認し, 同日に全株の発病葉を含む第 1 葉の本葉を除去して試験を開始した。

3. 試 験 成 績

供試薬剤	処理方法※	連制	7/12(2回目散布7日後)							7/19(3回目散布7日後)							7/26(4回目散布7日後)							被害 7/5,12, 19,26			
			調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率	発病 度	調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率	発病 度	防除価	調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率		発病 度	防除価	
				0	1	2	3				4	0	1	2					3	4	0	1					2
199) ハッパ乳剤 なたね油90.0%	500倍 散布	I	123	123	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	132	130	2	0	0	0	1.5	0.4	97.5
		II	107	107	0	0	0	0	0	0	128	127	1	0	0	0	0.8	0.2	132	130	2	0	0	0	1.5	0.4	
		III	123	123	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	
		平均							0	0						0.3	0.1	96.9						1.0	0.3		
Lot.5A301F 対)モレスタン水和剤 キノキサリン系25.0%	3000倍 散布	I	120	120	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	132	131	1	0	0	0	0.8	0.2	99.2
		II	135	135	0	0	0	0	0	0	132	131	1	0	0	0	0.8	0.2	132	131	1	0	0	0	0.8	0.2	
		III	119	119	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	132	132	0	0	0	0	0	0	
		平均							0	0						0.3	0.1	96.9						0.5	0.1		
Lot.05073 無処理	—	I	126	126	0	0	0	0	0	0	132	118	14	0	0	0	10.6	2.7	132	37	89	6	0	0	72.0	19.1	
		II	138	137	1	0	0	0	0.7	0.2	132	119	13	0	0	0	9.8	2.5	132	103	29	0	0	0	22.0	5.5	
		III	114	113	1	0	0	0	0.9	0.2	132	108	24	0	0	0	18.2	4.5	132	80	46	5	1	0	39.4	11.2	
		平均							0.5	0.1						12.9	3.2							44.4	11.9		

※散布日：2024年6月28日，7月5日，12日，19日

※散布日 : 2024年6月28日, 7月5日, 12日, 19日

4. 考 察

4 回目散布 7 日後の調査では、無処理区では発病葉率 44.4%、発病度 11.9 と中発生となり、対照薬剤では防除価が 99.2 と高い効果が認められていたため、本試験による効果の判定は可能と判断した。効果の判定は、4 回目散布 7 日後の 7 月 26 日の発病度から算出した防除価で評価した。

199) ハッパ乳剤 500 倍散布 BAA-

本剤の 500 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較して同等の効果が認められ、無処理区と比較して効果は高い。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Oidium*属菌

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生 4月30日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:エクセレント620 播種:2024年3月26日 定植:4月23日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間40cm
2条植 条間:50cm 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:5月7日ジャストフィットフロアブル・モスピラン顆粒水溶剤・
ディアナSC 施肥(10a当たり):くみあい有機入りペレット888(8-8-8)88kg、CDU複合燐加安特S222(12-12-12)58kg
その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 3.2㎡(1.6m×2.0m) 10株 3連制

1-I	3-I	2-I			5-II			4-III
		4-I	3-II		1-II	5-III		2-III
	5-I		4-II	2-II		3-III	1-III	

1:ハツパ乳剤
2:ピタイチ
3:アカリタッチ乳剤(対照)
4:モレスタン水和剤(参考)
5:無処理
I、II、IIIは連制を示す
空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年5月1日、8日および15日の計3回
(作物のステージ) 初回散布時:生育期(草丈60cm、6.5葉期)
最終散布時:雌花開花期(草丈180cm、17~18葉期)
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて160~250L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均気温(℃)	22.6	23.2	24.6	23.2	23.7	22.7	23.6	22.4	23.5	23.7	24.9
月日	5/12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平均気温(℃)	22.8	22.6	24.6	24.7	23.7	24.3	24.7	20.6	24.8	25.3	22.8

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効薬害試験:5月8日(初回散布7日後)、15日(2回目散布7日後)、22日(最終散布7日後)
(調査方法) 各区全株について5月8日は第4~6葉(3葉/株)、15日は第5~12葉(8葉/株)、22日は第6~15葉(10葉/株)を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める
2:同5~25%未満を占める 3:同25~50%未満を占める 4:同50%以上を占める
発病度 = Σ(発病指数別葉数×発病指数)÷(調査葉数×4)×100
防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は茎葉を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
-:薬害を認めない ++:軽微な薬害症状を認める +++:中程度の薬害症状を認める
++++:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

3. 試 験 成 績

薬効薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	5/8(初回散布7日後)								5/15(2回目散布7日後)									
			調査葉位:第4~6葉								調査葉位:第5~12葉									
			調査 葉数	発病指数別葉数					発病葉 率(%)	発病度	防除価	調査 葉数	発病指数別葉数					発病葉 率(%)	発病度	防除価
199)ハッパバ乳剤 なたね油 90.0%	500倍 散布	I	30	29	1	0	0	0	3.3	0.8		80	73	7	0	0	0	8.8	2.2	
		II	30	29	1	0	0	0	3.3	0.8		80	72	8	0	0	0	10.0	2.5	
		III	30	29	1	0	0	0	3.3	0.8		80	74	6	0	0	0	7.5	1.9	
		平均							3.3	0.8	75.8							8.8	2.2	82.8
274) ビタイチ グリセリンケン酸脂肪酸 エステル 50.0%	500倍 散布	I	30	29	1	0	0	0	3.3	0.8		80	46	32	2	0	0	42.5	11.3	
		II	30	27	3	0	0	0	10.0	2.5		80	60	20	0	0	0	25.0	6.3	
		III	30	27	3	0	0	0	10.0	2.5		80	57	23	0	0	0	28.8	7.2	
		平均							7.8	1.9	42.4							32.1	8.3	35.2
対)アカリタッチ乳剤 プロピレングリコールモノ/脂肪酸 エステル 70.0%	2000倍 散布	I	30	30	0	0	0	0	0	0		80	75	5	0	0	0	6.3	1.6	
		II	30	30	0	0	0	0	0	0		80	74	6	0	0	0	7.5	1.9	
		III	30	30	0	0	0	0	0	0		80	80	0	0	0	0	0	0	
		平均							0	0	100							4.6	1.2	90.6
参)モレスタン水和剤 キ/キサリン系 25.0%	3000倍 散布	I	30	30	0	0	0	0	0	0		80	80	0	0	0	0	0	0	
		II	30	30	0	0	0	0	0	0		80	80	0	0	0	0	0	0	
		III	30	30	0	0	0	0	0	0		80	80	0	0	0	0	0	0	
		平均							0	0	100							0	0	100
無処理		I	30	27	3	0	0	0	10.0	2.5		80	45	28	7	0	0	43.8	13.1	
		II	30	24	6	0	0	0	20.0	5.0		80	40	38	2	0	0	50.0	13.1	
		III	30	27	3	0	0	0	10.0	2.5		80	45	31	4	0	0	43.8	12.2	
		平均							13.3	3.3								45.9	12.8	

供試薬剤	処理方法	連制	5/22(最終散布7日後)								薬害		
			調査葉位:第6～15葉								調査日:5/8,15,22		
			調査 葉数	発病指数別葉数					発病葉 率(%)	発病度	防除価	下位葉	中～上位葉
199) ハッパ乳剤	500倍 散布	I	100	46	51	3	0	0	54.0	14.3		—	—
		II	100	53	43	4	0	0	47.0	12.8		—	—
		III	100	57	43	0	0	0	43.0	10.8		—	—
		平均							48.0	12.6	70.8		
274) ビタイチ	500倍 散布	I	100	10	32	55	3	0	90.0	37.8		—	—
		II	100	30	39	30	1	0	70.0	25.5		—	—
		III	100	22	40	38	0	0	78.0	29.0		—	—
		平均							79.3	30.8	28.5		
対) アカリタッチ乳剤	2000倍 散布	I	100	68	26	6	0	0	32.0	9.5		—	—
		II	100	73	24	3	0	0	27.0	7.5		—	—
		III	100	88	11	1	0	0	12.0	3.3		—	—
		平均							23.7	6.8	84.2		
参) モレスタン水和剤	3000倍 散布	I	100	100	0	0	0	0	0	0		+	—
		II	100	100	0	0	0	0	0	0		+	—
		III	100	100	0	0	0	0	0	0		+	—
		平均							0	0	100		
無処理		I	100	8	29	40	18	5	92.0	45.8			
		II	100	5	32	52	11	0	95.0	42.3			
		III	100	7	29	56	8	0	93.0	41.3			
		平均							93.3	43.1			

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

試験開始時の発病は子葉から第3葉までに認められた。その後は速やかに上位葉へと進展し、調査時には無処理区において多発生となった。対照薬剤のアカリタッチ乳剤は防除効果が認められた。参考薬剤のモレスタン水和剤は高い防除効果が認められた。なお、モレスタン水和剤区において初回散布後に下位葉の一部に淡黄色の斑点を生じる薬害が認められたが、症状の程度は軽微であり生育に影響はなかった。

防除効果の判定は5月22日の結果をもとに行った。

199) ハッパ乳剤 500倍散布 CBB-

本剤は、対照薬剤のアカリタッチ乳剤2000倍散布と比較し防除効果はやや劣り、無処理と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

274) ピタイチ 500倍散布 DDD-

本剤は、対照薬剤のアカリタッチ乳剤2000倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が低かった。実用性はないと思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 甚発生(接種) 11月24日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:雅秋冬 412 播種:2023年9月27日 定植:10月24日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間50cm

2条植 主枝1本仕立 立体栽培 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:なし 施肥(/10a):堆肥3000kg、苦土石灰

140kg、くみあい有機入りベレット888(8-8-8)75kg、CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)50kg その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 6.4 m²(1.6m×4.0m) 16株 3連制

	3-I	2-III	1-III
●	●	●	●
1-I	2-II	3-II	
●	●	●	●
2-I		1-II	3-III

1:アフエットフロアブル

2:スミレックス水和剤

3:無処理

I、II、IIIは連制を示す

空欄は他剤散布区を示す

●:伝染源を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2023年11月15日および24日の計2回

(作物のステージ) 初回散布時:雌花交配始期(草丈120~150cm)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1500Li、丸山製作所)を用いて260~300L/10aの割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	11/15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	12/1
平均気温(℃)	22.2	20.8	20.8	21.7	21.9	22.1	22.4	22.9	22.9	21.1	21.2	20.3	20.7	19.9	19.5	20.2	19.6

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:2023年12月1日(最終散布7日後)

薬害試験:2023年11月24日、12月1日

(調査方法) 各区全株について、果実の発病の有無を調査し発病果率を算出した。また、茎葉の発病箇所を調査し、株当たり発病箇所数を算出した。

発病株率、発病果率、株当たり発病箇所数の平均値よりそれぞれの防除価を求めた。

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

11月16日(初回散布翌日)に、感染源を施設内通路8箇所に均等に設置した(区制・面積・試験区の構成参照)。感染源は予めプラスチックカップに土壌を充填し菌核を浅く埋没させ、子のう盤を形成させ作製した。菌核の作製には日植防宮崎保存菌株(MSS0204)を使用した。

3. 試 験 成 績

薬効および薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査 株数	発病 株数 ¹⁾	発病株 率(%)	防除価	調査 果数	発病 果数	発病果 率(%)	防除価	発病箇 所数	株当たり 発病箇 所数 ²⁾	防除価	薬害 ³⁾
70) アフェットフロアブル ベンチオビダト 20.0%	2000倍 散布	I	15 ⁴⁾	6	40.0		51	4	7.8		6	0.38		—
		II	16	11	68.8		22	5	22.7		14	0.88		—
		III	16	12	75.0		49	21	42.9		7	0.44		—
		平均			61.3	38.7	40.7		24.5	55.9		0.57	93.2	
対) スミレックス水和剤 プロシドン 50.0%	2000倍 散布	I	16	2	12.5		41	1	2.4		2	0.13		—
		II	16	1	6.3		49	0	0		2	0.13		—
		III	16	4	25.0		47	4	8.5		1	0.06		—
		平均			14.6	85.4	45.7		3.6	93.5		0.11	98.7	
無処理		I	16	16	100		47	26	55.3		117	7.31		
		II	16	16	100		29	16	55.2		171	10.69		
		III	16	16	100		39	22	56.4		113	7.06		
		平均			100		38.3		55.6			8.35		

¹⁾ 果実または茎葉のどちらか一方でも発病した株を発病株とした。²⁾ 発病箇所数に果実の発病は含まない。³⁾ 薬害調査日: 11/24, 12/1⁴⁾ 試験開始前の栽培管理中に主枝が折損したため1区15株とした。

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

接種条件下で試験を実施した。初発を初回散布 9 日後(11 月 24 日)に葉で確認した。その後は急激に発病が増加し、調査時には無処理区において果実、茎葉の発病ともに甚発生となった。

対照薬剤のスマレックス水和剤は果実、茎葉ともに高い防除効果が認められた。

防除効果の判定は発病果率および株当たり発病箇所数の両結果をもとに行った。

70) アフェットフロアブル 2000 倍 散布 DBB-

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のスマレックス水和剤 2000 倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名 つる枯病・*Didymella bryoniae*

試験場名 宮崎県総合農業試験場 担当者氏名 加治佐 光洋

1. 試 験 目 的 防除効果及び被害の検討
2. 試 験 方 法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町 宮崎県総合農業試験場
対 象 病 害 虫 発 生 状 況 少発生（接種）

耕種概要
品種:アールスメロン 412 播種:2023 年 9 月 11 日 定植:2023 年 10 月 5 日
施設栽培(ビニルハウス) 施肥:県慣行に準じた
栽植距離:畝幅 160 cm×株間 35 cm 土性:埴壌土
試験期間中の防除薬剤:10 月 24 日トランスフォームフロアブル、11 月 12 日イデグリーン水和剤、12 月 4 日パンチョ TF 顆粒水和剤

区制・面積・試験区の構成 1区 5.1 m² (1.6m×3.2m) 9 株 3 連制

2-I	1-III	3-II
1-II	3-III	2-III
3-I	2-II	1-I

1: ベジターボ DF2000 倍 2: 対照(ダコニール 1000 1000 倍) 3: 無処理
I、II、IIIは連制を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響
(処理年月日) 2023 年 12 月 27 日、2024 年 1 月 2 日、1 月 9 日 計 3 回散布
(作物のステージ) 果実肥大期
(処理方法) 所定の濃度に希釈した薬液を、背負式バッテリー動力噴霧機を用いて、10a あたり 200L 散布した。
(処理前後の降雨) 施設栽培のため影響なし

試験期間中の気象条件

月/日	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31	1/1	1/2	1/3	1/4	1/5	1/6
平均気温 (℃)	7.8	9.9	9.8	10.3	12.9	8.7	9.8	9.9	7.8	8.6	11.8
降水量 (mm)	0.0	0.0	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

月/日	1/7	1/8	1/9	1/10	1/11	1/12	1/13	1/14	1/15	1/16
平均気温 (℃)	8.7	5.5	7.5	9.3	9.3	11	10.4	9.7	12.4	7.1
降水量 (mm)	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

観測地点:宮崎気象台 太枠は散布日

調査月日・方法

(調査月日)薬効試験:2024 年 1 月 16 日(最終散布 7 日後)、薬害試験:2024 年 1 月 2、9、16 日

(調査方法) 各区 27 株(9 株×3 連)について、各株の 12 葉を対象に下記の発病指数別に調査し、
発病葉率と発病度を算出した。防除価は発病度の平均から求めた。
【発病指数】 0: 発病を認めない 1: 病斑が葉面積の 5%未満 2: 病斑が葉面積の 5%以上～25%未満
3: 病斑が葉面積の 25%以上 50%未満
4: 病斑が葉面積の 50%以上
【発 病 度】 { Σ (発病指数別葉数×発病指数)×100 } ÷ (総調査葉数×4)
薬害は、茎葉と果実を対象に、調査時に以下の基準で肉眼により観察した。
【調査基準】-:薬害を認めない、+:軽微な薬害、++:中度の薬害、+++ :重度の薬害

その他

12 月 19 日に、長さ 5cm 程度にカットした県内採取のきゅうり罹病茎を各試験区境に吊るし感染源とした。接種後 3 日間
は通路散水し、感染・発病を促した。

3. 試 験 成 績

供試薬剤	希釈 倍数	調査 葉数	程度別発病葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	葉害 (1/2, 9, 16)
			0	1	2	3	4				
165) ベジターボDF	2000倍	I	108	104	1	1	2	0	3.7	2.1	—
ボリキンD亜鉛塩10%		II	108	101	5	2	0	0	6.5	2.1	—
(ボリキンDとして89,000PsDu/g)		III	108	104	4	0	0	0	3.7	0.9	—
LOT. 220210T		平均						4.6	1.7	64.6	
対) ダコニール1000	1000倍	I	108	100	5	2	1	0	7.4	2.8	—
テトラクロインソフタロニトリル (TPN) 40.0%		II	108	101	5	2	0	0	6.5	2.1	—
		III	108	102	4	1	1	0	5.6	2.1	—
		平均						6.5	2.3	52.1	
無処理		I	108	95	4	5	3	1	12.0	6.3	
		II	108	97	7	2	1	1	10.2	4.2	
		III	108	96	8	3	1	0	11.1	3.9	
		平均						11.1	4.8		

4. 考 察

12月27日に初発生を確認し、その後少発生で推移した。効果判定は1月16日(3回目散布の7日後)の発病度から算出した防除価で評価した。

165) ベジターボ DF 2000 倍散布 (ABBー)

本剤の2000倍3回散布は、対照のダコニール1000の1000倍3回散布と比較し、防除効果はまさり、無処理区と比較して防除効果はある。実用性はあると考える。また、葉害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 つる枯病 *Didymella bryoniae*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場 担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 少発生(接種) 6月18日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)
品種:アールスメロン 播種:2024年4月12日 定植:5月9日 施設栽培 栽植距離:畝間160cm×株間40cm 2条植
条間:40cm 土性:壤土 試験期間中の防除薬剤:6月20日ライメイフロアブル・プロパティフロアブル・モスピラン顆粒水溶剤・
ディアナ SC 施肥、その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 4.5 m²(1.6m×2.8m) 14株 3連制

1-I			3-II	2-III	1:AKD-5195SC
	2-I		1-III	3-III	2:ダコニール1000(対照)
3-I	1-II	2-II			3:無処理

I、II、IIIは連制を示す
空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2024年6月5日、12日、24日および7月8日の計4回
(作物のステージ) 初回散布時:雌花開花期(草丈170cm)、最終散布時:果実肥大期(草丈180cm、摘芯)
(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて300L/10aの割合で散布した。
(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	6/5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
平均気温(℃)	24.0	22.1	24.1	23.9	24.0	25.1	25.5	24.3	27.4	30.5	26.9	31.3	24.9	26.9	29.5

月日	6/20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
平均気温(℃)	23.0	29.7	28.4	30.3	27.9	28.9	27.6	25.8	25.9	26.9	31.3

月日	7/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平均気温(℃)	30.8	33.7	34.7	35.6	35.4	35.9	35.2	35.9	35.5	32.5	28.9	27.7	26.7	28.0	26.3

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:7月15日(最終散布7日後)
薬害試験:6月12日、24日、7月8日、15日
(調査方法) 各区全株について、地際部から上位15節の発病の有無を調査し、発病節率を算出した。発病節率の平均より無処理に対する防除価を求めた。

防除価 = (1-処理区平均発病節率÷無処理区平均発病節率)×100

薬害は茎葉および果実を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。
-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める
+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

6月6日(初回散布翌日)に、長さ15cm程度に切断したメロン罹病茎(柄子殻を形成)を各試験区境に1本ずつ吊るし感染源とした。これら罹病茎は2023年に場内ほ場より採取した。
6月29日(3回目散布5日後)には、前出の罹病茎20本を蒸留水15Lに3時間浸漬することで柄胞子の噴出を促したが、柄胞子の確認はできなかった。やむを得ず、罹病茎を浸した蒸留水15Lを試験作物に直接噴霧した(約50ml/株)。

3. 試 験 成 績

薬効および薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査 株数	発病 株数	発病株 率(%)	調査 節数	発病 節数	発病節 率(%)	防除価	薬害
										6/12,24,7/8,15
1) AKD-5195SC アミピリフェン 30%(w/w) Lot.No. BC-2	2000倍 散布	I	14	6	42.9	210	9	4.3		—
		II	14	2	14.3	210	3	1.4		—
		III	14	3	21.4	210	4	1.9		—
		平均			26.2			2.5	75.5	
対) ダコニール1000 TPN 40.0%	1000倍 散布	I	14	4	28.6	210	6	2.9		—
		II	14	1	7.1	210	2	1.0		—
		III	14	4	28.6	210	7	3.3		—
		平均			21.4			2.4	76.5	
無処理		I	14	7	50.0	210	26	12.4		
		II	14	8	57.1	210	13	6.2		
		III	14	7	50.0	210	25	11.9		
		平均			52.4			10.2		

調査節位: 地際から上に15節

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

無発病の状態から試験を開始し、初発を6月18日(2回目散布6日後)に節で確認した。その後の病勢進展は緩慢であったが、調査時には地際部付近を中心に節の発病が広がり、無処理区において少発生となった。なお、節の発病による株の萎凋は認められず、葉の発病もほぼ認められなかった。このような条件で対照薬剤のダコニール 1000 は防除効果が認められた。

1) AKD-5195SC 2000 倍 散布 BBB-

本剤散布は、対照薬剤のダコニール 1000 1000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して防除効果が認められた。実用性はあると思われる。

薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 一般社団法人日本植物防疫協会宮崎試験場

対象病害虫発生状況 中発生 既発条件。

耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:アールスメロン 播種:2024年5月9日 定植:6月4日 施設栽培 土性:壤土 栽植距離:畝間160cm 株間40cm

2条植え 立体栽培 施肥(10a当たり):EC値が十分量を示したため施肥なし 試験期間中の防除薬剤:6月14日トランスフォー
ムフロアブル、チェス顆粒水和剤 その他一般管理は慣行に従った。区制・面積・試験区の構成 1区 3.2 m²(1.6m×2.0m) 10株 3連制モレスタン水和剤:1区 2.56m²(1.6m×1.6m) 8株 3連制

1-I	2-II	3-III	4-III
-----	------	-------	-------

1:ピタイチ

2:アカリタッチ乳剤

2-I	3-II	4-II	1-III
-----	------	------	-------

3:モレスタン水和剤

4:無処理

3-I	4-I	1-II	2-III
-----	-----	------	-------

I、II、IIIは連制を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024年6月13日、20日および27日の計3回。

(作物のステージ) 初回処理時:草丈25~30cm、5葉期、最終処理時:草丈110~120cm、19~20葉期

(処理方法) 背負式バッテリー噴霧機(MSB1500LiおよびMSB1510Li、丸山製作所)を使用して、10a当たり130~210Lの割合
で散布を行った。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	6/13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
平均気温(℃)	27.4	30.5	26.9	31.3	24.9	26.9	29.5	23.0	29.7	28.4	30.3
月日	6/24	25	26	27	28	29	30	7/1	2	3	4
平均気温(℃)	27.9	28.9	27.6	25.8	25.9	26.9	31.3	30.8	33.7	34.7	35.6

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:7月4日(最終処理7日後)

薬害試験:6月20日(初回処理7日後)、27日および7月4日

(調査方法) 各試験区全株の第8~17葉を対象に、発病の有無を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率と発病
度を算出した。発病度の平均値より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の5%未満を占める 2:同 5~25%未満を占める

3:同 25~50%未満を占める 4:同 50%以上を占める

発病度 = { Σ (発病指数別葉数×発病指数) × 100 } ÷ (総調査葉数×4)

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は、茎葉を対象に、処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

-:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

育苗期間中に発病を認めたため、5月28日にモレスタン水和剤を散布した。

3. 試験成績

薬効薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害※
				0	1	2	3	4				
274) ピタイチ グリセリンクエン酸脂肪酸エステル 50.0% Lot.No. 27.10 4104N	500倍 散布	I	100	51	43	6	0	0	49.0	13.8		—
		II	100	44	51	5	0	0	56.0	15.3		—
		III	100	63	33	4	0	0	37.0	10.3		—
		平均							47.3	13.1	63.6	
対) アカリタッチ乳剤 プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル 70.0%	2000倍 散布	I	100	90	10	0	0	0	10.0	2.5		—
		II	100	62	32	6	0	0	38.0	11.0		—
		III	100	62	37	1	0	0	38.0	9.8		—
		平均							28.7	7.8	78.3	
参考) モレスタン水和剤 キタザリン系25.0%	3000倍 散布	I	80	80	0	0	0	0	0	0		—
		II	80	80	0	0	0	0	0	0		—
		III	80	80	0	0	0	0	0	0		—
		平均							0	0	100	
無処理		I	100	23	40	29	8	0	77.0	30.5		
		II	100	27	46	20	7	0	73.0	26.8		
		III	100	1	21	55	20	3	99.0	50.8		
		平均							83.0	36.0		

※薬害調査日:6月20日、27日、7月4日

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

既発条件で試験を開始した。試験開始時には第1～3葉に病斑が見られた。その後、株の生育とともに徐々に上位葉へと発病が進展し、7月4日の調査時には無処理区の発病程度は発病葉率83.0%、発病度36.0と中発生となった。

以上のような条件において、対照薬剤のアカリタッチ乳剤は防除効果が認められた。また、参考薬剤のモレスタン水和剤は高い防除効果が認められた。

274) ピタイチ 500倍散布 CCC-

本剤の500倍散布は、対照薬剤のアカリタッチ乳剤2000倍散布と比較して防除効果がやや劣り、無処理区と比較して防除効果が認められたがその程度はやや低かった。防除効果はやや低い実用性はあると思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*

試験場名 一般社団法人日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 和田倉誠也、福元義人、吉村拓真

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 日植防宮崎 場内圃場

対象病害虫発生状況 多発生 11 月 5 日に初発を認めた。

耕種概要 (品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:雅秋冬 412 播種:2023 年 10 月 13 日 定植:11 月 8 日 施設栽培 栽植距離:畝間 160cm×株間 40cm 2 条植
 条間:40cm 土性:砂壤土 試験期間中の防除薬剤:11 月 5 日(育苗期)フォリオゴールド 施肥(10a 当たり):堆肥 3000kg、
 苦土石灰 140kg、くみあい有機入りペレット 888(8-8-8)63kg、CDU 複合燐加安特 S222(12-12-12)42kg
 その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1区 3.8 m²(1.6m×2.4m) 12 株 3 連制

1-I	5-I		3-II	6-II		4-III	2-III
3-I		2-I	4-II	1-II	5-III	6-III	
6-I	4-I	5-II	2-II		3-III	1-III	

1:AKD-5195SC
 2:フセキワイドフロアブル
 3:フセキエースフロアブル
 4:SB-390WG
 5:モレスタン水和剤(対照)
 6:無処理

I、II、IIIは連制を示す
 空欄は他剤散布区を示す

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

(処理年月日) 2023 年 11 月 17 日、24 日および 12 月 1 日の計 3 回

(作物のステージ) 初回散布時:生育期(草丈 30~40cm、4~5 葉期)、最終散布時:生育期(草丈 100~120cm、14~15 葉期)

(処理方法) 背負式バッテリー動力噴霧機(MSB1510Li、丸山製作所)を用いて 160~260L/10a の割合で散布した。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	11/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
平均気温(℃)	20.8	21.7	21.9	22.1	22.4	22.9	22.9	21.1	21.2	20.3	20.7	19.9	19.5	20.2

月日	12/1	2	3	4	5	6	7	8
平均気温(℃)	19.6	20.4	20.7	20.2	16.3	19.9	20.4	19.1

観測地点:日植防宮崎試験場内近隣施設

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:12 月 8 日(最終散布 7 日後)

薬害試験:11 月 24 日、12 月 1 日、8 日(最終散布 7 日後)

(調査方法) 各区全株について、第 6 葉から上に 9 葉の発病を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病率および発病度を算出した。発病度の平均より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める
 2:同 5~25%未満を占める 3:同 25~50%未満を占める 4:同 50%以上を占める
 発病度 = $\Sigma(\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数}) \div (\text{調査葉数} \times 4) \times 100$
 防除価 = $(1 - \text{処理区平均発病度} \div \text{無処理区平均発病度}) \times 100$

薬害は茎葉を対象に、肉眼により観察し薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

—:薬害を認めない ++:軽微な薬害症状を認める +++:中程度の薬害症状を認める
 ++++:重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

育苗後期の 11 月 5 日に初発を認めたものの、株が小さかったことから薬剤防除を行った(フォリオゴールド)。防除後の発病は 11 月 17 日に第 3~4 葉で認められた。

3. 試 験 成 績

薬効および薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病率 (%)	発病度	防除価	薬害 11/24,12/1,8
				0	1	2	3	4				
1) AKD-5195SC 新規化合物 30%(w/w) Lot.No. BC-1	2000倍 散布	I	108	98	9	1	0	0	9.3	2.5		—
		II	108	103	5	0	0	0	4.6	1.2		—
		III	108	105	3	0	0	0	2.8	0.7		—
		平均	108.0						5.6	1.5	97.1	
56) フセキワイドフロアブル ピリダクロメチル 11.7% イミノタジニアルヘンシル酸塩 10.0% Lot.No. BJ22-4F2301	1000倍 散布	I	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		II	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	108.0						0	0	100	
57) フセキエースフロアブル ピリダクロメチル 23.3% メバニピリム 18.0% Lot.No. BJ22-5F2301	2000倍 散布	I	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		II	99※	99	0	0	0	0	0	0		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	105.0						0	0	100	
58) SB-390WG 既知化合物 82.5% Lot.No. M-22500	2000倍 散布	I	108	49	39	20	0	0	54.6	18.3		—
		II	108	55	52	1	0	0	49.1	12.5		—
		III	108	64	37	7	0	0	40.7	11.8		—
		平均	108.0						48.1	14.2	72.1	
対) モレスタン水和剤 キノキサリン系 25.0%	3000倍 散布	I	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		II	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		III	108	108	0	0	0	0	0	0		—
		平均	108.0						0	0	100	
無処理		I	108	22	16	19	26	25	79.6	53.7		
		II	108	11	25	43	18	11	89.8	48.4		
		III	108	14	22	33	25	14	87.0	50.7		
		平均	108.0						85.5	50.9		

※生育不良株を1株除いたため調査葉数が減少した。

4. 考 察 (判定した時期、判定記号を記載)

育苗期の防除後、再び発病がみられた 11 月 17 日より試験を開始した。開始時の発病は第 3～4 葉に病斑が 0～3 個程度ある極少発生であった。その後の発病は下位葉から上位葉へと進展し、調査時には無処理区において多発生となった。

このような条件で対照薬剤のモレスタン水和剤は高い防除効果が認められた。

1) AKD-5195SC 2000 倍 散布 BAA—

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較し防除効果はほぼ同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。薬害は認められなかった。

56) フセキワイドフロアブル 1000 倍 散布 BAA—

本剤の 1000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較し防除効果は同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。薬害は認められなかった。

57) フセキエースフロアブル 2000 倍 散布 BAA—

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較し防除効果は同等、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。薬害は認められなかった。

58) SB-390WG 2000 倍 散布 DCC—

本剤の 2000 倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤 3000 倍散布と比較し防除効果は劣り、無処理と比較して防除効果が認められるもののその程度はやや低かった。防除効果はやや低いものの実用性はありと思われる。薬害は認められなかった。

対象病害虫名・学名 うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*

試験場名 一般社団法人 日本植物防疫協会 宮崎試験場

担当者氏名 吉村拓真 和田倉誠也 福元義人

1. 試験目的 薬効および薬害の検討

2. 試験方法 試験地場所 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 11913 一般社団法人日本植物防疫協会宮崎試験場

対象病害虫発生状況 中発生(接種) 既発条件。

耕種概要(品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培(ビニルハウス・雨除け・トンネルなど)の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載)

品種:ひとりじめ HM 播種:2024 年 4 月 13 日 定植:5 月 14 日 施設栽培 土性:壤土 栽植距離:畝間 160cm 株間 40cm

2 条植え 半立体栽培 施肥(10a 当たり):くみあい有機入りペレット 888(8-8-8) 50kg CDU 複合燐加安特 S222 (12-12-12) 33kg

試験期間中の防除薬剤:6 月 4 日ディアナ SC、ウララ DF その他一般管理は慣行に従った。

区制・面積・試験区の構成 1 区 3.2 m²(1.6m×2.0m) 10 株 3 連制

✖ 1-I

4-I

✖ 3-I

✖

2-III

✖

✖

✖

✖ 2-II

1-II

✖ 3-II

✖ 4-III

✖ 2-I

✖

4-II

✖

1-III

✖ 3-III

1:AKD-5195SC
2:ベジターボDF
3:モレスタン水和剤
4:無処理
I、II、IIIは連制を示す。
空欄は他剤散布区を示す。
✖は6/10に設置した感染源を示す。

処理年月日、量、方法、処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨影響

(処理年月日) 2024 年 5 月 31 日、6 月 7 日、14 日および 21 日の計 4 回。

(作物のステージ) 初回処理時:つる長 170cm(地這い部 60cm、立体部 110cm)、14 葉(地這い部 5 葉、立体部 9 葉)

最終処理時:つる長 240cm(地這い部 60cm、立体部 180cm)、20~21 葉(地這い部 5 葉、立体部 15~16 葉)

(処理方法) 背負式バッテリー噴霧機(MSB1500Li および MSB1510Li、丸山製作所)を使用して、10a 当たり 160~250L の割合で散布を行った。

(処理前後の降雨影響) 施設のため降雨の影響はなかった。

試験期間中の気象条件

月日	5/31	6/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
平均気温(℃)	23.2	25.1	24.7	24.1	23.3	24.0	22.1	24.1	23.9	24.0	25.1	25.5	24.3	27.4	30.5

月日	6/15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
平均気温(℃)	26.9	31.3	24.9	26.9	29.5	23.0	29.7	28.4	30.3	27.9	28.9	27.6	25.8	25.9	26.9	31.3

観測地点:日植防宮崎試験場内施設 太枠は散布日を示す

調査月日・方法 (月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載)

(調査月日) 薬効試験:6 月 28 日(最終処理 7 日後)

薬害試験:6 月 7 日(初回処理 7 日後)、14 日、21 日および 28 日

(調査方法) 各試験区全株の、地這い部と立体部の境よりつる先方向の 10 葉を対象に、発病の有無を下記の基準に従って発病指数別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。発病度の平均値より無処理に対する防除価を求めた。

発病指数 0:発病を認めない 1:病斑面積が葉面積の 5%未満を占める 2:同 5~25%未満を占める

3:同 25~50%未満を占める 4:同 50%以上を占める

発病度 = { ∑ (発病指数別葉数×発病指数) ×100 } ÷ (総調査葉数×4)

防除価 = (1-処理区平均発病度÷無処理区平均発病度)×100

薬害は、茎葉を対象に、処理時と調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で評価した。

ー:薬害を認めない +:軽微な薬害症状を認める ++:中程度の薬害症状を認める

+++ :重度の薬害症状を認める

その他 (特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載)

6月10日にすいか罹病苗を「区制・面積・試験区の構成」で図示した位置の緩衝株の株元に設置し、接種を行った。罹病苗は場内で自然発生したすいか罹病葉を用いて作製した。

3. 試験成績

薬効薬害調査結果

供試薬剤	処理方法	連制	調査葉数	発病指数別葉数					発病葉率 (%)	発病度	防除価	薬害※
				0	1	2	3	4				
1) AKD-5195SC アミピリフェン30%(w/w) Lot.No. BC-2	2000倍 散布	I	100	88	12	0	0	0	12.0	3.0		—
		II	100	94	6	0	0	0	6.0	1.5		—
		III	100	97	3	0	0	0	3.0	0.8		—
		平均							7.0	1.8	93.9	
220) ベジターボDF ポリオキシンド亜鉛塩10.0% (ポリオキシンドとして89,000PsDu/g) Lot.No. 220210T	2000倍 散布	I	100	76	23	1	0	0	24.0	6.3		—
		II	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3		—
		III	100	95	5	0	0	0	5.0	1.3		—
		平均							10.0	2.6	91.2	
対) モレスタン水和剤 キキザリン系 25.0%	3000倍 散布	I	100	98	2	0	0	0	2.0	0.5		—
		II	100	99	1	0	0	0	1.0	0.3		—
		III	100	100	0	0	0	0	0	0		—
		平均							1.0	0.3	99.0	
無処理		I	100	3	64	32	1	0	97.0	32.8		
		II	100	0	57	40	3	0	100	36.5		
		III	100	25	73	2	0	0	75.0	19.3		
		平均							90.7	29.5		

※薬害調査日:6月7日、14日、21日、28日

4. 考察 (判定した時期、判定記号を記載)

既発条件で試験を開始した。試験開始時には第1～3葉に病斑が見られたが、その後の病勢が緩慢だったため、6月10日(2回目処理3日後)に接種を行った。その後、徐々に発病が進展し、6月28日の調査時には無処理の発病程度は発病葉率90.7%、発病度29.5と中発生となった。

以上のような条件において、対照薬剤のモレスタン水和剤は高い防除効果を示した。

1) AKD-5195SC 2000倍散布 BAA-

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤3000倍散布と比較してほぼ同等の防除効果を示し、無処理区と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。

220) ベジターボDF 2000倍散布 BAA-

本剤の2000倍散布は、対照薬剤のモレスタン水和剤3000倍散布と比較してほぼ同等の防除効果を示し、無処理区と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと思われる。

本剤散布による薬害は認められなかった。